中央公論

本號目次



（御馳走さま）

N. 176

中央公論



第十八年
第十號

金錢已上の勢力

翅なくして能く飛び、足なくして能く行く、昔は錢神論を著はして金錢の威力を嘆じたる者ありき。金錢の用、何の時何の處にか之なからん。今を去る三千餘年の古智一世を風動したりし蘇秦の豪を以てして勢威富厚豈に忽かせにすべけんやと長息したりと云はずや。況や今日金光の燦爛として多々增々赫耀する素より妨げざるのみならず、寧ろ大に其勢力を發揚し、國家を富まし個人を富まし、世界に富强の實を示すべきは今の優勝劣敗の時代に處するの道なり。唯、玆に最も注意すべきものあり、即ち金力のみ雄大にして更に何等他の勢力を認め得ざるの社會は腐敗の社會なり、墮落の社會なり、而して甚だ危險の社會なり、最も警戒を怠る可らざることなり。

伊達政宗曾て懷中より金錢を出して直江山城守兼續に示したりしにかゝる賤しきものを手にするは汚らはしきことなりとて之を扇に載せて見たりと云へり、是れ素より極端の一例なり。爾れども吾封建時代の武人はトニカク金錢に冷淡なりし、金錢を口にするは商人の事として之を耻ぢたりし、故に彼等の中には豆腐半丁、薪一把の價段をすら知らず、自家日常の出納勘定にすら當惑したりし東片僕を出し、一旦士の常職を解かるゝや又如何にも爲し能はず、空しく道途に窮死したりしものすら之れ多かりしは維新當初の士族輩の有樣なりしが、爾來玆に三十六年國民の思想風習月に移り日に變り、生存競爭の愈々增々劇甚を加ふると共に金の價を知らざるか如き迂濶漢は唯今日落語講談などの一

笑柄として僅かに聞くべきのみにして、實際世界に是の如き愚物の殆んど一人も見當らざるに至りしは國民の富に對する觀念の一大發達として素より賀せざる可らざるなり。

されば維新當初十四五年迄の官吏は卒ね豪奢を恣にし倨傲自ら喜びたるものありしが、金錢には寧ろ熱せざるもの多かりしが如し。殊に大久保内務卿の死したる時僅かに三百餘圓の餘財あり、西郷南洲の如きは二百圓の月給を持て餘したりと稱せらる。爾るに今日にては顯官貴紳殊に元老中老少老などゝ云ふべきものを始めとして、所謂藩閥の黨與卒ね巨万の財を擁し一世の富裕を誇らざるもの尠なく、殊に武人の錢を愛するは腐敗の一事として世の最も貶斥したる所なるにもかゝはらず、今日武人の吝嗇は殆んど常人よりも甚しく、元帥大將中將などにして五十万圓已上の財産を蓄へたるものすら亦必ずしも尠しとなさず。されば上の好む所下之より甚しきものあり、直接金錢と因緣深き農工商の實業に從事するの輩は勿論、政治家にても宗教家にても學者にても文人にても社會の老少男女一世を擧げて滔々として只是れ金と生死せんとするに至りたる又必ず怪しむを須ひず、彼の世の風波を多く經驗せざる中小學時代の少年すら早くも金モウケの念に忙殺されて、かりそめの讀書に先づ「成功」の如き「富の福音」の如き書籍を撰ばんとするもの增々多からんとすると云へり、人は是等の事實を以て直に世の腐敗墮落なりと絶叫せんとす、爾れどもある意味に於ては寧ろ是れ吾社會が實際的活動を始めたるの兆なり、金の價値を知らず富の運用を辨へざりし迂濶時代の漸く遠かり去るの兆なり、金と云へは直に腐敗を想ふ是れ封建時代迷妄なり、今の時に當りて國家にても個人にても金なくして如何せんや。廿五万噸の海軍を養ふも金の力なり、十二個師團の陸軍を養ふも金の力なり、露國と戰ふて勝つべきや否やも金の力如何に在り。況んや一合の米も金なくしては買ふ能はず、一枚の衣も金なくしては調ふ能はず、金は實に生活の第一要素ならずや。今日世界の强國と立て最も貧弱なる吾人日本國民は日本帝

國としても個人としても孳々として富の蓄積を研究するの不可なきのみならず、吾國民にして今日にても尙金錢に冷淡なること猶封建武士の如くなる者あらば、それこそ國家進運上の一大不幸なり。吾人と雖ども亦極端なる金錢論を唱るを辭せず。唯金錢の是の如く人世に必要あると共に人世は單に金錢のみにて生存せず、人世は決して是の如き淺薄なる卑俗なる下等なる勢力に依てのみ生存せず、更に大に金錢已上の大々勢力に待なたざる可らざるものあるり。

金の入用なる時代に勢力あるは當然なり。金持が金の力に依て社會に羽振をきかせ、肥馬輕車大道狹しと乘り行くも、高樓大厦一見貴族然と構へ込むも、又放縱淫蕩、氣儘氣放題の贅澤三昧をし悉すもそは素より吾人の間ふべき所に非ざるのみならず、その富の力に依て或は男爵となり、或は四位五位となり、或は貴族院議員となり、或は市町村區の名譽職となる、亦彼等に對する適當の報酬として彼此云ふべき限に非ず。橫濱の豪商平沼專三氏の素性を洗出し、其の今日の地位を云々するは謂なきなり。大倉喜八郎氏が北越の僻陬より起りたる一丁稚上りの身を以てし、城南雲を衝くばかりの邸宅を起し、貴衆兩院の議員を招して自家の富を誇示したるを以て、身分知らずと罵るものあらばそは嫉妬に過ぎず。然れども昔大納言が平氏に非ずは人にして人に非ずと云たりしが如く、今の時富豪に非ずは人にして人に非ず、如何なる人物にても如何なる能者にても金を多く有せざれば社會より一顧をすら與へられず、それのみならず殆ど人間視だにせられざらんとす、人物の價値は學識に非ず、德行に非ず、才能に非ず、藝術に非ず殆んど唯金を有するの多少に依て定められんとするに至りては、社會の亂調も亦甚しからずや。

是の如き社會に於ては如何なる大政治家となるよりも金持となるが遙かに名譽あるなり。如何なる大學者となるよりも富豪家と呼ばるゝが遙かに望まるゝなり。如何となれば金持は能く大政治家を自家の私臣の如くにし、叩頭百拜俯伏して命を聽かしめ得べく、大學者

をして能く其文章を曲けしめ、其學問を私せしめ得べければなり。唐の詩人は長安少年無遠圖。畢生唯有執金吾と慨したりしが今日の年少學士の多數は、畢生唯金をモウケ、否自らモウくるの力すら之あらずして、富豪に賛して自ら勞せずして一夜にして僥倖たる若旦那たらんとす、時代の風尙多く云はずして見るべきなり。

噫金なるかな、一枚の原稿も金の爲に非ずして書かざるは今日の文士なるものなり。一時間の授業も金の爲に非ずして教へざるは今日の教育家なる者なり。一席の説教も金の爲に非ずして試みざるは今日の宗教家なるものなり。而して一卷の書籍すら出世の爲め、金モウケの爲め、カーネーキーとなる爲に非ずんば讀まれざらんとす。噫氣品の涵養と趣味の上進も素より無用の事のみ、世は唯滔々汨々として致富の波濤に埋沒し去られんとす。

富は素より社會を組織する大なる原素なり、爾れ共政治も原素なり、宗教も原素なり、文學も原素なり、美術も原素なり而して是等は富よりも更に大なる、更に高尙なる原素なり、富は肉體なり、是等は精神なり、人は肉體によりて獸的に生活す、然ども精神によりて人の人たる所以を發揚す、富のみあり更に夫已上の活力なき社會は獸的社會なり、犬の社會なり、猫の社會なり。

嗚呼吾國をして犬の社會より猫の社會より脱却せしめよ。吾人は是れに於てか金錢已上の勢力を鼓吹せざる可からず知らず其鼓吹とは何ぞや。他なし宗教家をして其の本領を發揮せしむる是なり、學者をして其の本領を發揮せしむる是なり、文學家教育家美術家乃至總ての精神界をして物質的氣炎に反抗して、其の本領を發揮せしむる是なり。

想ふに吾國精神的勢力の銷沈して未だ大に振ふに至らざる社會があまりに獸化したるの致すところ、社會の罪素より輕からず、爾れども社會をして其の是の如く獸化せしめ、金の外に、物質力の外に一の勢力も一の標準もあらざる樣に思はしむるに至りたる、抑も亦精神的鼓吹者其の人の責なり。彼等は醉ふたる世人と共にあまりに醨を啜れり、濁りたる世人と共にあまりに

泥を揚げたり、彼等素より匏瓜に非ず、繫て食はざるを得ずと云へども、然れども其の本領を枉ぐ、精神を埋沒して迄も尙物質的勢力の足下に膝行せざる可らざるか、武士は食はねど高楊子と云へり、此を以て彼に代へ難し、其本領の爲に時に道途に餓死するの勇あるを要す。

夫れ精神的快樂に生活するものは時に物質的快樂を犠牲にせざる可らず、熊掌魚肉併せ得んこと難し、世を光明赫々たる淨土と化すべき宗教者の如きは勿論、文學者にても美術家にてもあまりに多く富むべき性質のものに非ず、寧ろ淸貧自から守り天職を行ふを以つて無上の快樂と爲すべきなり、古來の大宗教家爾かなり、大學者爾かなり、大藝術家爾かなり。乃至總ての精神的活動を爲したる仁人義士皆爾かりしなり、而るに今日の彼等は精神的快樂を犠牲となすも寧ろ物質的欲望を滿足するに汲々たり、彼等自ら滔々たる時流の壓迫を堰き敢へず、徒らに門戸を修飾し、柄にもなき奢侈贅澤を事とし、其食を甘滑にし、其の衣を華麗にし、他人がマナマの帽子を冠ふれば自分も亦冠ふらざる能はず、他人が夏外套を襲へば自分も亦襲はざる可らず、宴會にも出でざる可ず、訪問にも忙しからざる可ず、是の如しで彼等は金が足ざるなるなり、金が欲しくなる也、從て汲々として肩を聳かして金力の機嫌を迎へざる可らざるに至れるなり、是の如くして彼等の言ふべきことも言ひ得ず、彼等の行ふべきことも行ふ能はず、單に言ひ得ず、行ふ能はざるのみならず、眞風敎發揚の木鐸者として而も教科書事件の如き大々失態を現出して耻ぢざるに至れるなり。是の如くして彼等如何で物質の大勢力に反抗して自家の光明を發輝し得んや。吾國精神力の微弱なる原因なしと爲さゞるなり。

若し夫れこゝに一人にても半人にても其の信する所に厚く、其の守る所に固く、其の本能を發揮するに怠まざるものありとなさんか、世は如何に澆季の墮落世界なりとは云へども、未だ必ず彼を餓やすに至らざるべし、働くとも五千万人の多き、中に一個の風を聞て起つものなしとなさんや、彼の俳人正岡子規氏は肺を病

むこと十年、貧苦の間に蕭條たる死を遂けたり、而も一世の銅山王古河市兵衛氏の死よりも更に又大なる痛恨を以て送られたり。精神主義の首唱者清澤滿之れ氏の一生は實に悲惨の一なりし、爾れども現代雲の如く花の如き威權赫々たる各宗高僧諸氏のそれよりも更に多くの同情を以て惜まれたり。今の精神的勢力の認められざるを憂へず、如何に黄金万能の世の中なるかを憂へず、唯宗教に依て、學問に依て、文學に依て、美術に依て、黯然黄金の光を失はしめ、粛然世の富者の膽を寒からしむる底の勇者なく殉節者なきを憂となすのみ。嗚呼世の宗教を以て立てる人々よ、彼れ等富貴の徒輩が不義の榮華に沈酔して、日夜に地獄の業に齷齪し居るを如何に見んとするや。嗚呼世の學者よ文學者よ藝術家よ彼等凡俗の徒が紛々擾々として獸慾の外に何等高尚の生活を知らず、唯是れ酒、唯是れ色、五十年を空々漠々過するの憐れむ可きを覺へざるか、富貴浮雲の如し、黄金土芥のみ、汝の天職を顧みて猛然起つべきは今日に非ずや。一代聞書に曰く「堺の日向屋は三十万貫を持たれども死にたるが佛にはなり候まじ、大和の了妙はかたびら一つをも着かね候へども此の度佛になるべきよと仰られ候」と、是の如き意氣あり、宗教家として始て社會に超然獨歩し得べけんなり、而して是獨宗教家の意氣たるべきのみならず、教育家にも、文學家にも、乃至總ての精神的生活者が苟も金錢已上の光明を發輝するに於て寸時も之れなかる可らざるの意氣にして是の如き意氣あり、始めて其の信ずる所に向て勇進し得べきのみ。

吾人は素より吾國に多くのロスチャイルドやゼーグルやセシルローヅやロックフエラーやカーネーギ等の徒の増々顕出せんとを望む、爾れども彼等の多くなると共に時にナイチンゲールの如きホワード等の如き大慈善家の生ぜんことを欲し、時にケリーの如き、ウヰルバーフオース、ブース等の如き宗教的活動者の出てんことを欲し、ユーゴ、ゾラ、トルストイ等の如き彈力性に富みたる大文學者の輩出せんことを欲す、今日吾社會はあまりに物質的なり、あまりに黄金万能なり、

彈力もなければ、反響もなし、志士も見へざれは仁人も聞へず、唯蠢々として社會を領略するものは金の蟲、富の奴隷のみ、是の如くして社會の腐敗堕落せざるを望む糞桶に在て清潔を求むるなり、豈に夫れ得べけんや。若し夫れ吾國をしてネブカドネザルの王國たらしめず、ダリヤスカンビセス等の夢の迹を追はざらしめんと欲せば今一層精神化し、理想化し物質已上の勢力を張振せざる可らず、即ち世には金持の外に尙ぶべき勢力あり、金錢の外に尙別に個人を評價し、社會を評價すべき大々標準あることを最も明白に知らしめざる可らず。知らず宗教、學問、文學、美術等に貴を有するもの、猶躍一番此の犬の社會、猫の社會をして光る目的あり、進路ある眞人類社會と爲すの覺悟ありや如何。

我對清政策の缺點

（九頭龍）

覺めたる小見が眠れる巨人を喚び覺ましたりと、世界の各國より稱せられたる、日清の戰役を過ぎしこと既に十年。今や前途發達の希望に滿てる若き日本と、半死の病軀を抱いて殘喘を保てる老大の清國とは、共に其眞相を世界に曝露せられ、兎にも角にも日露開戰の稱呼すら、列國が其不釣合を怪むものなき我國の今日とはなれり。

さりながら、國の幼きそれ丈け、朝野共に稚氣に富み、北京に於ける外交を初め我對清政策は、他の列國に比し其老熟を缺き、着々人後に落つるの觀有り。乞ふ吾人をして吾人の見る我對清政策の缺漏其重なるものを説かしめよ。

一　外交上の缺點　黃金と鐵艦其用を誤れり

其一は清廷に於ける腐敗の利用を知らずして恒に不覺を採れることとなり。所謂「金錢已上の勢力」を鼓吹し得る國民は、猶生氣の回復し得べき望み有る國民なり。支那人には果して此望み有りや否や、個人としての支那人には、稀れに文明紳士の標本として差支へ

無き性格を具へたる者無きに非ずと雖、清國政府に對しては全く金錢已上の勢力を説法するの必要無し。個人病、賄賂病、有ゆる亡國病、今の清朝政府の官人は上は親王宰相の大官より下、抱關撃拆の末輩に至るまで眼中露黨無く、日本黨無く、英無く米無く、本國政府すら無し、只有るは黄金黨のみ。況んや正義とか人道とか言責とか云へる事は藥にしたくもこれ無きなり。北京の外交界は千百の議論一黄金に若かず。此の如き場合には、唯毒を以て毒を制するにあるのみ、腐敗を利用して腐敗を救ふにあるのみ。我對清政策は此點に於て根本に誤りあり。則ち英に對するが如く、米に對するが如く、恒に正道を採りて却て失敗を招く。或は同種同文と云ひ、或は東亞提携と云ふ、彼等に採て何の感じも無き雖有迷惑の辭柄を眞向にふりかざしてこれに迫るも、黄金の外自己の國家すら認め得ざる彼等に何の利目があらん。此の如きの政策は、徹頭徹尾世界の全躰を敵としても我一國に引受るの實力と決心有て後行ひ得べし。實力未だ副はざる我國としては敵を知らず己を知ざらる腐儒の行爲のみ。一國の外交としては實に愚劣の極なり。流石に露國は此點に注意するところ有り、我よりも數倍尠き勞を以て着々成功しつゝあり。

其二は我邦天興の利便に依賴すること深きに過ぎ却て不覺を採ることとなり。吾人曾て印度暹羅緬甸等に於ける國民の希望を代表して、帝國軍艦の一二隻が恒にこれら各國の港灣を絶へず巡航せんことを望みたることありき。此一事は日本を信賴すること深き此等國民の望を滿たしむるに止まらず、貿易上、外交上、間接の利益は實に大なるものあるなり。而して此一事支那に對して特に切要なり。

佐世保より僅々四十八時間内に太沽灣に出づるを得る天然の便宜に依賴して、平素渤海灣頭を閑却す。これ策の最も宜きを失へるものにして、これが爲め一面に却て時機を誤ること、恰も停車場附近の住民が油斷の爲め汽車に乗り遲るゝこと多きと同一の結果を生じ、一面には平素に閑却して偶ま事有るの日一時に派遣す

るが爲め、列國の嫉視を招き、外交の防げとなること多し　往年布哇に浪花艦を送りし時の如く、揚げし手の下ろし樣無きに困却すること屢なり。所詮支那人は目前に怖るべきものを排列するに非れば嚇しの利かぬ人種なり。平生より戰鬪艦の二隻や大巡洋艦の三隻位は恒に遊弋せしめ置くの必要有り。

これ我對清政策の第一缺點なり。

二　浪人の害と東亞同文會の責任

吾人茲に浪人と云ふ、決して博徒を云ふに非ず、埠頭場人足を云ふに非ず、壯士の落武者を云ふに非ず、刑餘の逋逃者を云ふに非ず。身は中等以上の教育を受け、堂々視察と名け、教授と號し、派遣員と稱し、或は志士仁人の名稱を振り廻はし、二言目には唇齒の關係や同文同種を說くを事とする無職浮浪の日本人が、支那に入り込むこと多くして、爲めに我對清政策の妨げとなること實に多き點を云ふなり。

試みに彼等の行爲を見る、戰役後清人の日本を敬畏するもの多きを利し、國威を假冒して無錢旅行をなし、或は富豪の家に寄食し時に匪徒に交りて亂に乘じて名と利を博せんと計り、時に革命熱を鼓吹して輕佻なる青年を煽動し、其頭腦や粗雜、其行爲や無責任、屢全局の大計を誤る、我對清政策の禍根は一に此浪人に在りと云ふべし。日本人全躰に對し、着實なる清人の感情を害するものは彼等有るが爲めなり、內地到處に邦人の嫌惡せらるゝも彼等有るが爲なり。前年公使蔡均は支那留學生を日本に送るの危險を說て北京政府に進言し、爲めに一波瀾を起こしたることあり。彼をして此の如き擧に出でしめたるもの、罪公使に非ず、留學生に非ず全く此浪人に在り。頃者、湖北の端方をして、新學抑壓に類する擧措に出でしめたるも、亦罪彼等清人に非ずして、全く此浪人に在り。

此種浪人の與へたる損害を第一に受くるものは公使領事等の外交官は素より、彼地に在て正業を營める着實なる邦人にあり。彼等が此浪人の爲めに蒙むる直接間

接の損害は頗る莫大なるものにして、薫蕕同車玉石一架、清人をして凡ての日本人を浪人視せしめ、近來は內地浪人の荒らせし跡は邦人の宿泊すら謝絶する所有るに至れりと云へり。

奈何にして此浪人の驅逐策を講ずべきか。着實なる在清正業者の一致して之を驅ると同時に、領事館其他政府の力を以て彼等の濫入を制せざるべからず。然れども在清の正業者や領事館は、其力只所在地に及ぶのみ。彼等浪人の神出鬼沒、別底其手に合ふべきに非ず。故に吾人の望むところは、十八省到處に其勢力を扶殖し、支那內地との關係最も深き東亞同文會の責任として、此浪人退治の任に當らんことにあり、今日の清國人及び邦人の大半は、同文會を以て却て此の如き浪人の養成所派遣所と誤想せるもの多し。一面國家の爲め、一面同文會其ものゝ雪寃の爲め、此浪人驅逐の責に任ぜんことは是非吾人の仝會に向て希望するところなりとす。

三　內地新聞の無責任及び邦人の革命主義排滿主義

其李たり張たり、袁たり榮たり、其閣臣たり其親王たるを問はず、從來我內地の新聞紙は、我當局者の提議或は要求にして一度清庭に容れられざることありとせんか、直ちに其對手を目して彼は日本黨に非ずして親露黨なりとして、之を議し之を報ずるの癖有り。而して彼等清人の眼中には日本黨無く露黨無く只黄金黨のみあるを知らざるなり。これが爲に遂には彼を驅て止むなく親露黨たらしめしこと屢なり。これ新聞紙が對清政策を誤らしむるの一なり。世界の大勢を解せず、清人の性情をも知らず、只同種同文と東亞同盟をのみ骨張し、迂腐の言論、人を誤まり國を誤まる。これ我新聞紙が對清政策を誤らしむるの二なり。內地に於ても、北京に於ても、只素葉拔きをこれ快として毫も全局の利害を考へずして秘密を漏洩す。これ我新聞紙の一大弊なり。今回の日露事件の如き、幸ひに當局者が

秘密漏洩に懲りて其嚴秘を守りしが爲め、今日までは其害を受けざりしも、從來此れが爲に沮害せられし外交問題一にして止まず。これ我新聞紙の對清政策を誤るの三なり。

此外新聞紙は素より邦人一般の言動として、無責任に排滿主義や革命主義を鼓吹するは又大に對清政策を誤まらしむるものなり。我國今日の國是は只一日にても永く清國の平和を保全するにあり、對清貿易の發達を沮害せざらんことを力むるにあり。革命か維新か、瓦解か分割か、遠き將來は知らず、現在清國の四分五裂するが如きことあらば其直接に痛き影響を蒙むるもの我邦にあり、我生命を賭しても他國と爭はんとするもの實にこれが爲めのみ。

然るに維れ是を察せずして、漫りに排滿主義を鼓吹し革命論を煽動し、四百餘洲蜂の巣をつゝきたらんが如き日の一日も早からんことを望む。其短見其無謀又極まれりと云ふべし。試に思へ、左無きだに滿人少くして漢人多き清庭の現狀と、十八省到處排滿思想を抱ける者增々多く匪徒の口實をこれに藉る者悉く然る今日に於て此の如きを主張す、恰も油を枯草に注ぐが如きなり。又思へ、彼の張之洞が支那の全局を顧みずして團匪事件の際、其支配下に於ける革命黨を處分せざりしと假定せん、湖廣の平和永く破れて、我貿易上の損害は實に甚大なるものありしならん。

以上の三點は實に我對清政策を誤るの三大源因なり。宜しく我實力を養成し、我秩序を保ち、而して彼の事情に應じて敏活に機宜の働きをなすべし。吾人が今日に學ぶべきは英人の所置にして、露國の行爲に非ず、旅順大連等の經營に非ずして上海其他英租界の實力にあり。邦人動もすれば旅順大連の大建築に驚いて露國の壯圖に落膽するものありと雖も、これ恰も借金して店頭を飾る破產者の行動に驚くと同じ、苟も一個の大國民たるものがかゝる呆者嚇しに驚かされて可ならんや。露清銀行の建物や大なりと雖、其市場を左右するの勢力は遙に上海香港銀行に及ばず、實力と秩序の上に立てる權宜の處置、吾人が對清政策に就て心得べき

はこれのみ、我當局者たり我國民たるもの豈三思せずして可ならんや。今の世界は迂腐儒生の經綸を許さず、況んや似非東洋流豪傑の小刀細工をや。（百[illegible]鳴）

百姓道

本田增次郎

（士族の稱號を廢すべし）

泰西の物質的潮流が滔々と押し寄せ來つて、國初以來上下三千載の間に漸次養成化育された、日本特有の精神的文明道德的教化を悉く漂蕩し去らんとする勢のあつた時、一種の保守的反動として國粹保存を唱へ大和魂の神器を擁護し、武士道といへる精華の儼として世界に誇るべきものが、我邦に在つた事を絶叫したは機宜に合した處置といふべきてある。歐米人が彼等の所謂文化なるものを日本人の吸收同化するの迅速なのに驚き、日清戰役の結局が彼等に取つて餘り意想外なりしに肝を潰し、或は嘆賞し或は猜忌し或は讒誣輕辱を加ふる時に當つて、我邦今日の進歩には鞏固なる基礎深遠なる淵源があつて、白人の組織せる某々國がまだ形をも成さぬ先きから、東洋文化の精髓を聚めて修養練磨した結果が、凝つて武士道といふ實踐倫理の華を開いて居たのだと、西洋人の蒙を啓く爲めに歐文で武士道の解釋を公にしたなども結構な事である。

しかし物には程度がある機微を考へねばいかぬ。いくら政治的野心の空々寂々を悟つたからとて、淺薄極まる『成功』熱に浮かされて主義心術の存養如何を問ふに遑あらずては、一段理想が低くなつた否殆んど沒理想の極と謂はねばなるまい。我等は今日の『成功』噪ぎが嘔吐を催うすほど大嫌ひであるが、それと同じく武士道を擔ぎ廻してお祭りの太鼓を叩くのが至極不都合だと思ふ。今日の日本に武士道がどれ程實行し得らるべきか、又實行して無害有益であるべきか、武士道に固着して居る弊害缺點は何であるか。是等の問題を愼重公平に研究する事と、武士道の過去に於ける成立を說明し功果を賞揚する事とは全然別事に屬するを忘れてはならぬ。

日本人の心理的性情と歷史的遭遇とが經緯となつて、神儒佛の三道でもつて練られ染められて、戰國封建の時代の武人の精神的訓練が出來たのが即ち武士道である。仁義忠孝を本義として武勇正廉禮節義俠などの德

を養ひ出した。少數ながらも日本國民の中堅となつて居た武士、上に立ちて下民を導き治むるを本分とせる武士が斯うてあると、平民も多少之に感化されて一種の倫理教育が自然と行はれたに違ひない。好んで忠孝武勇の談を聽き又仁俠を尊ぶ氣風が農工商の間にも見えたは、武士的教化の影響といはねばならぬ。又武士道の短所として近頃二三の論者が擧げてる箇條は、權利思想の缺乏、科學的研究の輕視、公德心の缺如、狹隘なる階級的根性などであるが、我等の眼から觀ると、も一つ根本の缺點があると思ふ。

鎌倉幕府の基礎が立つと兵糧米段別五升を課し始めた。これは武人を養ふ俸祿に充てたもので普通租稅外の附加稅である。これが即ち兵農の全く相別るゝに至つた出發點で、武人は平時でも働かずして食ふ事が出來るやうになつたから、名譽と怠惰と併せ得らるゝ所に何條人心の傾むかざるべきや。これより武士の數は愈々增加する兵馬の權を握れる者の勢力は益々堅固になる。今日の國民皆兵制度とか特志義勇兵の制度とかは、兵農分立の大弊に鑑みて編み出したものであらうが、日本武士の美しき發達を遂げたも又今日以後武士道の實際に行はる可らざる所以も、共に此世襲俸祿の制に存するのである、働かせる爲めに養つて置くといふ事が、養つて貰ふから忠義をするといふ事になる轉機の微妙な所にある。

世襲制度は墮落腐敗退歩無氣力の源因で、我邦今日の貴族制度なども頗る釐革を要するは天下の公論であるが、これは問題外であるから爰には論ぜずとして、今の士族なるものは封建世襲の祿に離れた所謂扶持離れである、今の兵士は士族平民の別なく一般から徵募するのであるから、士族の稱呼は全く有名無實なもので、祖先の光榮か汚辱かを標榜する具に過ぎない。今日士族平民の名稱を存留するは繁文縟禮の一項を加ふる外何の用をもなさぬ。英國には紳士（ジェントリー）といふ一階級があるが、是れは全く社會的の稱呼であつて政治的に士族平民の別は立てない、故に職業とか祖先とかよりも一層其の人物に重きを置いて、彼は紳士なり共に交るに足る彼は紳士にあらず親むに足らずといふ風にやる。日本の現狀では政治上にも社會上にも士族といふ階級名は何等の意義をも持つて居ない。無用の長物は速に廢するに若かずである。今に新華族が殖えて恰かも昔時の士分と同じ位の價値しか華族になくなるであらう、其の短所を明けて置く必要もある！

どれ程武士道に心醉し之を謳歌する論者でも、武士道が力行自營額に汗して己が勞働に衣食するといふ、極めて平凡にして極めて神聖なる理想を教へたと回護する事はよも出來まい。世襲の俸祿てふ溫室の中に養はれた仁義忠孝の花は、朝、夕を知らず、今、來年を期する能はざる、所謂手より口に入るゝ辛き生計の寒風中に能く凋衰せざるや否。食物を見てチン／＼する犬が、餓死する迄も己を見棄てた主人の家を去らぬといふ鐵石の忠義心は、昔の世には隨分現れたであらうが今後は思束ない。恒産なくて恒心なきは天下の通理で、武士は食はねど高楊枝といふが、食へなくなつた時高楊枝を使ふ術のみを知つて、働いて食ふといふ智慧も勇氣もない卑屈漢は今の世には立たれない。こんな人間は士族の名稱と共に西の海へサラリ／＼と遣つて可なりだ。

武士の精神には如何にも奥床かしい高尚な處があるが、此美花を今後世襲俸祿といふ樹木に咲かせる事は出來ぬ、もし爲し得べくんば自由競爭といふ臺木に移して其の奇麗を永く存せしめたいてはあるが、臺木の變つた爲めにどれ程色香を損するか或は意外の好果を結ぶ樣になるか、それは將來の歷史ならでは誰も知る者はなからう。兎も角臺木が既に變つてしまつたといふ事實は明に認めねばならぬ。今は此新しい臺木に移されて如何なる花實を出さうかと思案の最中である。

忠君愛國の精神に變化はないとしても、立憲政治が行はるゝ法治國となつて、哲學的に根本から事物を探究する今の世の中では、忠君愛國も唯一種の感情に止まらで多少合理的基礎の上に置かるゝ事になる。一旦凋んだ花はどうしても根から養分を上げて次の季節の來るまでは咲くまい。今後の士道は武人の一階級に限られない國民共通の士道である、産なき者は正直なる勞働（オネストレーボア）に依つて産を作り、既に産あるものは之を守り之を殖しつゝ獨立自營にして人に賴らざれども能く人を思ひ、士人の對面尊敬を自ら持すると共に他人の權利面目を重んじ、世界の大勢に通じて而かも閑雅の禮容を失はぬといふ事でなくては叶はぬ。

武士道は既に過去のもので、其の影響は如何に廣く深く人心に及ぶとも、今日の精神的訓練の名稱としては餘り褊狹て誤解を生じ易い。過去の武士道を囂しく論ずる聲に對して我等は百姓道を呼號するのである。百姓とはもと萬民庶民の義であつたが、日本では俗間之を俠義に用ゐて農民のかへ名とした。これは偶然かは

知らぬが能く出來た稱呼で、農民は即ち庶民の模範代表者であるから、農民は即ち百姓、我等の唱へる百姓道は則ち農民の正直なる勞働に取つた萬民共通の大道である。（次號完結）

邦人躰格の不良その源因と救濟策

其一　寺田勇吉

我國民の身躰の有樣はどうであるか、丈夫であるか或は丈夫で無いか、斯う云ふことの問を發すると我々は悲しい哉、我々の身躰を以て健全なりと言ふことは出來ない、然らば之を回復するの道は無いかと言ふのに我輩は有りと信ずるものである。

鎖國と各藩割據の影響
柔弱と血族血婚

元來我々の身躰は三百年以前に於ては今日より餘程丈夫であつたといふことは種々なる事實に依つて之を證明することが出來やうと思ふ、即ち我々の壽命の如き又我々の躰軀の如き躰量の如き總て大に短縮して居る、今人の氣力は古人に及ばぬし、今人の骨格は古人に及ばぬ、斯う云ふ事實が現はれて居る、元龜天正の時代に如何なる人民であつたかと言ふのに、當時躰力充實、随つて氣力も充分壯んであつて、實に東洋の諸國を征服し東洋の天地を支配したる大なる帝國であつたといふことは歴史に徵して明かなことである、其後德川の時代に至つて當時の政府が鎖國の政策を執つて、其結果人民は柔弱に流れて來て太平無事であつたからして他國人との競爭といふことが丸るで無かつた、他國人との競爭をすることが無い結果として我國民の進取の氣象といふものが消滅して仕舞て既に〱明治維新の比は國民の躰格は大に衰えて仕舞つた、併ながら此德川藩士竝に幕府の意に負かぬやうにして居つた諸大名は力めて此謠曲とか踊とかいふやうな悠長な遊藝を奬勵してさうして成るべく丈け其藩の者が幕府に敵對しないといふ事實を證明しやうといふ方に傾いて居つた、随つて武術といふやうなものは皆抛擲して仕舞つてあつたのである、唯々舊幕時代でも餘々德

川政府の機嫌を取らなくつても宜いやうな諸藩に於ては隨分武術訓練等に力を盡して居つて、其結果明治維新頃に未だ丈夫な藩士を持て居つた大名もあつた、例へば鹿兒島であるとか或は長州であるとかといふやうな大名は略々德川政府の機嫌を取る事のみを努めて居らなかつたからして隨つてナカ／＼武術等を奬勵した結果健康な好い人間も澤山にあつた。

明治維新の前即ち德川の時代に於て、昔より我々の身躰が惡くなつたといふ一つの大なる原因は何であるかならば各藩が割據して居つて隨つて他の藩の人との交際を避けて居つた、其結果、結婚をするのにも同藩内の者と結婚し甚しきは士族は士族と結婚し平民は平民と結婚をする、又それより一層甚しくなつては一つの村内で他の村の者とは結婚をしないといふやうな規約すらも設けて居つた町村があつたので、要するに此狹い區域で互に結婚をする其結果といふものが血族結婚となつて來た、抑々此血族結婚の人類社會に害のあるといふことは統計學上爭ふ可らざる事實であつて、現に不具者、精神病者、虛弱者の大多數といふものは血族結婚者の間に在るといふことは明かな事實て、又獨り人間のみならず動物に於ても亦同樣な話であつて牛なり羊なり馬なり其物を改良するのには成るべき丈け遠方から牡を取寄せさうして養ふといふことか極く肝要なことてある、西洋の家畜の肥えて且大なるといふ原因は主として今言た方法を行つたのからである、して見ると我々の躰格精神共に昔より大に退歩して居るといふことは各藩に割據した結果、血族結婚といふものが一の原因となつて居るに相違ないと思ふ、元來文明の進步といふ中には人間の丈の高くなるといふことも、目方の重くなるといふことも、壽命の長くなるといふことも含んで居らねばならぬのである、左もなければ決して文明の進步といふことは出來ないのである、現に獨逸人であるとか英人であるとかいふやうな人に付て凡そ百年以前の有樣と今日のと比較をして見ると百年の間に一寸の割合を以て丈が伸びて居る、壽命の如きも餘程長くなつて居る、即ち英國人の平均の壽命は五十年に近來は上つた日本人の平均壽命は幾らであるかといふと僅かに三十七年、して見るといふと英人と我々と比較して見ると平均の上の壽命に於て十三年も違ふ、斯う云ふやうなことであつて見れば我々は一刻も安心して居ることは出來ない、西洋人は段々に丈夫になる我國民は文明は進步したといふけれ共却

つて身躰は惡くなつて來るその惡くなつて來るといふ事に付ては昔の事は我邦に統計上の調査が無いからして、精確にどの位惡くなつたといふことを示すことは出來ないが、併し昔の日本人の使用した具足であるとか武器であるとかいふやうな物を調べて見るといふと實に明かに我々の身躰が小さくなつたといふ事を證明することが出來る、現に昔は八貫目位ある具足を被て戰爭に出た人は幾らもある、然るに今日では丁年以上の人で十貫目十二貫目位の虛弱い身躰を持つて居る人間が澤山になつた、十貫目の身躰では八貫目の具足が被れるか、マア惡く言へば吹けば飛ぶといふやうな人間が多い、どうもさう云ふやうな有樣であつて明かに今日の方が昔より身躰が惡くなつて來た、其結果左に記する如きことが起つて來る。

第一は邦人の躰力劣等で且壽命が短いといふ事の爲に對外競爭に堪えざること、第二は心身不健全なるが爲恒久の事業を經營することが出來ないといふ結果、一時の利益のみに汲々として居つて遂に種々の罪惡を構成する、斯う云ふことが起つて來る、現在の情況が此の如くであるに拘らず向後益々我々の躰格は惡くなる傾きがある、其傾きがあるといふのは、即ち明治三十五年度に於ける徵兵調べの結果を以て之を證明することが出來やうと思ふ。

一年間の減少二分と十二匁

其徵兵の調べに依つて見るといふと吾人の躰格が今日惡いのみならず、將來益々惡くなるといふ事實がある、三十五年の徵兵檢査の結果は陸軍者に於て調査されたもので其報告に依れば「壯丁の軀長、躰量は年々減少して之を三十四年度に比すれば軀長に於て二分、躰量に於て十二匁を減じ居れり」斯う云ふ報告書である、此報告書といふものは我輩の大に驚き且大に悲む所である何となれば果して年々歲々此の如く我々同胞の身長が小さくなり、且又目方が減するとすれば今日世界に於て無類なる所の惡しい躰格が尙段々惡しくなるといふに至つては實に悲しいことであらうと思ふ、右の陸軍省から發した調査は餘り甚しいから或は何か間違ては無いかといふ考を以て當局者に照會して見た、然るに不幸にも事實は事實で如何ともすることは出來ない、此の如きことが新聞紙などにも出て居つたけれ共一向に世間の人は餘り驚かぬ、是が西洋ならナカ／＼大變な騷ぎで以て世の中の一問題となるのだ

けれ共、元來日本人は數字といふものには餘り重きを措かぬ人種であつて、數字が右樣に驚くべき結果を現はしても一向人が驚きもせず頓着もしない、此事たるや殆ど佛蘭西國の人口の調査の如きものであつて佛蘭西では年々人口の殖える歩合が減ずる、例へば本年は百万人の人口が殖えるとすれば來年は五十万人再來年は五十万人といふやうな風に人口は殖るとは殖るけれ共其殖える歩合といふ者が年々減少して行く、其割合で殖えて行つたならば遂に或年には人口の殖えない年が來るであらう、人口の殖えない年といふものは即ち零の年である、零の年が來たならば其翌年は如何なる年が來るかといふと即ち人口が實際に減る年である、是故に佛蘭西では此事に付て非常に心配をして居るのである、人口の增加するとは是は國の爲に餘程大切なとであつて今日では野蠻國の外は何れの國も人が殖えるといふのである、併ながら其殖える歩合は今申す通り國に依つて大變に違ふ、今世界に於て最人口の盛んに殖えるところは北米合衆國であつて凡そ人口百人に付て二人毎年殖える割合である、此北米合衆國は併なから移住者の多い所であるから是は例外として獨逸あたりを見るといふと百人に付て一人五分殖える、それから露西亞、瑞典、日本等は一人二分殖える、斯う云ふことになつて居る、然るに佛蘭西の殖え方は今日では僅かに二分三厘である、マア日本の六分の一といふやうな割合になつて居る、併ながら此日本の統計上の調査といふものは甚だ不備であつて其實數は不確かである、現在東京などでも警視廳の調べと內務省の調べと對照して見ると東京市丈けでも實に人口の上に數万の差があるのである、之に反して西洋では五年目若くは十年目毎に一日の間に寫眞を撮る如くに人口の調べをするので我日本の帳面上の調べとはまるで違ふ、帳面に書いてあつて死んで仕舞つて居る者もあるし帳面に書いて無くて活きて米を喰つて居る者もある、斯う云ふやうなことであるから我邦の人口增加の歩合等は當にはあらないが、併ながら幸ひに佛蘭西の如き有樣では無いと思ふ、そこで佛蘭西では實際今人が減るのでは無いけれ共兎に角何時か人の增減の無い年が來るであらう、果して人に增減の無い年が來たらば其翌年からは減るであらうといふに付て非常に心配をして之に付て其原因を調査して居る。

扨てその減少の源因となるは何であらうか、大略左の數條である。

佛國に於ける人口減少の四大原因

其原因の重もなるものは何であるかと言へば第一には生活の程度が段々上つて來て男子たる者が容易に妻を迎えて一家を構えるといふことが出來ない、殊に出産などのあつた時分には餘程澤山なる金が掛かるといふやうなことで成るべく丈け皆結婚をしない、成るべく丈け小供を産まぬ、斯う云ふやうな方法を研究して居る、第二には段々色々な税が年々增して來る、年々税が增して來るので負擔が重くなつて來るから隨つて矢張り結婚は出來ない、第三には品行が一般に惡るい、婦人が品行が惡るい爲に出産力が減少するといふことは明かなことであるし、又一方には交際社會の爲に自分で自分の小供を育てないで他人に托するとか或は自分で小供を育てる即ち自分の乳汁を吞ませると早く年を取るといふやうな事の爲に他人に自分の小供を托するといふやうなことがあつて、さう云ふ小供といふものは矢張り親に育てられたやうに健康に育つもので無い、早く死ぬといふことがある其外に私生兒が大變近來增して來た、私生兒といふ者は元來病身の者が多く隨つて死亡が多い、第四には佛蘭西人がアルコールを澤山用ゐる、アルコールといふ者の社會に害を流すといふことは何れの點に於ても害を流すが、就中婦人のアルコールを用ゐるといふことは其小供の爲に非常な害のあることである、今までの所では分つて居る原因は右に言つたやうなことであつて、此外にも種々な研究をしてどうかしてモッと盛んに人口が殖えるやうにしたいと言つて佛蘭西人は騷いで居る、甚しきは雙兒以上の小供を産ませるといふことを奬勵したら宜からうといふやうな說もあるが斯う云ふことは隨分西洋でも昔はやつたことであつたが、併ながら幾ら政府が奬勵金を出しても雙兒三兒等を餘計產ませるといふことも出來ないのであるから斯んなことは無論効の無いことであらうと思ふ、兎に角佛蘭西人の心配は、若し此儘で過ぎ去つて行つたならば將來には自分の國の敵と思つて居る獨逸人に對して獨逸は人口が段々殖える、自分の方の國は人口が今に減るといふことになつて見るといふと戰はずして遂に佛蘭西國といふものが獨逸の所有物となる、斯う云ふ心配をして政治家始め學者等が騷いで居る。

丁度日本人の年々身長が少さく且目方が輕くなるとい

ふことが、今の佛蘭西の人口問題と同じやうなものであらうと私は思ふ、して見ると我々日本人は佛蘭西人と同じやうに餘程此事に付ては研究してさう云ふ悲しいことの無いやうにしなければならぬと思ふ。

日本人は二百五十年後に消滅す

さて我々同胞の身長が一人に付き毎年二分づゝ減ずると斯う云ふ時には甚だ僅かのやうではあるが、實に一ヶ年に四十四万尺減ずる、今我同胞を四千四百万人と假定する時には日本の里數にして三十四五里減る譯である、それで內地の一番高い山は即ち富士山であるが富士山の高さの三十六倍丈け年々減少するといふ比例になる、又目方が平均十二匁づゝ減ずることにすれば是も少しのやうだけれ共五十四万貫目減ずる即ち五億四十万匁となるのである、人間の目方一匁がどの位價直のあるといふことを定めることはそれは出來ない、今假りに金の價と同じものと思つて、一匁一圓の價があるとする時には一ヶ年の我々が之が爲に損失することが實に二十七億万圓になる、國庫歳入の十年振りである、況や我々の躰力、智力に依つて得る收入は無限である、假りに金と同じに勘定して見たところが右のやうな非常な損耗となる、而して少しく滑稽のやうであるが年々二分づゝ人の丈が減ずるものとする時には十年にして二寸減ずる、百年にして二尺減ずる、二百五十年に五尺減ずるといふ割合である、して見れば今の有樣にして抛つて置けば五尺の我々の身躰が今より百二十五年で二尺五寸になつて仕舞ふ、二百五十年で零になつて仕舞ふ、斯う云ふ計算が出る、殊に我邦婦人に付ては帳簿の調べも無いからしてどう云ふやうな有樣になつて居るかといふことは明かでは無いが、我輩の想像するところでは蓋し男子よりも一層早く女子の方がマア消滅すると斯う云ふ事であらうと思ふ、若しも女が早く消滅して仕舞つた時になれば其の結果として小供を產まないから小供が無いといふことになれば日本人の消滅する時期は二百五十年では無い、二百年に是が短縮するかも知れぬ、斯う云ふマア結果を生ずる、又目方が一年に十二匁づゝ減ずるとすれば十年で百二十匁、百年で一貫二百匁千年で十二貫目、千二百五十年で十五貫目減るといふ割合になる、即ち向後千二百五十年經つと我々の躰量といふものは零となつて仕舞ふといふ勘定である、して見ると日本の本島は無人島になつて仕舞つて、唯々殘るのは臺灣人、沖

細人若くはアイノといふ位の者が止るといふことの想像が出來る。

歐米人との比較、日本婦人の身長其劣れること九寸七分

今述べた事といふものは徴兵の調査に依つて計算したものであるが假りに將來丈も小さくならぬ、目方も減らぬ即ち現今の儘で我々が我々の身軆を維持するものとしても、我々の今日の軆格では到底世界各國の競爭場裡に立つて行くといふことは出來ないのである、現に今日歐米の男子と較べて見るといふと日本の男子の方の身長の短いこと三寸、又目方が二貫三百匁輕い、又歐米の婦人と日本の婦人とを比較して見ると身長に付て日本の婦人の低いことは實に九寸七分である、目方は三貫目日本の女の方が輕い、斯う云ふやうなことで現在の有様は既に悲しいことである、我々日本に於ては外國人の居ることも至つて少い、一つには我々下駄を穿いて居るからして左程感覺が起らぬが一たび歐羅巴に遊んで見るといふと我々の身軆の惡いといふことに付ては非常に感ずる、丁度歐羅巴の工場などへ行つて見ても向ふの職工は筋肉が丈夫であつて仕事が活發であつて且眞面目である、日本人は何をしても直きに疲れる、その疲れるといふことが獨り勞力のみでは無い、精神上の仕事に於ても亦同一である、現に我輩が或日本の船の注文を受けて居つたる英國の造船會社に行つて見たことがある、其造船會社に日本の職工が三人居つたからして其當時會社の技師に就いて色々と日本の職工の事に付て話をして見た、所が其技師の言ふのには大槪の仕事は英吉利の職工と日本の職工と同じやうに仕えるけれ共、唯々一つ日本の職工ではどうしても充分にいかぬ仕事があるといふことであつた、其仕事は如何なる仕事であるかといふことを聞いて見たところが、釘を締めることが日本の職工ではどうしても出來ない即ち西洋の職工と同一の槌を使用することは日本の職工にはどうしても出來ない、先づ日本の職工には西洋の職工の持つところの槌の三分の二の目方のものを持たせて釘を締めさせるより外に仕方ない三分の二の槌であつて見ると重さが足りないから釘が充分に締らない、故にどうしても此釘を締めるといふ事丈けは軆格の惡い日本の職工では出來ない、言はゞ日本の職工の一人前といふのは西洋の職工の三分の二人前と斯う云ふことになるから、西洋人が假に九十錢の給

金を買ふものとすれば日本人は六十錢で甘んぜなければならぬ、斯う云ふことになつて來るのである、是は吾輩が歐羅巴に於て目擊して到底我々の身躰が今日の樣な惡い身躰では西洋人との競爭が出來ないどうしても我々の身躰といふものはモッと強くしなければいかぬといふ感情を持つて來たのである、殊に英人の根氣の強いといふことは實に驚くべきものであつて日本人の事に倦み易い、容易く欠伸をするといふことは小學校の兒童の就學の有樣を見ても之を知ることが出來る、我々の躰格の惡いといふ事に付ては日本人が西洋に行くといふとそれが爲に種々不愉快な感じを惹起す、現在我輩が歐羅巴から歸る時分に或英吉利の市で出來合の着物を買つたことがある、其時分にそこの店に行つて出來合の着物を欲しいと我輩が言つた時に、番頭が我輩をして小供の服の陳列して在る所へ案內した、我輩甚だ不愉快であつた日本てはそんなに小さい躰とも思つて居らぬのに英吉利へ行つて見ると小供扱ひをされる、併なから其小供の分類の所へ行つて見ると我輩の身躰に能く合ふ着物がある通常大人の分類の所へ行つて被て見るといふと一つも我輩の身躰に適せる着物が無い、幾ら不愉快でも仕方が無い、矢張り小供の分の着物を被て來るより外仕方が無いといふ躰裁であつた、獨り着物のみならず、靴を買つても手袋を買つても襯衣を買つても杖を買つても決して我々日本人に適するものは無い、又外國人などゝ一緒に散步しても向ふの者は服の幅が廣いから我々が一跨ぎに一尺五寸跨ぐものなら、向ふの人は二尺跨ぐ斯う云ふやうなことであつて隨分唯々一緒に散步するすら少しく長時間に涉ると我々の身躰の惡いが爲に非常な苦痛を感ずる、獨逸あたりの田舍では中には我々を後ろから見て彼は不具者では無かといふやうなことを言つた者もある、併し表に廻つて顏を見るとどうも顏は大人のやうであるが身躰は小供のやうで至つて低い、即ち不具者では無いかといふことを言つた、マア歐羅巴に居るとさう云ふやうなことであつて我々の身躰の惡いといふ事に付ては朝夕種々な點から感ずるが、日本に歸つて來ると遂にそれを忘れて仕舞ふといふやうなことである、さう云ふやうなことであつて要するに此西洋人との競爭といふことは言はゞ大人と小供との競爭と言つても宜いのであつて到底本當の競爭は出來ない。

以上論ずる如く我々の躰格は實に不充分であるといふことは爭ふべからざる事實であつて何人も之に對して

疑を容るゝ餘地が無い、それで若し之を改めることが出來ないといふものならば論は無い、併ながら前に申す通り西洋人は段々大きくなり段々重くなる斯う云ふ爭ふべからざる事物があるに拘らず、我日本人は反對に段々小さくなり段々輕くなると斯ふ云ふ事實があつて即ち人の身躰といふものは變動するものであるといふことが極まつて居る以上は其方法如何に依つては日本人も西洋人の如く段々大きくなることが出來る筈である、況や我々の昔の人は大きかつたに相違ない、といふ事實がある。

我々の身躰が年々歳々惡くなるといふことに付ては必ず之に原因があるに相違ない、我輩は今其原因の重もなるものを調べて見て、さうして果してそれが個人の身躰の惡くなるといふ原因であるとすれば之を倘改めなければならぬと思ふ、次號に於て其原因療法を述べようと思ふ。（以下次號）

右は既濵市平氏の速記せるところ所々の見出しは讀むに便ならしめんが爲め特に記者の附加したるものなり

余の見たる日本の國病

博士　リギヨル

其四　日本の宗教に就きて

（一）序説

日本に於ては到る所に寺社若くは之れに關する建物の存在せざる所なく、又祭祀佛事等の宗教的儀式慣例が殆ど日本國民の生活狀態の多くの部分を占むるを見れば、少くとも昔は宗教的國民たりし事を知る、而して現時及び將來に於ては如何。

或る一部の日本國民は無宗教を以て自ら誇り、能ふ丈け宗教的の表章を避けん事を力めつゝあり。然れども彼等は全く宗教心を失ひしものといふべからず、彼等自ら辯じて曰はく「吾人は有神的迷信を脱却したるものなり」と。要するに日本人といへども同じく人間なれば、カトルフアーゼの謂へる如く「宗教と人生とは二者離るべからざるもの」にして、彼等の思惟する如く少しく進歩的方面に向ひしのみ。唯在來の宗教心に他の感情を添へたるのみ。

之れを再言すれば、今日の科者學は開けたる學問即ち最近の科學が一以て十に代るものと思へり、科學萬能を信ぜり。而して日本人は由來先生の言に能く從順する民にして、近時國民の思想は大方此種の輿論に假定せられたり。此輿論に從へば多少進歩せる頭腦を有するものは、宗教を信ずるものと思はるゝことを厭ひ、迷信家と思はれん事を厭へり。宗教は愚夫愚婦にのみ必用なる者なればとて其列に入らざらん事を希ふなり。然れども今日に到りては日本にても科學者たると同時に宗教信者たるもの少からずこれある事を知るに到れり、思ふに彼れニユートンの如く科學者たるものにして宗教を信ずるもの古來數ふるに遑あらず。宇宙の眞理の幽玄を窮めんと欲するもの、益々宇宙の大なるを知り自己の小なるを知る、豈宗教心を生ぜざらんや。科學は到底人生の歸趣を明答するを得ず、學者益々宗教の必用を知るべきなり。此點に赴ける科學者多きは日本思想界に於ける近來の一大變調となすべし。

又他の一方面に於て、宗教其物の運命も亦進歩せり、即ち道德上、實行上に於て宗教を信ずるものと信ぜざるものとの區別は其生活狀態を異にするに到り、社會は眞面目なる宗教が人の良心言動を支配することに於て偉大なる勢力あるを認めたり。

斯くの如く近來有識者は理論上に於ても實際上に於て宗教の必用を認識せざるものなきに至りしと雖、同時に何れの宗教に依らんかといへる第二の問題に逢着せり。或者は曰はく「世界の宗教の長を取りて一團となすべし」と、或者は曰はく「現日本の社會狀態に適せしめんが爲めに、即ち今日の文明の進歩又は今日の要求に應ずる爲めに在來宗教の欠陷を補ふて之れを改造せよ」と、誰か此問題を簡單明瞭に解決する者ぞ。

（二）儒道に就きて

昔は哲學と宗教とを混同せしを以て、日本に三個の宗教ありしやうにいへり、今も猶これあり、儒神佛の三道なり。今は儒道を以て宗教とするものなし。其祖孔夫子も亦宗教の本旨に就きては少しも之を論ぜず、唯社會に活ける人間に向ひて仁の道を敎へしのみ、社會外他界の生活に就きて人生の歸趣を語らざりき。然れども之れを宗教たらしめんとせしことなきに非ず。

されど今は唯現日本の社會を知るために、又日本國の歷史に現はれたる風俗習慣等の本源を知るために孔子の書は必用なるのみ、其書は少くも三百年前の過去を照す光なればなり。而して他の方面に於て猶一の利益

あり、即ち多くの眞理を簡明にいひ表せることとこれなり、知識を硏き、判斷を正しくし、善美の名分を記憶に止むることに於て便利なるは此哲學に優るものなからん。然れども日本の現狀に於ては公德私德の上に影響を及ぼす事、蓋し英國哲學、獨逸哲學と同じく左程效力なきものなり。

以上の如くなれば、儒道が過去三百年間に日本國民に及ぼしたる影響を詳論するの要なし、最早其道も大方廢れて、たま〳〵孔子及び其道を引用するものあるも、泰西に於けるプラトーン、ゼノン、エピキユール等の言と大差なく、東洋哲學史上に於て一個の塲所を占むのみ、孔子旣に死せり。

（三）神道に就きて

神道に就きて日本の讀者に多くを語ることは甚だ難しとなす。蓋し斯道に關する言論は日本人の心の最も感じ易き所に觸るゝを以てなり。然れども今强てこれを試みんか、神道を宗敎として之れを見るに兎に角興味ある美はしき敎へなり。神靈が國民の子孫と共に冥々の中に交はりて永へに之を守るといふ。故に日本に於ては家庭に於ても山林に於ても若くは洞窟に於ても池沼に於ても祠あらざるなく、幸福なる日本國民は神（多く其祖先なる豪傑の靈）と共に世界の美國に住せり、豈美なる感情に非ずや。

かゝる單純なる信仰を以て愛國敬神の情を養ひ來りし日本國民が、初めて他國人と交通して、他國の歷史を研究せし時は日本の神道者は多少の苦痛を感ぜしならん、例へばエジプトの如き猶太の如きギリシャの如き何れの國といへとも古國の創業者は皆神なればなり。ギリシャの神話にて最大の神をジユピターと稱し日の父をいふ。又ヘルキユールは戰の神なり、オリンプは神の住國なり、此點に就きて余は多くをいはざるべし、唯思ふに神道の經典も久しきを經ずして文學美術と同じき位置に止る事あらんか。

余は神道に說く所の道德が現社會に幾何の影響を及ぼすべきかを疑ふ。一には神道の敎義は果して明確に定義せられたるものなし、二には神に捧ぐる所願は地上の利福のみに拘はりて靈性と歸趣とに就きて之を語るものなし。これ神道の欠點なり。

且つ其道德の規矩とする所は日本人は元來正しき民なるが故に正しき道を踏むべしといふ所謂惟神の道と稱するものにして、餘りに簡單なりき、若し夫れ太古法律刑罰の要なく民人惡心なく、正しく美しく生活せし時

にこそ或はカンナガラの大道も其効ありつらん、當今の如き銅臭鼻を突くばかりなる弗時代には無用なり。

（四）佛教に就きて

日本文明の大部分は佛教の影響に歸せざるべからず。智識の方面よりいへば日本に支那の學術技藝を輸入したるものは佛教の宣教師なり。道德の方面よりいへば佛教は慈悲を第一に宣言し、又戒律を道義的生活の要件とせるを以て日本人の性質に最も適中したる藥を與へたり。由來日本人は放逸、過激なりしなり。然るに著しく忍耐と親切の情を加へたるは佛教が日本國民に信ぜられたる結果なり。

されど同時に佛教は其汎神的の教義を以て、萬物を混同視して日本國民の精神に夢幻的の空想を與へたり。未來に於て虛無寂滅に歸するといふは情慾を消すと同時に失望に陷らしむることなきか、佛者教理上に於て能く辯ずるものありと雖實際に於て疑はざるべからざるものあり。又寂滅の歸すと稱して猶且來生の福祉を得んが爲めに功德を積むべしといふ、吾人門外漢の知る能はざるところなり。

又最も奇異に耐へざるは其尊信する所の佛躰に就て何をも知らざるにあり、例へば觀音の如き、金比羅の如き、何者なれば之を信ずるか、偶像禮拜とは夫れ之をいふなるべし。

又近時舊佛教を陳腐なりとし、其過去の教義の圈內を脫して迷信と稱せらるゝ所を除かんとて泰西哲學の一部を取つて加ふるものあり、汎神哲學と佛教とを合することと難きに非ず、されど之れを以て其結果は如何、恐らくは人民の信仰及び實行の點に於ては効なく宗教の境を超えて汎神的世界觀及び人生觀たるに過ぎざらんのみ。

以上三教に就きて約言すれば日本はより多くの宗教的習慣を存せり、又宗教に於てより多く美なる有益なる眞理を有せり、然れども三教共に其過去を研究し其全躰を達觀すれば何れも今日の日本社會に對して尙足らざる所あるはいはずして明かなり。

東部亞細亞に於ける鐵道の將來

（其二）

天山處士

本號より數月に亘りて連載せんとする此篇は、或

る種の使命を帶びて多年歐亞の内地を踏査し、最も事情に精通せる某氏が諸種の經營中、亞細亞に於ける鐵道の將來に關し、かく有らざる可らず、又かく實行の期有るべしと斷ぜられたる鐵道線の大躰なり。今回特に乞ふて本誌の光彩となしぬ、悉く根據有る苦心の材料、希くは無責任なる世間論客の空文と同視する勿れ。著者の本名は憚る處有て公開するを得ず、特に匿名を用ひたり。且つ著者は其材料を供せられたるに止まり、文責記者に在り。萬一誤謬有らば著者の指示を得て訂正するところあるべし。

記者

緒言

支那の大陸は今や赫灼たる日光の下に在る大なる雪達摩の如し。數十年凍結の狀態にありしものが一朝文明諸國の陽光に照らされて、日一日、刻一刻、融解されつゝあり。西南部に於ける英佛の壓迫、沿岸及び楊子江域に於ける日本及び英國山東に於ける獨逸等の經營は云はずもあれ、蒙古に向へる露國の大探險隊は今やエム、ボーボーフ氏指揮の下に其大通商路を發見せんとして出發し、長く世界の秘密國と呼ばれし西藏すら現在コサック鐵騎の縱橫に蹂躙しつゝあるを報ず。想ふに一世紀の四分の一を經たる後の支那は、文化の度又今日の如き面目を留めず、鐵路の如きも四通八達の盛況を見るべし。

由來支那大陸の鐵道を經營せるもの多し。既設線の外、未設の鐵道として天津保定府間の津保鐵道、成都より漢口に出でんとする川漢鐵道、天津より鎭江に出でんとする津鎭鐵道、及び此鐵道より分岐して河南府開封府等を連ねんとする河開鐵道、河南の鄭城より南京の向岸浦口に達する鄭浦鐵道、南京上海間の滬寧鐵道漢口廣東間の粤漢鐵道等あり、白耳義のシンジケートを初め英米其他の國人に依て已に布設權を有せり。然れども此等の數線は多く南北を通ずるものにして且つ一局部に止まる未だ東西を貫く大幹線の籌策あるを聞かず、而してこれ亞細亞の今後に於て大必要のことたり。これ吾曹が茲に中央公論の誌上に依りて卑見を開陳せんとする所以にして、一篇題目の主旨これに在りとす。

東部亞細亞の四大鐵道

曰く滿韓聯絡鐵道、曰く阿爾泰北京鐵道、曰く天山東海鐵道、曰く南淸印度鐵道、吾曹は以上を名けて東部

亞細亞の四大鐵道と云はんとす。其天然の地勢より見其交通の必要より見、其文化及び產業の開發より見て此四大鐵道は是れ東部亞細亞將來の發達に伴ふて完成せられざる可らざるものなり、いさゝか吾曹の實踏せる經驗に據り、此四線を說明し、其工事の難易、其哩數、軌幅、敷設後の結果等を說かんとす。而して先づ說くべきは四個線路の概略なり。

其一　滿漢聯絡鐵道

四大鐵道の中、其哩數最も少く、其工事最も簡に、比較的容易たる線路を此鐵道とす、其大躰は韓半島に於ける現今着手の京釜鐵道を延長し、義州を經過して遼陽に出で、東淸鐵道と聯絡し、以て柴比利亞大鐵道と結び、世界の公道(ワールドハイウエー)となすものなり。

(一)此線路に就て釜山より義州までは世人の既に熟知せるところこれを說くの必要なきも、義州遼陽間は未だ之を調査したる人少し、此義州と遼陽間に於て大工事と稱すべきものは摩天嶺の隧道開鑿工事と鴨綠江の架橋のみにして、此二大工事を除けば容易に布設し得らるべし。此二大工事と雖、大陸鐵道としては難工事と云ふべき程のものに非ずして、他の三大線に比して最も容易なるものなり。

(二)此の幹線の補養線(フィードライン)として京城元山間の鐵路必要なり。

此線の終點として釜山を以てするは最も不可なることにして、其狹隘京釜鐵道の今日すら其終點として不十分なり、況んや他日世界の公道たる大鐵道の終點、今世紀太平洋文明時代の海陸連結點として、其用ふるに足らざるは論を待たず。然らば此に代ゆるに如何なる地點を以てすべきかと云ふに、馬山浦、又は鎭海灣の全部を以て釜山に代ゆべし、特に鎭海灣は馬山浦よりも猶より多く完全なるを見るなり。

(一)鎭海灣を終點とする時は、京釜線中の大邱府より分岐して洛東江に沿ひ、漆原に至り、馬山浦を經て鎭海灣の或る地點に達す。

(二)我邦の爲めに一言せざるべからざるは、此鎭海灣を安全に保護し、且つ日本の海上權を確立せんが爲め、巨濟島の竹林浦を以て我要港とし、對馬佐世保と相呼應すべきことにあり。かくせざれば將來朝鮮海峽の全權を完全に我に掌握するを得ざるべし。

(三)釜山馬山浦鎭海灣の比較は四大線を概說せる後、

更に他の條下に於て詳說すべし。

其二　阿爾泰北京鐵道

第二のアルタイ北京線は柴比利大鐵道のヲムスク(Omsk) より分岐して、イルチス (Irtish) 川を越へ齋桑湖(Zaisan) に出で其西南を廻はりて黑イルチス川に沿ひ或地點にて阿爾泰山を通過して科布圖(Kobdo)に出て、科布圖よりアルタイ軍臺(道路の名)に沿ふて烏里雅蘇臺 (Uliastai) に出て、再び軍臺に沿ふて張家口(Changchia Kao) に達せんとするものなり、張家口より北京までは已に從來計畫せる線に依る。

(一)此線科布圖に出づるまでに一の比較線有り、即ち烏蘭達坂にてアルタイを越ゆるものこれなり、福島少將は曾て此路を踏査せり。

(二)アルタイを越ゆるの鐵道は實に大工事たり、此を越ゆるは比較線の烏蘭達坂よりするを最も普通とすべし。然れども烏蘭達坂の高度海拔約九千三百尺あり、イルチス川を離れナリム溪に入りて後、科布圖に達するまで、連山重疊の間を過ぎざるべからず、假令アルタイ山の傾斜はヒンドクッシユ、ヒマラヤ等の山脈に比すれば緩なりと稱するも、鐵路を布くに於て到底大々の難工事たるを免れず、比較線は此の如し、其本線のザイサン湖に出づる線を見るに、ザイサン湖よりイルチス河に沿へる間は山溪甚しからずして、高峯深溪の難工事は比較線よりも短縮し得べし。然れども其科布圖に達する近傍に於て、アルタイを越ゆるの一百哩程は異常の難工事たり、イルチス河面の高度二千五百尺、科布圖の高度四千三百尺、而して此兩處の中間一万尺のアルタイを横ふ、大隧道の外別策無し、然れどもシンドビシン鐵道 (ルック、ジヤンクションよりチヤマンに至るもの) に比すれば或は不可能の事に非るべし。

(三)阿爾泰軍臺の砂漠を經由せるや、只地圖のみを見たる者はこれに鐵路を布設するの無謀に驚かざるはなしと雖、事實は全くこれに反し、其工事最も容易にして殆んど枕木を散布するに過ぎざるの地多し、又水を得るの難を思ふものあるもこれ又容易にして決して難事に非ず。此事は實査せざるまでも「朔漠方略」を一讀せば疑問氷解すべし。

此線中烏里雅蘇臺張家口の間にも比較線有り

(一)上に云へる軍臺に添ふて張家口に出づるものと

（二）ウリヤスタイより庫倫(Ulga)に出て庫倫より張家口に出づるもの

にして、此第二は庫倫を經過するの利有ると同時に多少山嶺に鑿鑽をなすの覺悟なかるべからず、然れども庫倫の經過は種々の利益あり、福島少將は往年柴比利亞旅行の際ウリヤスタイ、クーロン間を踏査せり。

右の比較線いづれを採るとするも、他に一線補養線の必要有り、則ち

（一）の比較線を取る場合軍臺に添ふて直ちに張家口に出づる場合には、軍臺に添へる線路の或る地點より起工してウルガ則ち庫倫に達し、ウエールフネ、ウヂンクス(Vervne Udinsk)を經てサイベリア大鐵道に連續し

（二）の比較線則ちウリヤスタイより庫倫を經過して張家口に出づる場合には、庫倫より岐れて恰克圖(Kiakhta)を經て前と同じくウエールフネウヂンスクに出て、同じくサイベリア大鐵道に連續するなり。

此補養線は其いづれを採るとするも本線より却て利益多く、且つ工事容易にして蒙古及び柴比利亞の商業鑛業を第一とし其他種々の開發に至大の便宜を與へ、其關係地の光景を一變するに至るべし。（以下次號）

風俗時弊談

伯爵　板垣退助

七　學校以外の教育と俗曲の改良

かくの如く社會は事實を以て教育するのである、家庭の教育と社會の教育とが學校の教育と相待つて目的を達し得らるゝ、これに就て又音樂と云ふものが最も必要である、東京に此一年中に寄席に這入る者が何ぼあるかといふと、百万人程あるさうである、昔は寄席に於て最も勢力を占めて居つたものは講釋師であつた、今日は其講釋師といふものは排斥せられて、殆ど晝間、隱居などゝいふ閑人を捉へて講釋をやつて居る位で、晩景の仕事でも終つて、風呂にても行つてそして行かうといふ、良い刻限に寄席を占めて居るものは何であるかといふと女義太夫である、其女義太夫も今日は又下落して、何とか踊といふ、浪花踊でもなければ、何とか踊といふ、私は見たことがないが踊が頻に行はれて居るやうであるが、其寄席といふものが何處に一番餘計あるかといふと、神田にある、神田は何が餘計

居るかといふと、學生が多い、さうして見ると學生が確にそれに這入つて居るに相違ない、さうすると實に一日之を暖め、十日之を凍すの類と言はざるを得ぬ、誠に音樂などといふものは最も人が興味に感するものである、即ち音樂といふものは其情を發動せしむるもの、理屈ばかりではさう骨身に感じないものが、此音樂に於て情を喚發させる時には其記憶も深く入り、又大にそれに次て人を支配する、例へば軍歌を歌ふて往けば人の氣が荒々しくなるとか、又優美な唱歌を歌はして置けば人が優美になるとか、此音樂といふものが支配するとゝいふものはナカ〳〵有力なものである、して見れば音樂の改良も致さなければならぬ、その點からして私は彼の音樂としては日本第一の有名な人でありまするが、田中正平といふ人がある、どうぞ此人を勸めて俗樂の改良をやつて貰ひたいといふことを頻りと申して居る、又申して居るばかりではない、やらうといふことになつて俗曲改良の爲めの音樂學校を建てようとして、餘程話が進んで居るが、未だそれに至らぬのでございます、かく俗樂の改良が行はれて學校以外の教育といふものが追々と進んで來れば風俗の改良も從て出來る、それでなければ教育が眞に目的を達することは出來ない。

八　細民と宗教家

それから又人の品性を養ふに、即ち道義心を養ふに、其中心より之を養ふといふのと。又一つは心外の事物に於て之を養ふ、物質的に於て此道義心を養ふといふ此の二つありますが、それはドッチが宜いにしても、コッチが宜いにしても、兎に角是は内外からやらなければいかぬに相違ない、それになると私は風俗といふ範圍ではありませぬけれども、慈善業といふものを大にやりまして、さうして彼等細民の生活を強固に致すならば、始めて此徳育といふものが出來るであらう、所謂恒產あつて恒心ありといふ譯になつて、徳育といふものが全く出來るであらう、さうして見れば慈善業といふものを大に盛に致したいと思ふて居る、序に是は申しますが、我國の宗教を以て任ぜらるゝ所の諸君に於きましては、必ず精神から徳義心を養ふといふ一片のもので私はいけまいと思ふ、即ち物質的に於ても又大に徳義心を養ふの方策を講ぜなければならぬ、それてあつて見れば、宗教家といふものはドーぞ此慈善業といふものを大にやられたいものと思ふ、彼の歐羅

巴などにありましては專らそれに力を盡して居る、此處に敎ふることがあつて、彼處にそれを事實に施す、斯ういふ譯であつて、慈善事業を宗敎家といふものは大にやらなければならぬと思ふ、既にこの東京府十五區二郡に二千人の盲人按摩がある其盲人に醫學敎育を授けやうといふことに付ては、私が之を發起しましたが斯ういふ類である、其他今の監獄が男囚千人に就て女囚二百といふ割合になる、其源因は下層の女子は衣食に困らぬが、男子が却て窮する爲めである、これら貧民が罪を犯かす前に衣食に窮せざる樣消費組合などを作ること等や其他慈善業といふものは甚だ振はないのである、どうぞ宗敎家の御方は一層茲に力を入れられむことを希望するのであります。

九　風俗の改良は先づ外形よりすべき理由

扨て此風俗改良といふことに付きましては、斯ういふ論者がある、唯風俗改良といつて衣服をどうするとか斯うするとかいふやうなことでは到底いかない、其中心から大に養ふ所があつて、道德の根底より改良をせねければいかぬといふ論者がありますけれども、是は私は間違つて居ると思ふ、成程道德心を大に發育するといふことは甚だ必要でありませうが、風俗必ず道德とはいかない、例へばシャッポを被て戸外に出づることに致したいものであると、茲に問題が出た所で、シャッポを被らずに戸外に出たから是は不道德なといふことはない、唯躰裁が惡いといふことに止まるものでございます、又中には顯然と道德に關る風俗もある、或は車の中などで老幼女子などに席を讓るなとゝいふことは是は道德であります、然れども風俗必ず道德とは全くいかないのである、それで我々が風俗改良といふことを最も爲し易いことから爲したいといふので、二十二箇條の決議事項といふものも出來て居りまして警視廳などへもそれを出しますし、文部省へもそれを出しまして、先づ今日皆異論がなくして、どうぞさうしたいものであるといふことに既になつて居る、それでさういふ外形上から制裁を加へて行かねばならぬ、世の風潮を制せぬければ此風俗改良といふものは出來ない、斯ういふものが流行りになつた、それをやつて居らぬ者は人が怪しむといふやうに制裁を加ふるやうにならぬければならぬ、それを初から道德の根底から改良をせぬければならぬ、同志は來れといつて見た所

が極て少數である少數では世の風潮を制するといふことは出來ない、それて必ず此階梯を踏まむとすれば、先づ爲し易い外形上から制裁力を起さなければならぬ其風潮といふものはどういふものであるかといへば、例を擧ぐれば、今を距る餘り遠くもない時までもありました彼の此チョン髷であります、今チョン髷を結ふて大道を歩いて見よと言つた所が誰も歩く人はない、なぜないといふと、歩いたら必ず狂人と笑はるゝ、又チョン髷を結つて子供をアヤしたら子供が泣く、犬が吠へるといふやうなことになつて來るもので、之が所謂風潮である、其風潮を制さなければならぬ、そこに制裁力が一たび出來たらば、それより是れ、是れよりそれと次第に足を入れてやることは出來ます、今日は道義心を養ふには、宗敎家は信仰の力に依つて道義心を養ふ、又敎育家は智育に依つて道義心を養ふ、我々はさうでない、政治的に外面から制裁を加へて行かうといふのである、之を醫學に譬ふれば、宗敎や敎育といふことを以て任ぜやうといふ人には、是は醫師でいへば内科である我々のやらうといふのは則ち外科であるそれで此内外相合してやらねばならぬ、元來目的とする所は其身躰を健全にしやうといふが目的である、斯うふ譯に落着するものである、然らば宗敎家、敎育家といふものと相携へて目的を達することを得るやうな譯にならうと思ふのであります、寔に宗敎家、敎育家といふものと、我々の唱ふる所の風俗改良といふものは今より相輔けて始めて目的を達するものであらうと思ふのであります。

▲奇妙なる新聞の名

亞米利加程奇妙なる新聞の名多き國はなし、其一例を擧ぐれば

●「眼玉」アイ
●「煉瓦」ブリック
●「土曜の颶風」サターデー、サイクロン
●「頭の中心」ヘッド、センター
●「熊蜂」ホルネット
●「慧星」コメット
●「手斧」ハッチエット
●「高原の梟」プレリ、チウル

等の如し



海外大勢

歐人の眼に映ずる東亞の風雲

東亞の低氣壓は世界各國の注意して觀察するところ、我社は重なる各國の新聞に依り、毎號本欄に於て彼等の評論を紹介せんとす、時には我國に對して無遠慮なるものありと雖、世界の全局面に注意を拂ふことの稀れなる邦人には、一々參考の資とすべく反省の料とすべし。

記者

▲露は滿州鐵道を保護するの權利無し

「七月三日デイリー、グラフイオ紙」

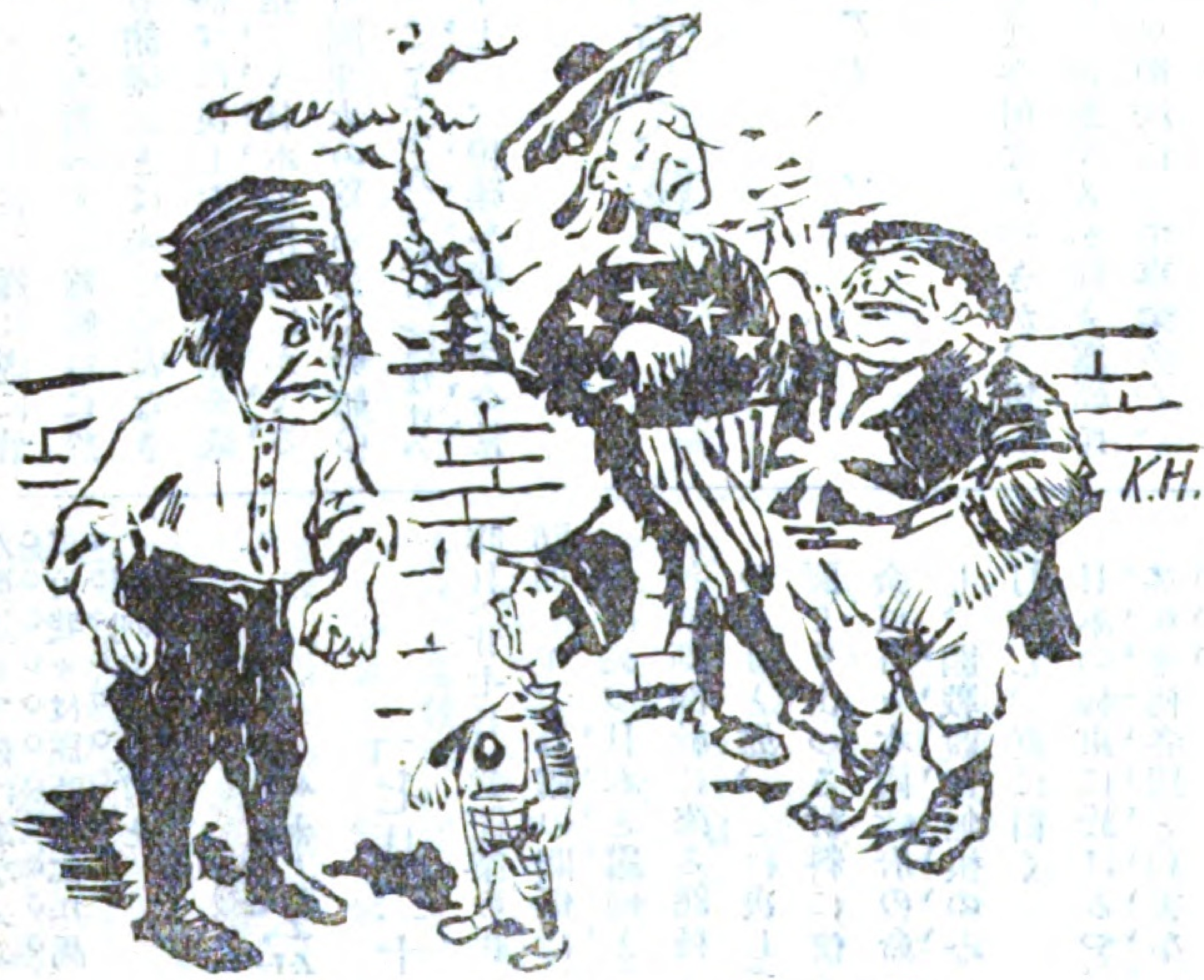
露の陸軍大臣クロパトキンは、東洋の遊歷を終りて前週、露都に歸れり。彼が遍歷の目的たるや、既に世人の明かに認知せる所にして、即ち東亞現今の狀態にては、如何程の程度まで露國政府の政策を安全に、滿州に於て進行せしめ得べきやを視察せんが爲めなりき、故に其の淸韓を歷遊し、終に日本の訪問をも終へて再び滿州に歸來するや、彼は直ちに軍事並びに外交の事件を商議せんが爲め旅順口に於て開かれたる會議の首領に選ばれたり。而して其の親しく見聞する處に依りて、今後取るべき政略の方針を議定したりき、此の會議の結果が巴里に於て發行する「フイガロ」紙上に大畧述べられたりし如くんば、露は猶絕えず滿州の撤兵を口にすれども、其撤兵が果して何れの日に實現さるゝや、或は遂に實現さるゝことなくして終るやは、吾人の豫言する能はざる所なり、而して吾人は、此の口先ばかりなる、虛僞の撤兵と共に、猶二個の重大なる公言が露國政府の口より出でたるを聞けり。其一、露の滿州占領權……而かも不正なる手段に依て得たる……の期限が未だ終りに達せざる間は、淸國は何れの國人に向つても其都府の開放を許可せられざること。其二露國の撤兵は只單に鐵道未設の地方のみに止まるものにして、既に鐵道の既設されたる部分は撤兵を爲さゝること、即ち之れなり。從來露國は其の鐵道を保護し、發達せしめんが爲めに屢々不法なる政策を行ひたりき、然るに今又斯の强硬なる要求をなす所より考ふるときは、露は明かに滿州鐵道の全線を、全く自國の管轄に屬せしめんと企つるものゝ如し彼は又更に淸國に向つて、此の鐵道に沿へる何れの都市を開放し何れの都市を開放せざるかを速かに通知すべきとを要求せり　而してこは固より列國の默許すべき事にあらざるなり。滿州の所有權は究竟淸國に屬すべきものにして、露は只一時之を借用せしに過ぎず、滿州鐵道は則ち之

れ清國の一會社なり、露の政府は到底此處に軍隊を設備するの權利あらず。故に若し清國にして、露の不法なる此要求を許諾せんには、勢ひ又他國との條約を破らざるべからず。

▲清國政府の信用は日本人の獨占

「七月四日仝紙」

日本人は、彼等が曩日の仇敵たりし清國と相提携して、能く其の商業貿易を發達しつゝあり、彼等は北京に於て大學を開き、其主權を全く自國の教授講師の掌中に握らしめぬ、而も清國皇帝又宣言を下し、滿心の好意を以て之を許容せり。日本人は又北京の市政改頁に盡力し、且つ清の軍隊を教導訓練せり。吾人は未だ嘗て、斯くまで清國の信用を得たる外人あるを見ず、彼等は又更に國民政略に便せんが爲め、彼の露清銀行に相對して、日清銀行なるものを設けんとせり、而して斯くも日本が清國に於て諸種の活動を試むるを得るに至りしは、全く此の兩國が人種幷に宗教に於て相一致せるの事實、與りて力あるものにして日本の清國に同情するも、清國の西歐諸國を捨てゝ獨り日本とのみ最も親しく信賴するも皆是れが爲めのみ、日本の勢力が今日の如き發達を來したるは、其の同盟國なる英國に取りては頗る慶賀すべきことなるも、或る他の國民に取りては寧ろ望ましからざる現象なるべし、特に露の如きは、日本の勢力が、現今の狀態を以て漸次發達し來らんには、たとへ之が爲めに全く壓倒さるゝことなしとするも、又其諸種の計企、幷に野心に對して少なからざる障害を蒙むるや、必せり。



{露と日と睨み合へる後ろに英米有り露は日を心に留めずして却て英米を注意せる圖}

▲日本は英國を賴むべからず

「七月十日 ノーボエ ウレミヤ紙」

露國は亞細亞に於けると等しく、歐羅巴に於ても亦平和の守護者を以て自任す。故に日本は決して、戰爭に於ては到底援助すべくも見えざる彼の英國を賴りて、其の兵力を借らんと計るべからず、平和なる政策を採用せんことは、日本にとりて啻に其經費を節減するのみならず、又露國に對して親密の態度を維持することを得べけんなり。

▲ミスター、ヘーの功勞

「七月十八日　ロンドンタイムス」

ミスター、ヘーが露清兩國に對して試みたる嚴峻なる談判は、少くとも露をして新しき契約を取らざるを得ざらしめたり、茲に於て露は遂に最初の抵抗を捨てゝ清は滿州の諸港を開放せんことを誓へり、旅順口に於ける露の會議は終に日本及び合衆國が望みたる諸港（とは未だ公表なきも奉天府及び大東溝なるべし）を開くことを許すに決したり、最初合衆國は大孤山の開放を要求せしも、後には之を捨てゝ日本の撰擇にかゝる大東溝を撰ぶに至れり、之れ前者は冬季の數月間凍氷の爲め全く船舶の出入を阻碍らるゝも、後者は年中開放し得らるゝことを知りたればなり、ミスター、ヘーが亞米利加の特權のみを主張せずして、困難を顧みず全世界の爲に盡せる功は沒すべからず。

▲日本人は何の權利有て露の撤退を迫る歟

「七月廿五日　ダブリン　アイリッシュ　インデペンデント紙」

日露の相仇視すると已に久し、今後の雲行果して奈何なるべきか、想ふに一旦占領せし滿州を暗々と日本の抗議のみにて返却するか如き露國に非るべし、聞くが如くんば露國の移住民は日々此肥沃にして事業多く、且つ氣候の本土より良好なる滿州を望んで永住しつゝありと、オテッサ及び旅順口の通信及び新聞に依るに、露人の議論又聞くべきものあり、曰く日本は何の權利有て滿州の露兵を退けんと云ふか、かゝる言を出だす前に、先づ自家の朝鮮に於ける既往の行動を反省せよ、朝鮮政府は北京の如く團匪と相應じたるに非るも曾て二千の日本兵を常駐せしめ、恐るべき王妃事件をすら引き起こしたるに非ずや、今日滿州の文明的措置に向て猶口を挿まんとするならば、日本は先づ朝鮮に於ける自家の經營を撤退して後に之を云ふべし、若し旅順等の經營を捨て露人に退けと云はゞ我々は同時に仁川馬山浦鎭南浦等に於ける日本人の退去を主張するの權利有るなりと。

▲林公使の談話と龍動の新聞

「七月二十八日　デーリー　ニュース」

昨日（廿七日）我同業の代表者は日本公使林男爵を其避暑地ハンプトンに訪問して、日露の關係に就て問へり、公使は徐ろに口を開ひて

余は先づ日本と露國との關係が從來と何の異なるなきを證せんとす、英國新聞社に來る諸種の通信報道は今にも戰爭の初まるが如く說くものありと雖、これ決して信憑するに足らず、特に支那方面より滿州方面より出づる材料に信すべきもの少し。

余は日々本國政府の命に接す、然れども秘密を要する程の事は何もなし、開戰說は無根のみと打消し、更に曰く

日本の極東に於けるや、其利害の程度や、他より深からんも、要するに英獨米佛各國と利害を一にす、これら各國の態度とは必ず同一の步調にあり、元來戰爭なるものはいづれの國民も力めて避けんと欲するところ、よしや勝ちたりとて其損害は更に免るべからず、日本豈好んで戰を欲するが如きことを敢てせんや、利害は共通なり、日本のみ獨り戰を欲すと云ふは謂れ無きのことなり。

さりながら、何れの國も自らの利益を保護する爲めには活動せざる能

ばず、現在日本のなしつゝある事、露國のなしつゝある事、共にこれが爲のみ傍より見ればこれを以て戰機の近けるものと思はれん。

更に巧妙の辭令を以て曰く

アングロジヤパン同盟は極東に於て利害の關係最も深き兩國が極東の平和を維持せんが爲めの同盟なり、滿州の門戸を開放し世界に利益を均霑せしめんとす、露も亦異議はなかるべし、英も米も獨も佛も極東には利害を共にす、何を苦んで日本獨りが極東の保護者たるが如き顏をなさんや。

話頭一轉艦隊の事に就て述べて曰く

日本も今後猶軍艦を增加するの計畫有り、余はこれらの新造艦が悉く貴國に於て製造さるゝを喜ぶもの有り、日本には汽船會社の大なるものあり戰時に際して商船の軍事用に流用さるゝもの數多し

とて、露の艦隊や日本の艦隊が旅順に集中せりとの通信に驚けりとて旅順口は露の軍艦の外英の威海衛獨の膠洲灣の如く他艦の入港を許さゞるを說き、且つ曰く

露國は大に戰艦の增加新造に力を致しつゝあり、我日本の新艦を作るも只他國の爲すところを倣ふに過ぎず、これを作るは急場の危難に應ずるが爲めのみ、平和の保險のみ、之を以て戰ふが爲めと云ふは誤れり。

日本は支那戰爭後世界各國より戰爭好國民（ワーワイキチーシヨン）と云へる難有き稱號を得たり、ワーライキネーション、今も猶戰爭好き國民なり、さりながら自ら進んで世界の平和を破りてまで戰をなすの戰爭好き國民に非ず。

かく云へる林公使は終りに曰く

現在のところ決して驚くべき程の問題起る氣遣ひなし

として、東亞問題の現狀に心配無きことを云へり。

▲開戰は到底日本の爲に不利なり

「七月二十九日　ニユーキヤスツル、デーリージヤーナル」

日本の公使バロン林の吾人に示せるが如く、日本は只平和を望む爲めの日英同盟にして戰爭の爲の同盟に非ずとの言大に吾人の意を得たり、吾人は到底日本が露と戰ふの不利たるを見るなり、想ふに日本が世界の外交に仲間入りせるは日清戰爭後にあり、これに依て名譽ある地步を得しと共に、三國干涉なる苦がき經驗をも得たり、よし今回露國に打勝つとするも滿州を自國のものとする能はず、軍備は徒らに增大して、增稅の餘地無く、財源涸渴し、其政治家は國債を歐洲に募ることや其他諸面を保ちて歐州の國民と相拮抗するの技倆能力に乏し、且つ吾人は元來日本の文明に疑ひ有り、若し日本にして一朝露國に敗らるゝの事有らんか、一足飛びに進步せし日本は、又一足飛びに退步するの恐れあり、歐州の各國は其發達に根底有り、長き歷史の保證に依り、今日あるを致せり、よしや其一國が他と戰ふて一時敗らるゝことあるも、自らも又他も之を回復し得るの希望を有す、日本は只東洋の實質に歐洲の假面を着けたるに止まる、一朝の敗衄は直ちに素面の東洋的とならん、若し之に反して日本が、我々と同じく高加索族の歷史と同一の徑路を踏みて、漸次生長發達せる文明國なりせば、かゝる疑も生せざるべし、何分にも蒙古族の地味に殖へられ蒙古的の滋養を採りて生長したる木に歐洲風の接木をしたるが日本文明なり、若し此接木を折り離すものあらば、元の木となるは見易き道理なり、露の爲めに一敗せし後の日本は過去二十五年間に養ひ

し文明を破壞し再び此の如き異數の發達をなし得ざるものなることを記せよ。

▲露國に戰意無し

「七月二十九日　ロンドンタイムス」

吾人は日本が今にも露國と戰はんとするの形勢を示し、且つ日夜其の戰備を怠らざることを屢々耳にせり、然れども、吾人の見る所を以てすれば露は之に對して毫も戰意を有せざるもの丶如し、彼は今内國の改革に急にして從て國庫の經費亦多く、到底手を東亞に下して、之が覇權を爭はんとするの餘裕なきなり、故に若し露國にして一朝戰意を示すことありとするも、そは只受動的の行動に出てたるのみにして、決して自から進んで他を襲擊せんとするの意にあらず、彼は只自國が戰鬪準備をなせるを見て、日本が遂に其手を引くに至らんことを望めるもの也、故に其の行動たるや、單に脅嚇的のみ、然るに日本は又露の彼を恐れざること、及び其の戰備の既に整頓せること等を固く信じて、互に相警戒せり、されど吾人は、日本の勝利は只一時一局部に止りて、到底、根底より露國を壓伏せしむること能はざるやを恐る丶ものなり。露の信ずる所に依れば、若し日本が進んで彼を侵擊し來るならば、英國は之を助けず、佛も亦露と連合することなくして、英と共に日露の和約を主唱せん、若し夫れ亞米利加に至りては自國の商業に利害影響を及ぼさゞる限りは決して之に容喙することなかるべし。



内亂や滿州問題や種々の火藥只一片の燐寸にて露全土の爆發とならんとす

▲旅順口と浦塩斯德を陷落せしむる方策

「七月三十一日　ポール、モル、ガゼット紙」

露西亞は既に優勢なる軍隊、及び其の軍隊に依て訓練されたる支那兵。其軍隊の守護せる鐵道、精妙なる軍略、幷びに有力なる艦隊を有す、故に一度其の機熟するや。彼等は立ち所に數萬の軍兵を率ゐて北京に闖入し、太沽を襲ひ、Pataiho を略し、遂に自ら直隸灣の主たることを得んされど露は守るに於て非常の困難有り旅順口の位置や、守るに難く、攻むるに易し、或は海陸並び進みて之を砲擊するを得べく、或は包圍以て之を餓死せしむることを得べし、若し夫れ浦鹽斯德に至り

ては更に攻撃に便なるもの、一度黑龍江の水を引いて之に注がば、全市忽ちに洪水となり、兼て又露の船舶を閉塞せしむることを得ん、此時に乘じて海上に浮べる露の艦隊を不意に襲擊せば、彼等は未だ戰に至らずして或は沈み或は捕はれ、此處に露の海權は忽ち消滅に歸せん、本國との交通單に陸上のみに限らるゝに至らば、露は既に孤中の鼠のみ、西比利亞鐵道は單線なるが故に彼等は到底敏活なる運動をなす能はず、從つて食糧の運搬、軍隊の派遣等、常に遲滯を來すや、必せり、此時に當りて浦鹽斯德と旅順口との交通は、滿州を通じて進み來る敵兵のため Ki-Tin に於て斷たれん、而して更に艦隊と共に海陸併せ之を攻めば、浦府の陷落は蓋し火を見るよりも明らかならん。

▲日本政府は將來を考察し過ぐるの癖有り

「八月一日　エコノミスト紙」

今日日英兩國が共に期望せる所のものは、兩國何れかゞ先づ露と衝突を來さんことにあり。而して露が其援助として佛國を招かんことは、更に日本の望み待つ所なり。果して然らば、諸多の事變其の間に續出して遂に日と英は互に相連合し　露に當ることを得ん、されど吾人は、現今に於ては未だ斯る事件の起らんとする兆あるを見ず、吾人は只考ふ、露西亞が東亞に於て保たんとしつゝある地位は、必らずしも日本の野心と撞着を來すものにあらずと、何となれば露は只東亞に於ける自己の權力を最上ならしめんと企つるのみ、故に若し日本にして露と同じく東洋の覇權を自己の掌内に占握せんと望むものならば、日露の兩國は固より相仇敵たるを免れず、されど、よし日本が斯る野心を抱くことありとするも、餘りに怯懦謹愼なる日本人は自國の存在を危ふくする恐れある爭鬪に到底從事せんとするの勇なきことを斷言せんとす、若し幸にして露が佛と共に、日本を攻擊せんと企つることあらば、之れ正に日本の乘じて以て功を收むべき時なり、(此時初めて英の戰爭に加はるありて戰の歐洲に於ても開かるゝが故に)　されど日本の政府は事件の何たるを論ぜず、餘りに遠く將來を慮察し過ぐるの癖あり、彼等は露國が歐人との戰爭を避くるに力むるは、滿州に於ける自國の計畫を完成するに急なるが故なるをも知れり、彼等は又若し英國が露及び佛と戰ふに至らば其衝突の範圍は啻に東亞に限られずして、遙かに遠く擴がり行くべきことをも善く知れり。即ち英は彼の敵に會ふ毎に其場所の何たるを論ぜず、之を攻擊すべし、斯くて其戰場の直ちに西歐に移り行くべきことは之れ自然の理なれば也。故に日本は只露より攻擊の態度に出てんことを待ちつゝあり、特に佛と露が共力して日本を攻め、英が其時極力日本を助けざるべからざる境遇に到るを待ちつゝあるなり。

▲露兵西藏に入る

「八月一日　ロンドンタイムス」

清國の政府は西藏の駐藏大臣より左の如き報知を得たり、曰く、曩に風俗視察、及び地理探險の目的を以て窃かに商議を凝らし居たる露國は、遂に數百のコサック兵と共に西藏に侵入したり、而して彼等は清の政府より通行權の許可を得たりと公言して國內至る所に徘徊しつゝありと、此通報の北京に達するや慶親王は直ちに書を露の宰相に送りて、其の辯解を求め、且つ速やかに西藏の軍隊を退去せしむべきことを要求せり、されど露の宰相は、そは余の知る所にあらずとて何等の答辯をも與へざりき。依て清國政府は更に事の顚末を西藏の官衙に通じて、清政府は露

に西藏の通行權を與へらることなきを報告し、且つ彼等軍隊の動作を十分嚴密に注意すると同時に又之に對して聊かの暴行をも加ふべからざることを警戒したりき。

蓋し清國政府は數年前、プルシエーバルスキー氏の科學探險隊が受けたる暴行の結果、遂に其の隊に附隨せしコサック兵が手當り次第に西藏人を殺害したるの悲劇を未だ忘れざるなり。

獨逸外國貿易の大勢

左に掲ぐる所の統計表は、近刊の獨乙商業雜誌に掲載されたるものにして、最近十年間に彼の國の輸出入額を比較せるもの、一見して以て獨乙外國貿易の狀況を知ることを得べし。但し次表の單位は、一、〇〇〇、〇〇〇マルクなりとす、(一マークは約我五十錢)

	輸入	輸出
一千九百〇二年、	五、八〇六	四、八一三
一千九百〇一年	五、七一〇	四、五一三
一千九百〇〇年	六、〇四八	四、七五三
一千八百九十九年	五、七八四	四、二六八
一千八百九十八年	五、四四〇	四、〇一一
一千八百九十六年	四、二八六	三、〇五二
一千八百九十二年	四、二二七	三、一五〇

之に依て見る時は一九〇二年は、一九〇一年に比して、其の輸入は、九六、〇〇〇、〇〇〇マルク(即ち一、七パーセント)増加し、其の輸出は、三〇〇、〇〇〇、〇〇〇マルク(即ち六、七パーセント)増加せるを知る、又一九〇〇年は輸入額の最高に達せし時にして昨年(即ち一九〇二年)は輸出の最高額に達せし時なることをも知るを得べし。

左表は、更に獨乙が、世界の各大洲と貿易する狀況を示せしものにして、特に比較に便ならしめんがため一八九九年まで溯りて、其の統計を掲げたり、但し次表の單位は一、〇〇〇マルク(即ち、五〇ポンド)なりとす、

(一) 輸入

	一九〇二年	一九〇一年	一九〇〇年	一八九九年
總額	五、八〇五、七七六	五、七一〇、三三八	六、〇四二、九九二	五、七八八、六二八
歐羅巴	三、六一七、七〇三	三、四八一、五六五	三、七九七、二〇二	三、七三五、二三五
亞米利加	一、四七七、五九〇	一、五九二、六二〇	一、五九八、四一三	一、四一四、〇〇一
亞細亞	四一七、九七二	三九二、九〇〇	三七〇、〇三三	三四四、〇二〇
亞非利加	一六四、一六一	一三六、二六八	一四七、〇四七	一六四、四一三
濠太剌利亞	一二三、六七一	一一一、三三三	一一五、三五一	一二二、九四七

(二) 輸出

	一九〇二年	一九〇一年	一九〇〇年	一八九九年
總額	四、八一三、一四二	四、五一二、六四六	四、五七二、六〇一	四、三六八、四〇九
歐羅巴	三、七七六、九六六	三、五五一、四四〇	三、六九九、五七〇	三、四七四、五六二
亞米利加	七〇三、五一〇	六二三、二一四	六九八、四六六	六〇一、九五二
亞細亞	二〇二、八九九	二一〇、三三八	二三〇、八九八	一八一、四三五
亞非利加	九一、八〇八	七一、〇八〇	七三、一四六	六九、八一三
濠太剌利亞	四七、二一四	五四、六八六	五〇、〇四八	三九、九九一

之に依て見る時は、一九〇二年の輸入は、一九〇一年に比して其の増加すること、歐羅巴にては、一三六、〇〇〇、〇〇〇マルク、亞非利加にては、二八、〇〇〇、〇〇〇マルク、濠太剌利亞にては、一一、〇〇〇、〇〇〇マルク、亞細亞にては、二五、〇〇〇、〇〇〇マルクなるを見る、然るに只亞米利加に於ては、之と反對に、一一五、〇〇〇、〇〇〇マルクの減少を示せり、更に輸出の方を檢するに、歐羅巴諸國に對しては、二二六、〇〇〇、〇〇〇マルク、亞米利加には、八〇、〇〇〇、〇〇〇マルク、亞非利加には二〇、〇〇〇、〇〇〇マルクの増加せるを見出すと同時に、吾人は又亞細亞に對しては、七、五〇〇、〇〇〇マルク、及び濠太剌利亞に對

してはセ、〇〇〇、〇〇〇マルクの減少せるを見るべし。固より多數の貨物は一旦歐人の手に落ち、後再び海を越えて他の諸國に輸出さるゝものなれば、其の範圍は到底精密に知ることを得ず、此の輸入及び輸出の兩表に於て、大に獨乙人士の意を强うするに足るべき一現象あり、そは亞米利加が獨逸に少く賣りて多く買取ることなり。今前表の統計を更に内譯して、各國に割宛つるときは左の如し。但し單位は一、〇〇〇マルク(即五〇ポンド)なりとす。

(一) 輸入

國名	一九〇二年	一九〇一年	一九〇〇年	一八九九年
合衆國	九一一、〇八九	一、〇四二、一二三	一、〇二〇、七六四	九〇七、三三五
露西亞	七六〇、三八六	七一六、一五四	七一六、五三五	七一五、九〇四
墺太利	七一九、五四五	六九三、二六二	七二四、三三二	七三〇、三四六
英吉利	六一〇、六四〇	六五七、八〇五	八四〇、六六一	七七七、〇五六
佛蘭西	三〇六、二四六	二八一、七六四	三〇五、五一四	三〇三、一一一
英領印度	二一四、四五〇	一九七、一九三	二〇四、八五五	二三〇、四八〇
和蘭	二〇六、〇七三	二〇三、八四〇	二一五、三七九	二〇三、二九一
アルゼンチン	二〇一、七九七	二〇〇、七六九	二三四、五五四	一九四、四五一
白耳義	一九六、七〇〇	一八六、四九〇	二二〇、五〇七	二四六、〇八五
伊太利	一九二、四八五	一八二、五八〇	一八六、三六三	一九六、五九六
瑞西	一六八、七〇六	一五四、一八三	一七〇、五〇五	一七六、三〇七
英領濠洲	一二〇、一七一	一〇七、八五三	一二二、一五七	一二一、〇七五
ブラジル	一一八、五五七	一一三、八六五	一一五、四七九	九一、〇四八
チリー	一一二、九八八	一〇〇、六七二	八九、三五〇	九三、三七七
蘭領印度	九〇、八六四	九六、七四九	八三、六六四	六二、三八一
ルーマニア	八四、一九九	四七、八四八	三五、八五四	二七、一四一
瑞典	八〇、四八九	八四、二九一	一〇四、八五九	一〇四、一七七
西班牙	七四、八九五	七八、三四七	八二、四三二	六九、五四八
支那	五四、一二四	四四、五五五	三五、四九三	二八、九八九
日本	一七、七八一	一九、八〇五	一六、三七三	一六、五四三

一九〇一年に於て、獨乙に對し、輸出額の增加したるは只合衆國のみ、而して、一九〇二年に於て其の減少額の最も多かりしものも亦合衆國なり。之に次て減少の最も大なりしは英國なることを見る、今更に輸出の方の内譯を掲ぐれば左の如し。但し單位は前表と同じく一、〇〇〇マルク(即ち五〇ポンド)なりとす。

(二) 輸出

國名	一九〇二年	一九〇一年	一九〇〇年	一八九九年
英國	九六五、五四一	九一六、三八二	九一二、二一九	八五一、六四二
墺太利	五三三、〇五九	四九一、五一八	五一〇、七三〇	四六六、〇二〇
合衆國	四九九、一九四	三八五、七八九	四三九、六八四	三七七、五五三
和蘭	三九三、六三〇	三七九、〇〇四	三九五、八六八	三七七、七七一
露西亞	三四三、六八三	三一八、四一八	三二四、八二八	三九六、六二三
瑞西	二八五、三三〇	二六四、三一〇	二九二、〇五四	二八四、六六六
白耳義	二六〇、七三二	二三五、九四八	二五三、一〇五	二〇七、〇七三
佛蘭西	二五三、一七三	二四九、九〇二	二七七、六二九	二一六、六九一
丁株	一三一、二四〇	一一八、〇三九	一二五、五一六	一二五、七六一
伊太利	一二九、九八二	一二七、二四二	一二七、三一一	一一五、九六五
瑞典	一一九、一七九	一一一、三九七	一三八、三一四	一三六、一四九
那威	六一、四〇九	六五、〇三三	七〇、五八九	七七、〇二三
英領印度	五七、四〇五	六七、一三七	五六、二六九	六五、二五五
日本	四九、七六〇	四五、五一〇	七〇、三八[illegible]	四〇、九三一
アルゼンチン	四七、二三一	五四、二二二	六三、九六四	五二、三三三
英領濠洲	四五、五〇九	五二、二二六	五〇、〇四八	三九、九九一
カナダ	三八、七三四	二六、四九一	二〇、〇〇三	二三、七三一

一九〇二年の英國の購入額は、一九〇一年に比して四九、〇〇〇、〇〇〇マルクの增加を來せり、然らば最後の兩表よりして、英國は其の供給を獨逸に仰ぐこと愈々多きを來すと同時に、獨乙は英國に需むる所、益々少きを加ふる現象あるを見るべし、獨乙の合衆國に對する輸出は、六三、

〇〇〇、〇〇〇マルクの増加を致せり、而して此の増加は主として米國が非常に鐵を要求するに基づくものなり。因にいふ鐵は又、英國に對しても、獨乙の主なる輸出品なり。

海外雜纂

動物雜談

（一）蚊の撲滅策

太西洋の沿岸に位せる米國の諸州は、毎年夏季に於て陰雨烈しく、雨天月を越えて尙晴れざることあり、隨て蚊群の繁殖、非常に夥しく、爲めに諸種の恐るべき疫病、年々其勢を猖にして殆ど底止する所を知らずといふ。されど昆虫學者のいふ處に依れば、蚊は決して撲滅し難きものに非ず。適當の方法を以て之が繁殖を豫防するときは、遂には全く之を勦絶せしむることを得べし、只之に要する所のものは、其地方人の忍耐力と、多少の金錢なりとす、而して、其之を撲滅する方法の如何は、「グード、ヘルス」紙上に掲げたるドクトル、エフ、ジエー、オチスの說明によりて、容易に了解することを得べし、氏曰く、

「蚊は主として水分の多き濕地に繁殖し、樹皮の液汁によりて生活す、其雌は非常に强き嘴吻を有するを以て、堅牢なる樹皮と雖も、之を刺通すことを得べし、されど其の雄の嘴吻は雌の如く强からず、爲めに雌よりは遙かに液汁に富める植物を撰びて之に棲息するものなり。

雌は其の卵を、池若くは沼の如き、靜かに停滯せる水の表面に横たふ。其形、恰も小卷煙草を倒立せるが如く、其一端を以て水面に漂へる様は、小さき筏の浮べるに似たり、色は上下の部分に依りて異なり、上部は一般に灰白色なれど、下部の水面に附着せる部分は殆ど銀色を呈す、而して其の卵の上面は、凹状をなし、下面は凸形をなせるを以て、其全形は宛然、ボートの縮圖を見るが如し、卵の水面に浮べる時間は極めて短く、大抵は一晝夜位にて幼虫に孵化し、其長きものも決して三十時間を超えず。是等の幼虫は其の孵化せし後、暫時は猶、水中に生息すと雖も、其實、眞の水棲虫にあらず、何となれば、彼等は皆呼吸機關を具へ、先つ其水中に潜み得る時間大抵十分間位にして、他の水棲虫の如く、長く水底に止まる能はず。

故に是等の幼虫は、皆其の食物を水の表面に於て求む、即ち彼等は其の呼吸筒を水面に浮べつゝ水の動くに從つて、彼方此方に漂游し、若し小虫或は木質等、食ふに適せる小片が此筒に觸るゝ時は、直に口の周圍に具ふる毦毛を開いて之を捕へ、以て食物を口腔内に送るもの也。故に今若し此の蚊屬を永久に撲滅せんには、是等の幼虫時代に於てなすを最も容易なりとす。即ち、ケロシン、又は其他油樣の物躰を、其の水面に注ぐにあり。然らば是等の愚なる幼虫共は、其呼吸筒を全く油液中に溺らしめて、空氣を呼吸する能はず、又彼等の食物となるべきものは油液の表面に浮びて、水面に達することなきがため、彼等は兼て又其食物をも得る能はず、既に空氣を呼吸する能はず、又食物を食ふことを得ず、則ち彼等は只死あるのみ、而して之をなすに要する所の油は、極めて少量にて能く其功を奏するものなり。

幾くならずして、幼虫は蛹となり、此處に其の躰形一變して、呼吸筒は全く耳の如く、其の頭部の兩側に直立して生ず。故に蛹の水面に浮び出でたる時は、之等の呼吸筒は恰も二本の角の如く、著しく水平線上に突出す、かくて此蛹虫は概れ水面に近く、棲息するものなれども、

時としては其の强き尾を振うて底深く水中に潜むことあり、而して此時代に於ても亦前述の油液を以て、容易く之れを撲滅することを得べし。數日間此の形體にて止まりたる後、蛹は更に變じて成虫し即ち全き蚊となり、濕地に生ふる植物を辭れて直ちに飛び去るものなり。

されど蚊は一般に遠く其身を運び去るものに非ず、通常彼等は其出地より半哩以内の範圍に於て其生命を終了するものなり、只强風のため吹飛ばされたるか、又は貨物の中に閉ぢ籠められて、其と共に遠く運ばれたる時の外は、決して此の範圍を超えて飛び行くものにあらず。

然りと雖も、又蚊の繁殖力の速やかなることは、到底吾人の夢想にも及ばさる所なり、幾多の實檢によりて吾人が知り得たる所によれば、走り元、又は下水槽などの水より、空罐の底に殘れる水、牧塲などにて畜類の足痕に溜りたる水、夕立のため生じたる涼水、さては朽木の凹所に滞れる水に至るまで　凡そ一勺半匙の水と雖も、蚊は直ちに無數の卵を之に生み落して、數日を出でざる内に幾千万の同類を此の中より生ぜしむ。今試みに一個の盃に水を滿たし、之を木陰又は軒下などに放置し、二十餘時間を經て再び之を檢する時は、既に蚊卵の其中に滿ち滿てるを發見するなるべし、而して一定の蚊が一度に生む所の卵數は實に二百乃至四百に達するといへば、若し之を驅除せずに打捨ておくときは、三四日の短日間にも既に三四百倍の割合を以て其數の增加し行くことを見るべし、驚かざるを得んや。

されば吾人が此の小厄介物を全く撲滅せんには、凡て家の周圍の水淺をよくし、空罐などは悉く之を倒に置き、土地の窪めるものは埋め、筧、土樋、とゆ等は十分之を掃除するにあり、若し吾人が以上述べ來りたる所の方法によりて、各々自家の周圍三百ヤードの範圍を注意する時は、遂に此小動物を全く驅除し盡すことを得べし。蚊の蛹虫は亦能く寒さにも堪ふることを得、通常冬季間は、沼地の草木に附着し、たとへ其水の凍氷することあるも決して死せず、春季の至るを待ちて更に成虫に變ずる也、成熟したる蚊は、主に石橋の下、家の床下又は穴倉等、比較的温暖なる所を撰びて冬籠りす、固より其の隣近地には水を得るの便を欠くべからず、飲水なくては彼等は一日も生存する能はず、故に若し空氣乾燥して全く水分を得る能はざる時は幼虫や蛹はいふまでもなく、其の成虫と雖も、多くは死を免れず、只其の雌のみ、彼等の强き嘴吻によりて深く樹皮を穿ち、其液汁を吸收して以て僅かに危ふき生命を維持することあり、若し又旱魃打ち續きて空氣更に乾燥し、近傍の濕地悉く乾涸するが如きことあらば此等の雌は朽木の洞、又は比較的濕氣の多き場所を撰びて久しく其中に蟄居し、再び降雨の至るまでは出て來ることなし、云々。

(二) 動物の化粧

吾人は得て、清潔なる動物と、汚穢なるものとの間に區別を置く、されど其は只人間の標準に依て定むるものゝみ、多くの動物は皆多少、其身體に注意するものにして、たとへ人の目には汚はしく見ゆるものあるも、凡て皆、天性相應に其身の清潔を保たんとするものなり。エム、アンリ、クーパン氏は、近刊の「ナッール」紙上に此事を論じて曰く。

蠅が窓の硝子板にて其身を拭ひ、猫が舌を以て其毛を昝め、或は其前足にて顏を洗ひ、雀が嘴にて其羽毛を整へ、象が雨中、其身を雨晒しにして塵埃を流し、猿が我身又は子猿の蚤を捕ふる等の事實は皆、人の平素目擊する所なり、之に依て察するも、其身を清潔にせんとする習慣は、各動物の通有性にして、皆其天性に出づるものなることを知るべし。然るに或種の動物に至りては、少しも其身の塵埃を掃はんと

することなく、全く此性質を欠如せるが如き觀ありと雖も、之等の例外は皆或る他の目的の存するに基づくものなることは又吾人の容易に認め得べき所なり。

レピュヂュース(ダニの一種)の幼虫が、單に其の敵を免がるゝのみならず、又其の自己の常食とする昆虫に悟られずして近づき得んが爲め、常に其身を塵埃を以て被ふに力むる如きは吾人の既に知る所なり、又蛙魚(フロッグフィシュ)(華臍魚(アンコウ)の類)は他の魚類に見られずして海底を自由に游泳し得んがため、常に泥土、海草を以て其身を包み、又犀牛橐駝の如き反芻動物や厚皮動物は、好んで塵埃の上に轉がり、或は土塊を身に纏ふものなり、之れ實に彼等にとりては、蝨、蚤、虱等の寄生虫を防禦するの唯一法なりとす、鳥類は槪ね其羽毛を塵埃にて被ふことを好み、或種の哺乳動物も又之をなす、而して此處に注意すべきことは、之等の動物は凡て水に合ふことを厭へる種類のものに限ることあり、即ち彼等は土砂を以てコスメチック用を辨ぜしむるなり、彼の家鷄が塵多き地に穴を穿ちて之に身を埋め、趾爪や嘴もて砂烟を立たしむるは屢々人の見る所なりとす、之に依て吾人は、是等の動物の塵埃に於けるは、其水に於けると等しく、共に身躰の健康上、同一の効果を致すものなることを推論するを得べし云々。



(軍隊主義の國家)

國家と軍備の不釣合を示せるものなり

而して、氏は更に動物が之等の行爲をなすの動機に就て論じて曰く、

(一) 皮膚の痒きを搔くにあり、例へば驢馬、駱駝等が地上に轉がる時の如し、

(二) 汗又は脂肪の如き、過分の分泌物を其の毛皮の表面より除去するにあり、而して此行爲たる齧齒類の如く、好んで砂浴をなすものに於ては、特に要用なるをなりとす、牛類は又一種特別の方法に依て此の作用をなすもの也、即ち夏季に於て、暑氣烈しき時は、屢々其角を振うて枯草や、藁屑等を空中に投げ、或は前足にて地を打ち、其土塊など背又は躰の後部に蹴上ぐることなり、而して時としては、其の爲めに砂烟濛々と立ち上りて、其身躰を傍より見すかすこと能はざるに至ることすら

ありといふ、

（三）皮膚の寄生虫を驅除せんとするにあり、これ最も有用なる動機なりとす、數多の寄生虫に困められ、普通の手段にては容易に之を除去する能はざる時は、彼等は大木に其身を擦りつけ、或は地上に其身を轉じて、無理無躰に其の寄生虫を擦り落すことあり、彼の象が、河水又は湖中に於て水を浴したる後、其鼻をもて大なる土塊を捲き上げ、之れを全身に擦り付くるも全く同一理由に出づるものなり、云々。

（二）鯨の潛水力

古來、鯨經者の博物學者のいひ觸らしたる所によれば、鯨の潛水力は、全く人類の豫想する能はざる所にして、少なくとも一千ヤード以上の深さに達するものなりと、然るに近日、白耳義の動物學者なる、ドクター、ラコビツツアは幾多の實驗と考察とによりて、從來の傳說の根本的誤謬に陷れることを發見し、其が結論として、鯨類の潛水力は其最も強きものと雖も、僅かに百ヤードに過ぎず、其の弱きものに至りては猶其の半ばにも及ぶ能はざることを主張せり、左に抄譯する所は、氏が嘗て白耳義にて印刷したる長文の一節にして、近刊の「ナレッヂ」紙上に轉載されたるものなり。

凡て鯨類が時々、水中に潛入することあるは、皆其の食物を得んが爲めなり、然るに今若し多くの鯨が從來の說の如く、一千ヤードも深く水底に潛み得るものとなすときは、彼等は蓋し何の必用あつて、好事にも斯く恐ろしき暗黑の場所に身を致すことを敢てするか、彼等は、何人も既に認知せるが如く、通例、日光の及び得る水域内に棲息せる魚類幷に烏賊を常食とす、未だ幾千尺の水底に蟠居せる介虫其他の小動物を食ふことを聞かず、加之、一千ヤードの深所に於ては、鯨は到底、自から發光作用を有せざる魚類や烏賊を發見する能はざるべし。されば とて又彼等が態々、海底に潛んで自から發見せる所の魚類や烏賊――烏賊類に斯るものあるや否やは未だ明らかならざれども――を求め食はんが爲、斯る暗黑の深所に下り行くならんといふが如きは、吾人の更に信ずる能はざる所なり、疑は猶之に止まらず、通常人類は大氣の壓力を三倍せる強壓に會ふときは之に堪ふる能はずして遂に死に至るものなり。而して吾人は鯨類が更に此の三倍の壓力（――大氣壓力の九倍――九十ヤードの深さに於て起るべき水の壓力）――に堪へ得ることを信ずるとするも、猶更に此の十倍の壓力（――大氣壓力の九十倍――千ヤードの深に於て起るべき水壓）――に抵抗し得ることは到底信ずる能はざる所、況や通常の壓力に於ては、只僅かに水より重き鯨類が、如何に其の筋力が強しとはいへ、千ヤードの深さまで其躰を沈め得んことは學理上、全く不可能の事に屬するなり云々、

ラコビツツア氏は更に其記事を進めて、鯨類は決して睡眠することなしと主張し、其一例を擧げて曰く。

大洋を航海する時に當りて、鯨の群が數日間、其船躰に從ひ來ることの屢々あるは、既に世人の知れる所ならん、今若し鯨類にして睡眠をなすものならんには、彼等は到底善く此の事をなす能はざるべし云々。

▲印度に於ける基督敎

英國の版圖に入りてより各敎會の年々費やせる傳道費は非常なるものなり。然れども印度人を改宗せしめたるは僅かに總人口の一分、則ち三百萬人に過ぎず。



不景氣雜

斯波貞吉

下

●不景氣挽回策　其所で不景氣を挽回するは、先づ移民を大に奬勵しなければならぬこと勿論である、しかし移住を勸むるには多くの困難がある、第一に住慣れれた故郷を去ることは誰も好まぬ、日本の樣な美はしい土地は何處にも多くない、よし少し位不自由なる事情があるにしても、內地に居る方が安心で善いと云ふものが多くて、餘程の窮況に陷つたものでなくては、行く決心を起さぬ、しかし此所が大に考ふべき點であらうと想ふ、從來の例に依りて見ると、早く移住の決心を起して先導者となつたものは、常に多くの利を占めて幸福の生涯を送つて居る、吾邦でも早く北海道へ移住したもの、早く臺灣へ移住したものは皆幸福な人となつて居る、又米國などでも金持は多く古い移住者である、即ち決し難い場合に、決心を起すことの早ければ早い丈、多くの利が得られると想ふ、皆出掛けるやうになつてから、後れ走せに出掛けるのは已に遲しである、又移住する程の決心があらば內地に居ても何か出來るとか、內地に居ても困るやうな人が移住したとて何になるものかといふ人がある、之は世界の事情に通ぜぬ人のいふことで大なる間違ひである、如何程愚な人でも、人口の稀少なる所、天產物の豐饒なる所に於ては、勞せずして多くの利が得られる、又一度鄕國を踏出したならば、どんな人でも非常なる奮發心を起すものである、且又周圍の境遇が異なつて居る爲めに、熱心に利殖の事に總ての思想を傾注することが出來る、要するに自から進んで移住することを考へぬものは、己れの幸福を求めぬ人である。

近來は移民會社が方々に出來て、移民も追々に增加する傾向を以て居る、しかし年に二十万や三十万の移民

が出來るやうになつたとしても、まだ〳〵不景氣を挽回するに至るまい、としたならば移民の獎勵以外に、何かの策を講じなければならぬ、余輩は不景氣の原因として生活の程度の進んだことを述べたが、此程度を引下げることは殆んど爲し難いことである、之は何處の國に於ても見ることで、其國が非常に衰微することでもなくば下つた例がない、果してさうであるとするならば、他に何等かの策はあるまいか、兎に角人が多くて金が足らないのであるから、外國より金を吸收するよりも外に策はない、併し其金がどうして吸收せらるゝか、產業を起すのは無論善い策であるが、實際を言ふたならば、日本の產業は最早進む丈進んだのである、米國や濠洲の如く、無限の天產物を有する國とは違つて、此上產業が大なる發達を爲す望みはないのである、林業の如き、漁業の如き　隨分發達すべき見込のものもないではない、又如何なる產業でも、發達を獎勵しなければならないことは無論であるが、謂はゞ吾邦の國富は殆んど開發し盡されたので、今後著しく發達することの出來ぬのは明かである、產業が駄目だとしたならば最早他に策はあるまいか、曾て或る人は日本を瑞西の如く漫遊地として、外人の消費する金を以て富を增す方法を案じたことがある、之は實に善い策である、若し吾邦人が如何にして漫遊客を引着け、如何にして彼等に充分の滿足を與ふるかを知つたならば、彼等は每年吾邦に於て莫大なる金額を消費することは明瞭である、米國人が每年歐洲漫遊の爲に、費す金額は幾億弗を以て數へらるゝとのことである、現に今日に於ても吾邦に來遊する外人は、每年數百万圓を消費する、故に更に多くの外人を誘引したならば、其幾十倍の金額を消費せしむることは容易である、旅館の改良交通機關の變更等、些細なる資本と注意を要するのみで、充分に効果を奏することゝ想ふ、余輩は今日まで何故に一般人士が此事に大なる注意を拂はなかつたかを疑ふのである、其所で此事は頗る良策であるとしても、之が唯一の策であるとしては、尚滿足することが出來ぬ、他に良策がないかといふに隨分に在ると想ふ、即ち總ての商人が日本を市場とせずして世界を市場とする考を起したならば、輸出も增加する、多くの利益も得らるゝのである、總て今日の商人に欠くところのものは、外國の事情に暗きことである、若し彼等が今少しく外國の事情に通じ、世界の大勢を多少にても會得したならば、決して今日の不景氣を來たさなかつた

てあらうと想ふ、外國の商人が巨利を占めつゝあるのは、種々の原因に依ることであらうが、其重なる原因は、世界の事情に通じて居るからである、内地人間に於て兄弟墻に鬩ぐ如き爭ひを爲さず、外人を顧客とする事に注意したならば、必ずしも外國に行かずとも、今日の狀態を回復することが出來る、今の世界は一隅の出來事が直ちに他の一隅に影響するのである、自身は全く知らぬ間に、何時か影響を受けて居るのである故に移住を好まぬ人は、少なくとも世界の事情に通ずることを以て、不景氣を挽回する一策であると想ふ、單に内地間の事に如何程注目しても、此不景氣は決して挽回せられぬのである、即ち有らゆる商人に海外の事情を知らしむることを以て、不景氣挽回の最良一策であると想ふ、又發明（發明に就きては他日別に論ずる積りである」を奬勵するとか、外國に於ては大に需要ある物品で、吾邦に於ては價なき無用の物と認められて居る物が澤山にある、此等を研究するとかして、若し熱心に不景氣の挽回策を講じたならば、容易に回復が出來るのである、要するに内地のみのことを見て不景氣は致方のないことゝして嘆息のみして居る間は到底不景氣は回復せられず、益其度を高めて終には眞に致方のない窮况に陥ることは疑を容れない、世界の大勢は此の如くならしむるものである。

米國殖民だより

北米加洲にて　田　夫

殖民成功の曙光か

若し「一致と獨立」とが、果して民力膨脹の要素たりせば、此頃フレスノ及びフロリン等に組成せられたる勞働組合の如きは、恐らくは我殖民成功の曙光とも見る可きものに候。

由來猜疑の念深くして、一致の氣象に乏しく、稍もすれば相互の競爭となり、排擠となり、はては事業の蹉跌にのみ終らんとする樣、さながら蝸牛角上の爭ひにも似たる　移民の狀態なりしを今や其の面目を一新して、兎も角も一團結の許に、一致の方針に出でんとするは、縱しや其の組織上に於て、未だ俄かに琴を鼓して調を和する能はざるものあるも、其の前途に於て、幾分成功の旦路を開始し得たるは、蓋し疑ひなき事實に候。

勞働者間風紀の改善。背徳なるボッスの陶汰。
勞働契約上の便宜。農産物販路の擴張。

これ其事業家と勞働者との依つて受くる、差當りたる利益の一半にして、漸次その實を擧ぐるに於ては、

白人間に於ける同胞の品位を高め得ること、

白人との競爭に對しこれが恰當の手段を取り得ること、

將來我移住者は懸念なく其の業に勤め得ること、

等の結果を得、斯くてこゝに來住者を迎ふる益々繁く、永住の計をなす亦愈々多きを加ふるに及んでは、乃ち北米大平洋岸に於て、新日本設立の壯擧を見る可き秋に候、今や微かに成功の曙光は放たれたり、望むらくは獨立の氣象に富み、一致の精神を涵養せる、同胞の努力と熱誠とによりて、其の進路を全からしめ度候。

遊牧的移民たる勿れ

「轉石苔つかず」との語、たまたま以て我移民の現狀を戒む可く候。成功を望むの急なるだけに、其の當初の希望も亦從つて小に、最早三年五年を經て、一千弗二千弗の貯蓄にても成し得たらんには、希望は既に此に滿たされて、歸心矢の如く、戀鄕の情さながら堪へ難きに似たるもの、是れ實に今日に至る、我移民一般の思想に候らはずや。敢へて家庭をつくるの希望もなく敢へて新故鄕を起すの氣力もなく、漸く其の業に精しからんとするの時は、身は即ち鄕に入りて逸居するの時に候、これ北米大平洋岸約五万の日本移民、之れを獨逸人伊太利人乃至支那人の事業に比するに未だ何等成功の記す可きものなき大源因たることは毎々申上げし通りに候。

單に貯蓄の要のみを知りて、起業の利、永住の計を辨へざるの移民は、例へば路頭の岩窟を穿ちて、而かも湧出し來たる玉泉の淸きを掬はざるにも比す可きか、是れ豈水を求むるものゝ本意に候らはんや。彼の移民間最も無教育として蔑視せらるゝ、アルメニヤ人に就て見るも、遠く故國の苛税より免れ來りて、僅かに方丈のテント内に起臥しつゝも、幾多辛酸の後には、遂には十エーカー乃至二十エーカーの土地を求めて、此所に居住の基礎を固め、次第に事業の擴張に勵み居り候、如此にして、一は他を呼び、他は更らに他を呼び、今やフレスノ葡萄栽培の如きは、何時しか其勢力の大半を占むるに至れる如き、或はまた否らざるにもせよ、歐洲より移住し來たる多くの勞働者が、兎も角も先づ

農園の主人として起たん事に努め、よしや多少成功の後ち、本國に向ふの止むなきに會するも、必らずや侚ほ後繼者を遺して去り、時折り渡來して其の收獲を樂しむの美風を見て、如何許り我移民の無分別なるかを嘆せざるを得ず候。

假りに一例をフレスノ葡萄の耕作にとらんか、凡そ一千弗の資金だにあらば、優に二十エーカーの土地を所有して、漸次農園擴張の根底をつくり得可く候。即ち其の內譯は

一、四百弗　　地代內入金（中等地六十五弗の見積りとす）（但し地代は三分ノ一を內入れとするの習慣なり）
一、二百弗　　馬二頭代及び其の食料
一、百弗　　葡萄苗木代
一、八十弗　　苗木植付け賃金
一、百弗　　農具代

是れ初年度に於ける經費の概算に候得共、次年度に於ては、自己の勞働賃金を以て漸く其費用を支へ得ば、最早翌々年度に於ては、葡萄も多少の實を結び得て、其の收獲のみを以ても、或は支出の大概を充たし得可く、また其の葡萄園を抵當として、銀行よりの融通を受け、以て地代の全部を拂込むの順序に候。旣に此の時に際せば、さきに六十五弗とせし地代も、今は百五十弗乃至二百弗の價格を有するに至るは、近頃普通の相場に候。葡萄園の收獲は嘗て概述せし如くなるも、以て如何ばかり利得の多きかを預知し得らる可く候。こは唯だ一例に過ぎずと雖も、若し天涯の異郷乃ち故郷との念を以て、起業に着手せば、大平洋岸到る所、皆な大同小異にして、其の目的を達し得らる可く候。要するに其の成功の根據とする所は、資本と云はんよりも、教育と云はんよりも、寧ろ永住の念夫れのみに候。轉石苔つかず、遊牧的移民は竟に殖民成功の所以にあらず。苟も國力發展の必要を悟り、國家の前途を思はん程の士は、須らく永遠の大計を慮り、奮つて此所に幾多新日本村の設立に努めざるを得ず候。斯くて早晩北米大平洋岸の地を相して、行宮を營み、皇上の幸を待つ、亦これ吾人國民の一大快事に候らはずや。

北米の米產地

二万六千二百九十方哩の大州テキサスの地、氣候溫和に、地味豐沃に、水利亦自在にして、最も米作に適しやがては東洋米の勁敵として、世界市場に打ち出てんとするを聞くに於ては、由來米產國たる日本國民の、

此に顧慮するある、元より當然の道理に候。されば此頃テキサス州の呼び打漸く高きにつれ、信ず可き筋の調査に依りて、同州米作の概况を述べ、聊か我が資本家及び勞働者の贅考に供し度候。

（一）、土地の購入れ

當州に於ては、既に會社組織を以て、米田及び耕作株を買入れ、五萬乃至五十萬エーカーを所有するものあるも、尙ほ耕作者の多數は、自力に於て、五十エーカー、百エーカーを所有するものに候。而かも人烟未だ稀疎、大に經驗ある「米の人種」を歡迎せんとする由に候、今假りに此に移住して、「五十エーカー」の土地を求め、米作に從事するものとして、之れに要する資金は約そ左の割合に候。

一、七百弗　地代（地代千五百弗と見做し初年半額を拂ひ込むものとす）
一、七百弗　用水、井戸堀り、及びエンヂン代
一、四百弗　馬四頭代
一、百五十弗　農具代
一、貳百五十弗　厩及び家屋建築費用（但し最も粗雜なる小屋樣のもの）
一、貳百弗　馬糧
計二千四百弗

（二）、小作

一、四百弗　馬四頭代
一、百五十弗　農具代
一、貳百弗　馬糧
一、貳百五十弗　厩及び家屋
一、六百弗　用水、井戸堀、エンヂン代（但し用水は地主との契約上多少の減額あり）
計千六百弗

（三）、勞働

白人勞働者にては瑞典那威人最も多く、黑人、メキシコ人亦頗る多きを以て、單に勞働のみに從事するものとせば、割合に高給を得難きも、人烟尙ほ未だ稀疎なるが上に、ナープ博士の歸國報導以來は、大に日本人の來住を懇望しつゝあれば、赤手空拳、進んで此の地に入り、年々の經驗と貯蓄とによりて、漸次成功の途に上るも、必ずしも難事業にあらざるかと存じ候。

日給　一弗乃至一弗十五仙、
年給　二百弗乃至二百五十弗（但し專ら試作者として雇はるゝもの）

槪して斯かる始末に候得者、同地に於ける事業は、勞力の問題よりも、先づ資金に就いて慮る可きものにして、單に身躰のみを資本とせる從來の我移民よりも、此に其の起業根底を固め、數多勞働者の指導者たる可

き資本家、寧ろ或る意味に於ける冒險的事業家を要し候。

尤も一エーカーの收獲、大抵十嚢乃至十五嚢（百六十二斤入のもの）を得可く、（中等米平時凡そ三弗五十仙）、外に藁及び籾の賣上代三百弗を得ば、一年の收穫を以て、土地買入れの半額を償却し得る筈に候。尚ほ家族用の野菜及び菓物を得、米作後半年間は更らに他の耕作にも從事し得るを以て、此等雜種の收益、亦一エーカー平均十五弗、若しくは二十弗にも達する由に候得者、縱ひ小作に從事するにもせよ、頗る利益の著しきもの有之可く候。

されば事情の如何なるものあるにもせよ、我資本家及び勞働者が、確乎たる思想の許に、此の地に來住し、漸を逐ふて事業の擴張を計らんには、恐らくは功を一簣に缺ぐの患も無かる可く、終には此所に第二の瑞穗國を起す、必らずしも遠きを期せざる可く候。以上。

芙蓉湖に游ぶ

堀内新泉

明治三十六年八月十五日、我れ北越の旅を終りて歸京の途次、信越線の田口驛に汽車を下りて、日暮芙蓉湖畔に至る。湖は信州上水内郡野尻村にあり。故にまたの名は野尻湖とも云ふ。野尻は舊北越街道の一驛にて、高田に九里、長野に六里の位置にあり。往昔は榮えし土地なりと云へど、近年信越線の開けし爲に、今は旅客の跡絶えて僅に驛の面影を見る目寂しく止めたり。信越線の田口驛より舊街道を上り行くこと僅に里餘、折から夏蕎麥の收穫に忙しき村幾ツか後にして、「みづうみの波ふく風を送りきて跡見の坂は涼しかりけり」と近藤芳樹が振返りし跡見坂の上に至れば、一面藍爲す水眼前に見れて、近くその西岸に荒寥たる山間の一驛見えたり。水は即ち芙蓉湖にて、驛は野尻村なり。

驛を横切り湖畔に立ちて眺むるに、湖は周圍三里十七丁ありと云へど、その形略卍を成して、諸所岬に遮られたれば、全面の影一眸の内に收むべからず。而も却てこれが爲にその風景は一際佳なるもの丶如し。見渡せば溶々と淸き眞淸水靑く淀みて、水絶えず底より湧き、深さは三百尋の上に出で、冬は凍りて人馬の往來自由なりと云ふ。周圍には草又は樅の若木の生ひ立てる美しき小山蜿蜒として水を繞り、青葉倒に影

を浸して、老杉森々と神寂びたる琵琶の浮島は、表に赤き華表を見せつゝ、辨財天の宮を載せて、湖の東北に涼しく浮び、その後より南に向つて龍宮淵に數丁長く突出でたる樅ヶ岬は、東の方に松ヶ岬、さては二王岩など云ふ勝區を此方の眼界より遮り隠し、水を隔てゝ南よりこれを迎ふる琵琶ヶ岬に隣りて並ぶ土ヶ岬、西は大岬、今我が立てる谷ヶ岬など位置よく水に突出でし體は、名工ありて故さらに圖を作したる風情あり。更に湖を越えて東を望めば、斑尾山近く聳えて、杣が炭焼く烟の末の風に靡くも望む可く、南は遥に上州境の山脈波の如く走りて、湖は海面を抜ぐこと二千餘尺の上にあり。西北の方は如何にと湖に背きて踵を回せば、信越の名山、妙高、黒姫、飯綱の三山、相並びて近く眼前に直立し、頂今は雲晴れていづれも山容美しく、蒼然たる暮色の中に紺碧の光流れて笑めるが如し、湖畔新築の二層樓あり。風景館と云ふ。これに投じて、一浴し、湖に面したる樓上の我が部屋に歸り來りて、椽先に備へし椅子に腰打下し、見渡す湖上は暮色流れて、天は生憎曇りたり。月見んと頼みし望みも今は絶えぬ。心無の雲よと怨じて内に入る。婢は程無く夕餉の膳を運び來たれり。茶碗片手に出しながらも我が目は常に湖上に在りき。婢は朝暾の如き盆を出しつゝ「昨夜は誠に良いお月夜でございましたが」と云ふ。その言葉未だ終らざるに向の龍宮淵の上あたり波靜なる水面に忽ち物あり、極めて弱き光を放ちて、その體宛がも卵の黄味など落しゝ如し。彼はと見る間に怪しき光は、婢が持てる盆程の大さに開らきしが、夕の天は黯淡と猶濕雲に閉されたり。我が夕餉を物する間、光は波上に漂ひき。婢は膳を引かむとして、不圖湖上を打見しが、早くもそれと眼を止めて「ア、好い鹽梅です、今にお月さまが」と云ふ。さては月の前觸なるかと、喜び立つて又椽先に出づると倶に、怪しき光は忽ち廣がり、波上金蛇激灔としてその疾きこと電の如く、此方に向ひて走せ來と見れば、彼方は恰も樅ヶ岬の上あたりに雲を破つて橙色の月美しくかゝりたり。少時見惚れて此方の岸に目を引けば、一組の客を乘せたる舟一ッ、この夕月に棹して、今や汀を離れたり。客は何れも齡若き男女にて、皆涼しげに罵り騒ぎ、四本柱に雪のやうなる金巾張りて屋根と爲したる納涼舟は、左右二列に花の如く提燈點して、やがて聞ゆる櫓の音涼しく、湖心を望みて進み行くは、彼處に至りて湖の波吹く夜風に納涼まむとするなるべし。

我れは椽先の椅子に憑りて、次第に岸より遠ざかる舟の行方を見送る中、北の方より同じ出立の舟又一ッ、汀に近く漕來れば、これを遅しと待てる體にて、また一組の客ありて來る。見れば酒、鳴物など携へて、櫓聲緩くこれも亦岸を離れて湖心に向ふ。

我も大いに心動きて舟を命ず。準備成る。即ち乘りて、先づ琵琶の浮島に向ふ。辨天の祠に詣でむ爲なり。この水路約二丁、舟子の語るを聞けば、往時はこの間に一條の長橋架れりきと云ふ。舟はやがて島に着き、船首音あり、ざはりと青蘆の洲に入る。舟を下りて膝あたりまで水に入りたる壯き舟子は、舟に點し、紅き提燈一ッ外して片手に持ちつゝ、幅廣き背を出し、「旦那入らッしやい」天晴筋骨逞き男は、小さき我れを猿の如く負ひて、青蘆を排し大股に進むこと約十歩にして、頭上に赤き鳥居の下なる青苔ふはりと蹠を爲す石階の上に下し、提燈先に振照らして道案内す。凹凸烈しき石疊を奥深く辿り往けば、冷氣隱々として身を浸し、頭上老杉森々と枝差交して、晝尚昏かる可き所なり。蛙飛び、虫鳴き、露ちる道を少時進みて辨天の祠に賽す。祠は天平二年の草創にして、後行基菩薩、當國の戸隱山に參籠の節、この島に來りて、今の靈像を刻せしと云ふ。神木なりと云ふ老杉あり。その周圍一丈八尺ありと云ふ。舟に歸り、東南の方縱ケ岬に沿ふて、その裏手なる二王岩の方へと向ふ。肱を枕に身を横へて、心靜に仰ぐ天には清光溶々として一輪の山月かゝり、輕風水の如く流れ來つて身を浸し、湖は一面の金波を碎きて舟を行れば、涼しくも波は來つてピタピタと舟底を舐む。而して我れより先に舟出せし二隻の屋根舟は、その間凡そ一丁ばかりも隔てゝ倶に湖心に泊し、今や酒宴酣なる體なり。また西に方つて湖上遙に望む風景館の部屋毎に點々たる燈火は、夜目には一入遠くして、纔に螢の草葉に燃えたる程に見ゆ。舟子は櫓の音緩く舟を行りつゝ、「旦那、この邊が先刻お尋ねの龍宮淵です」と云ふ。さては今宵彼の風景館の樓上より月の始めて水に落つるを見しはこの邊なる可しと、身を起して舷に頰杖し、猶舟子の語るを聞けば、湖中最も深きはこの邊にて、確かに五百尋の上に出で、また昔永祿年間に、上杉謙信の臣宇佐美定行が長尾政影をこの湖に誘ひて、例の銅の舟を覆し、倶に溺死せし所も亦この邊なりと云ふ。

舟子はこれを始めとして、この湖に關する種々の怪談を語り、果は水清くして和かきこと、この湖に

棲むは鯉、鮒、鼈、鰕、鯰の類にして、鯉の味他に勝れて美なること、鼈はこの湖の主なれば、誓つて人の捕らぬこと、その見事なる鯉も五月を過ぎては上らぬこと、また首夏の候には、湖水の周圍に藤の花咲き、躑躅焰の如く燃えて、紅または紫の影美しく水に映り、汀は菖蒲花咲きて、夜は螢の眺め好きこと、秋は四林の紅葉見事に照りて、その影紅く湖面の水を浸すことより夜は明月に櫓を執りて、舟を行りつゝ月見る風情のこれ亦譬へん物無きこと、冬は冬至の頃より松の緑も白妙の雪に隱るゝ寒中にかけて、人馬の往來自由なる湖面の氷を踏んで鴨狩する面白きことなど語りつゞけて、今や縱ヶ岬を東に向つて廻らむとする時なりき。我れ首を回らして、今來し方を振返れば、遙に望む琵琶島の老杉欝たる森の中より此方に向つて漠々と漏れ來る物あり。その色白く風に追はるゝ煙に似たり。彼はと云ふ間に縱ヶ岬の彼方は早やくも見る間に隱れぬ。「やあ、霧が遣つて來たな」舟子は直ちに湖心に向つて舳先を轉じ、岸を望んで逃ぐるが如く漕ぎ始めぬ。湖心に泊せし二隻の遊船も岸を望みて舟脚早きを見る。湖上霧に襲はるれば、まゝ歸途を失ひて、屢々危きとありと云ふ。左聞きては流石に我れも快からず。敵寄せたりと聞く心地して、顧る縱ヶ岬の半は既に渦卷く霧に包まれたり。怖れを抱きて逃げながら西の方風景館の後に聳ゆる黑姬山を打仰げば、一方は頂より又一方は麓の方より、一ツは上り一ツは下る霧は忽ちその半腹に相合して、見る間に山の姿は消えぬ。此方は如何にと振返れば、霧は既に沸くが如く湖面を沒して、我等の後に迫りたり。ソレと云ふ間に舟を越えて、行方を暗く遮りしが、幸に事無くして岸に着き、再び風景館の樓上より望む湖面は霧漠々と立亘りて、油斷大敵人の世も亦斯の如しと敎ふるに似たり。

夜中夢破れぬ。時刻は殆んど二時に近し。湖上深夜の景は如何ならむ。霧は晴れしか、未だしや。起き出でゝ雨戸一枚靜に開くれば、阿母の慈悲より和らかなる月光流れて内に入る。戸を兩手にして仰ぐ大空はハラ〳〵と、今にも何か靑き物の降り來むばかりに澄み渡りて、月天心に氷輪の如くかゝりたり。霧何時しか晴れ渡りて、風全く死せし深夜の湖上は、三十路女の額を襲ふ皺程の波も無く、一面紺碧爲す水淀みて、凝然と動かぬ彼方此方に四圍の山々倒に影を浸して、その靜なること沈むが如く、得も云ひ知らぬ一種の凄

味は我れを擒へて、思はず慄然と寒からしめぬ。此處に詩ありと椅子に憑り、また水心を見渡せば、黯淡として湖上に滿てる凄味は再び我れを擒へて、自然と心を正さしむ。斯くて在ること久しうして、靜なる夜も今は次第に明方に近附きぬれば、いづれよりか一陣の曉風來り、淀める水を一掃すれば、湖は眠より醒めしが如く、輕波再び生々と起りて四邊の岸を打つ。折好く夢破れしを喜びて、我れは再び枕に著きぬ。明くれば十六日の朝夙く起きて、先づ樓上より湖の朝景色見渡せば、これより左の方に見ゆべき琵琶の浮島を始めとして、湖の半面は未だ朝霧に蔽はれたり。汀に下りて裾をからげ跣足に成りて、浮橋の上に立ち、手水使へばピタ〳〵と輕波來りて足を舐む。涼しさ謂はむばかり無し。こゝに我が日課の一ツなる冷水浴を了り、庭下駄穿きて陸に上れば、霧は何時しか薄らぎて、琵琶島の森も見え、縦ケ岬も亦少しづゝその頭を露はし始めぬ。程無く朝日は閃々と湖上の波を燒き始め、美しき朝暾は今や燦然霧を破つて、斑尾山の肩を僅に此方に越えたり。飽かず湖上を眺めつゝ、汀に沿ふて歩を移せば、空氣誠に清良にして、波吹く風はハタ〳〵と我が浴衣の袖に鳴り、何處とも無く老鶯の綿蠻たる聲を聞く。この地に於いては時鳥も鶯も四月頃より秋の彼岸にわたりて絶えず鳴くと云ふ。我れこの湖水の風景に心切りに戀々として猶一日止まれば、晝間は殊に風多くして波高く、氣候は日盛も猶六十七八度の間に在りて、湖畔常に清涼の氣充滿ちたり。我れはこの日も貪り納涼みて、日暮約三十丁の秋草多き野路を踏んで柏原驛に出て、程無く長野に著きて一泊し、翌十七日の午後三時再び都門に歸り來れば、烈日の炎威猶赫として凌ぎ難く、昨日の湖畔の涼しさを、うたてや今は夢にして、また紅塵萬丈の中に己れを見出しぬ。

女の馬鹿さ加減

鐵道往生と土左衛門との順序

青柳有美

男子の女を我が宿の花となさんとあせるは、たゞ我が情を充たさんが爲なり。是れのみ、他なし。されど、女子の男を我が手のうちに丸るめんと念ずるは、しかく簡單にして無邪氣なるものにて候はじ。これによりて食を得んとするなり、これによりて衣を得んとする

なり、これによりて生命の危害を逃れんとするなり。情は一時性のものなり。時に焔々として天をこがさんとすることあれども、又忽ちにして滅す。食を得んとし衣を得んとし生命の危害を免がれんとするは、永久性のものなり。人一日も衣食なかるべからず、人片時も生命なかるべからず。

男子既に女を虜にして之を手中のものとなせば。茲に我が情は遂げられたるなり。既に我が情足らば、我れ何の用か其女に向てこれあらんや。是に於てか、某の女の爲めに狂ひ死せんとせる如きものも、若し一たび其女の歡心を得て遂にこれを宿の妻と迎へ容るゝまでに至れば、忽然として醒めたるもの丶如く、全く昔への狂熱を忘れ、今は妻たる古き戀人の爲に、温き壹瞥をだに惜み冷然として顧みざるを常とすされどこの所因を以て男子を責めんとするは、これ愚の極なり。人情の奥秘を解せざるものなり、知らずや、此くの如きは却て是れ男子の尊きところ又潔きところなるを。

女子を觀よ。女子は貪欲の結塊なり。利己、私慾、勝手。下司根性――總て之等の又の名、實にこれを女子といふ。されば、食らふて益々飽かんとし、飽ひて愈々食はんとし、自ら足るを知らざる是れ女子なり。沙翁、オセロのうちに男子を嘲りて『食慾の盛んなるや休むことなくして肉を取れども、一たび充つればその既に食へるものをだに吐き出さんとする胃嚢の如し』と云へり、然れども、休むことなくして食を取り、しかも遂に飽くを知らざる胃嚢も、又大に奇とすべきものならずや。これを稱して、濃情にして貞操あるものといふべくんば、女子の誇るところの貞操とは、實に是れ下司根性を指せるなり。豈に噴飯せざるを得んや。故に言はんとす、貞操を重しとせざる男子は、實に清淨なるものなり、廉潔なるものなりと。又言はんとす、男子の尊きところ難有きところは、實に其貞操を重んぜざるところにありと。

女子は此く『貞操』の美はしき衣を纒ふて之を包み。聰明なる世間を瞞着せざるべからざるまでに、しかく貪欲の心烈しきものなり。是に於てか、我が想ふ男を手のうちに捕へて、我が情念を滿たしめたるのみにては、自ら安ずる能はざるなり、更に衣食を貢つがしめざるべからず、生命の危害を防がしめざるべからず。勢ひ洒然たる能はざるなり。是れ、女子が人妻となりて情熱愈々細やかに、愛情益々切なる如きもののある所因なり。これを譬ふるに、或る女の或る男を夫とせる

は、恰も慾深の一人者が宰相の位に上れるにも比すべく、偏にその椅子にかぢり附きて離れざらんとし、所謂伴食大臣の可笑味を演ずるに似たり、ひたすら、食に伴はんことをこれ祈るなり、こゝに至れば、女子の濃情とは伴食大臣の濃情をいふなり、女子の貞操とは伴食大臣の貞操をいふなり。あゝ、天下の女子を擧げて、世の伴食宰相と罵らるゝものを辯護せしむる、亦大佳ならずや。あゝ、女子の切念するところは、掌中の玉を逸せざらんことなり、これを現ナマにせんことなり。そのこれを賞し樂まんとする如きは抑々末のみ。乞ふ暫く女子の德を嘲笑ずるを止めしめよ。女子をして天使の如く清きものたるを許し、其しきりに簪しほこるところの『貞操』をして、天使の德の如く罪なきものなりとせよ。されど、憐むべきは女子なり。

悲哉、女子の漸く熱せんとする時は、是れ男子の漸く醒めんとせる時なり、冷かならんとする時なり。男子は飽き女子は飽かんとす。飽かんとするものには與えざるべからず、飽けるものは、逍遙遊せざるべからず。逍遙遊せんとするものと、飽かんとするものと茲に一樹の蔭に宿らんとす、あゝ夫れ難哉、女子の婚して後其夫を信ずること薄からんとするは、かくして共に其向ふところを異にすればなり。

女子は恐なるものなり。甚しく恐なるものなり。是に於てか、その婚姻の式を擧げて兩々双栖の實をなさざりし前に當りて、鹿の溪川の水を喘ぎもとむる如く、狂熱執摯切りに其跡を追ふて止まざりし男の、今や漸く其最愛の女を親しく迎へ容るゝに及び却て其狂熱を冷やかにし淡然として洒々たるものあるに至れるを觀、愕然として驚き、その人情の本然自然に出でゝ男子の性情が、淡泊淸廉純潔なるの致すところなるに思ひ至る能はず、切りに苦慮し切りに邪推し、これを以て、其男子が我れに倦み我れに棄てんとするに至れるに非るやを疑ふを常とす、しかも此る懷疑の念たるや、我れの將に熱せんとする時に當りて、其男のわれと共に熱し我れと共に笛吹き躍ることをなさず、却て冷然たるものあらんとするが故に、殊に甚しとす。これ、西せんとするものと東せんとするものとの衝突なり。既に一たび我が情の充たさるとあらば、焉ぞ更に執着の要あらんや。これを爲すは、更に利せんとするものゝみ。男子は求むるところ無きが故に執着せず、女子は求むるところあるが故に執着す。されば、女子

が男子の心變りせるに驚くとは、これ恐るゝなり、衣食を失はんことを怖るゝなり。危害の生命に加はらんことを怖るゝなり。

既に、男の身に昔日の情熱無きを憂ひ、其淡泊なるに驚き騷ぐは、是れ疑へるなり。而して懷疑は嫉妬の母なり。かく男の身に昔日の情熱なきを憂ひ、其心情の激變甚しくして我が望める如く我れを念々切思するものに非ざるを知るに至れば、玆に勃然として不平の念起らざるを得じ。また之と共に、其心情激變の源因即ちその何故にしかく俄に冷然たるものあるに至りしやを研究揣摩せんとするの念あるに至ると、まことに理の當然なり、この時に當りて、女子の劣等なる智力と野卑なる感情とは、正當なる揣摩臆測を爲すこと能はずして、疑心徒に暗鬼を生じ、この男子の心機一轉を目して、他の新らたなる女に對する執心の熱中にありとし、或は我れに飽き我れを棄てんとしつゝあるに非るやを疑ふに至る。是れ、不平の一轉して嫉妬となれるなり。而して、嫉妬は又再轉して憤激と成る。殊にヤソの女學校より出てたる女學士先生だちの如きは、在學中難有き人權論を注入せられあるを以て、此くの如くしかく男子の冷然たるを見ては、憤然として不平の聲を鳴らし、男子の不人情にして女子を蔑視する甚しきを慨く。又その容姿の十人並以下にある醜婦は、更に夫に對する猜疑心を逞ふすること夥しく、かく夫の冷然たるは全く我が器量の醜きを厭ひてなるべきを假想し、その近かく我れを棄てんとしつゝあるべきを想ひ、嫉妬の焔は身をコガスまで炎々たるに及ぶ。是に於てか、夫の一言一行は悉く不平不滿の種を作すに至るなり。女子の愚や痴や遂に及ぶべからず。

それ、人苦められて、しかも不平不滿の氣あれば、必ず反抗す、殊に日新文明の智識と、人權論と、男子に又貞節なかるべからざる論とにて練り上げ鍛へあげられたる女學士の令夫人と成り上がられたるものに於てをや。されば其夫に對する不平と不滿と嫉妬とは、玆に又變じて脅喝となる。即ち種々の方策をめぐらして夫をオドカシ、或は離婚せんとする意ある如く見せかけなどし。夫をして我れに一心を擧げて熱中し、我れを措いて他を顧ること無からしめんとす。

世の女房どもの所謂スネあばれるといふは、是れ實に夫を脅喝する奧の手なり。世間の意氣地なき男子、かく女房にスネらるゝこと甚しければ、遂に甲を脱して降を其軍門に乞はざるべからざるに至る。蓋し、女房

スネて宵の七時より曉の六時に至れば、亭主爲に生命を縮むること實に三年ならざるべからざればなり。かくスネあばるゝことも、又醜婦とヤソの女學校を出でたるワカラズ屋とに於て殊に甚しとす。

かくの如くにして、スネることは如何に力ある武器なりとはいへ、女の淺薄愚鈍なる腦髓より生み出したる脅喝方策の到底夫を動かして其心を轉じ我れに熱中せしむるに足る能はざるものあるを知るや、茲に百法盡きて又更に手段を一變し、たゞヒタ泣きに泣き切りにへタバリつき縋りつき、男子愛憐の情に訴へて其心を動かさんとするを謀る。されど、かゝる生々しき手段も又寸効なく男子をして我れを顧らしむるを得る能はざるを覺るに及べば、『失望』は其女を襲ふなり。即ち落膽し遂に絶望し、自ら其身の力弱きにアイソづかしゝて、我れと我が身を咀ひ、又之れと共に我が夫と總ての男性とを咀ひ、一つには自暴自棄の爲め、一つには男へのミセツケの爲め、茲に土左衛門となり或は鐵道往生を遂ぐるに至る。これ是れを稱して女の馬鹿さ加減と云ふ。穴賢。

▲中學罵倒論本號休載　次號より續出

西藏觀察談　三

河口慧海

文明の利器を輸入する心無し

扨てかく云つたからとて文明の空氣が這入らぬかと云へばマッチでも這入ッた丈は幾分か文明の空氣が這入りましたのであります、蓄音器もネパールの王から献上した、法王が不思議がッて是は魔術だ、惡魔の術だ、惡魔の術をば此中に刻み込むやうになッて居るのだと云ふてイロ〳〵の大評判で、西洋人は奇態なことをやる、惡魔の術を箱の中に入れるとそこから話を仕出す奇態なものだと云ふとを言ッて居る、總躰西藏人は物を研究する心が薄い樣でどういふ譯でこうなるかと云ふことは尋ね樣とはしませぬ。

カルカッタに行て何か觀る、觀るばかりではない鐵道にも乘ッたりして往きますが、何も理屈は分りませぬ鐵道はどうして早く走るか分りませぬ、カルカッタに行くと電氣燈が光り輝いて居るが唯吃驚するばかりで譯が分らぬ、歐米人は魔術をやッて夜街の中を赫かして居る、あれは魔術であると言ッて驚いて居る、さう云

ふことを研究して見やうと云ふ考が起らない、西藏人がカルカッタに往ッても西藏に必要なものだけ買ッて歸る、どう云ふ物を買へば西藏に利益があると云ふことなどは考へないで西藏に必要のものばかり見て買ッて歸る、カルカッタに往ッて動物園も植物園も見ますけれども何故に動物園や植物園があるか、どう云ふ利益を人民が受けるかと云ふことを考へない、文明的の利益を見ても何も考へない、所謂井戸の中の蛙て外に出て大海を見やうとしても井戸の中ばかり見て居りますから大海も井戸のやうなものであると思ふと同じて、西藏人はカルカッタに往ッて見た所が、唯カルカッタの街を見て歸るだけであります、中々文明の利益を輸入すると云ふことは六ヶ敷い、此節這入ッて居るのは、ナイフとかマッチとか石鹼とか云ふやうなものが多く這入ッて居るだけてある、それて藥のやうなものが印度から這入ることがありましても、それは草根木皮で此頃の文明的の藥は一ッも這入らぬ、支那人の藥とか印度人の藥とか、獸類の膽てあるとか云ふやうなものを多く持ッて來る。

西藏の流通の貨幣

それから西藏で使ふ所の流通貨は何んであるかと云へば唯一種でございます、唯一種それは何んであるかと云へば二十四錢の金貨一枚で其上には五十錢の銀貨も一圓の銀貨も金貨もない、紙幣もない其下に小さな銀貨も何もない、銅貨もない、それで錢の單位はどれだけかと云へば日本の四錢が一ッの單位、四錢が六ッ集ッて一タンガーをなして居ります、四錢のことをどう言ふて居るかと云へばカガンと云ッて居ります、カと云ふのは始りでガンと云ふのは滿ちたと云ふのであります、最初の四錢はカガンで、カガンが二ッ集りますればカルマと言ひます、是は二ッと云ふやうな意味になッて居ります、それからチエケー、是は半分と云ふ意味てございます、即ち十二錢であります、それから十六錢はショガンと云ふので朶をショと言ひます、四隅がありますから四隅が滿ちたと云ふてショガンと云ひます、それからブチエと云ふのはカが切れたと云ふので――一タンガーからカが切れたと云ふので二十錢になッて居ります、それから二十四錢は一タンガーでカガンが六ッ集りますれば一タンガーになッて居ります、そんなことで買物が出來るかと云へば先づ一タンガーでの買物をするにはどうするかと云へば、錢を半

分に切ッたものと三分の二、三分の一に切ッたものとございます。

諸方で能く通用してあるのは半分と三分の二のものであります、さうすると十六錢のものと十二錢のものとてございます、それで一タンガーでカガンの物を買ふにはどうするかと云へばショガンのものを持ッて往く、十六錢のものを持ッて往て半分の物を貰ふと四錢の買物が出來る譯になります、八錢の買物に一タンガーを持ッて往くとショガンを貰ひます、さうすると八錢の買物が出來ます、さう云ふ風にして買物をしますが特に依ると大變面倒なことがある、向ふで半分のものがないときにカガンの買物をしやうとすると三分の二の十六錢を向ふから取つて二十錢を渡すとか或は二十八錢を渡して二十四錢を取ると云ふやうなことがある、大變面倒なことがある、さうしなければカガンの勘定が出來ないことがある、大抵西藏に往けば一タンガー以下のもので買ふことが出來ないやうになつて居ります、さう云ふまあことで買物をやるのです。

西藏の物價

物價がどうかと云へば高い方でございます、麥一斗の價が拉薩府で五タンガーでございます、二十四錢を五ツですから一圓二十錢であります、それで先づ西藏の斗と云ふのは八升位しかない、それは何ぜさうであるかと云へば一斗の桝でも的になりませぬ、桝にはいろ／＼あッて政府でも桝は三十位拵へて居ります、地方から納めに來たのでも恩澤を施さなければならぬのには七升桝で取ります、窘めて取らなければならぬ所には一斗五斗位の桝で取ります、桝は何番と云ふて西藏の政府に往くと掛ッて居ります、其小さな桝に較べると大きな桝は二倍以上も這入りますさうでございますから民間でも桝が不完全で民間で買ッても八升位しか呉れませぬ、さう云ふ風な具合で八升の麥が一圓貳拾錢位でございますからそれに比較して物品が高い、茶碗と云ふやうなものになりますれば、支那茶碗の凸凹した茶飲茶碗が二タンガーと半分でございますから四十八錢に十二錢ですから六拾錢になります、それ位の先づ高い者でございます、大方あんなのは上海あたりで買へば三錢か四錢位であるだらうと思ひますがそれは六十錢で拉薩府で買れて居ります。それは高くなるのは當り前で遠方の遙か困難な道路を經てさうして漸やく拉薩府に着いて居るのでございますから、

それに稅關にて澤山の稅金も拂ッて居ります、運送賃も餘計掛ッて居ります、商買人の入費も見なければなりませぬからさう云ふ風な高いものになッて居ります。

商賣のことはこれ位にして置きまして是から社會狀態の中夫婦の關係に就て述べます。

▲煙草と國民

歐洲にては平均人口一人に就き一年三封度半の消費高となる、而して最も多く用ゆるは和蘭人なり、則ち

和蘭人	七封度	墺地利匈牙利人	三、八
丁抹人	三、七	瑞西人	三、三
白耳義人	三、二	獨逸人	三
那威人	二、三	佛蘭西人	二、一
西班牙人	一、七	英國人	一、四
伊太利人	一、三	露國人	一、二

にして露國人最も尠し、米國人は和蘭陀の次にして四封度半の割合となる。

思潮

行政整理より先づ官吏の精神を改造せよ

「太陽」　文部大臣　久保田讓氏

私が今更の如く感ぜらるゝのは、官省の繁文縟禮である、例へば一寸役人に會ひに行つても、長い間待たされたり、僅かな用事でも色々な手數を要する事など、成程是ては事務が簡捷に行はれないのも無理はないと思はれる、今日の役人は、職務を執る時間よりも、煙草を喫んだり、雜談したりする時間の方が多いといつても宜い位で、一人て出來る仕事を三人も四人も掛つて居る、先づ之れから改めて行かなければならぬ、ツーすれば今日の官吏の三分の一で充分行ける、伊藤侯は官吏を悉く高等官にして、跡は雇員にするといふ意見を持せらるさうだが、夫れも尤な說てあつて、第一總てを官吏とするが爲めに、恩給もやらなければならぬ又此恩給金の高が非常なものである、此等の制度を根本から改めて行

けば、文部省を廢止しなくとも、鐵道事業を中止しなくとも、餘裕は綽々として出るのである。然るに今度の行政整理は、ソーいふ根本的整理を猛斷するといふ決心ではなくして、只千五六百萬圓の歳入缺陷の塡補の爲めにホンの一時凌ぎにやらうといふのであつて、誠に賴母しくない行政整理である、要するに是れは妥協の餘響であつて、困まつたものである、君マア踊りに鎌倉の停車場附近に在る電線を見て行き給へ、アレ見ても今日の官吏に精神の無い事が分る、付て議會で或議員から、電話や電信線が無駄に幾本も立てられてあるといふ事を質問し居たが、私はまさかソンな事はあるまいと思つて居たら、實際を見ると成程無駄な事をして居る、鎌倉に來て初めて氣が付いたが、アノ停車場に行つて見ると、僅か二線か三線の電柱が、別々に三四本も建つて居る、一は電信、一は電話、一は警察の電話、電信といふやうに、何もソンなに別々に建てゝ置く必要はないぢやないか、之れが東京でゞもあつて電話線ばかりでゝ、三四十線もあるといふなら格別、何れも二線か三線で事足る處でゝ何も別々に建てる必要は少しも認められない、皆な一處にすれば一本で足りるから經費もかゝらない、先づ此一事を見ても官吏に腹がないのが分つて居る、無駄な事ばかりして居る、隨つて經費も餘計かゝらうぢやないか、夫ればかりか、鎌倉の樣な處に、特に電話を設けなくとも、東京では二三年も前に申込んで置いても、未だに架設が出來なくて、商賣人が非常に不便を感じて居る場合であるから、コンな地方は跡廻しにしても、先づ東京の樣な緊要の場所から完成して行つて、ソレから他に及ぼすが至當ではないか、此等の事を見ても、緩急を辨じない點が知れる、之れではいくら金をかけても成績が擧る筈はない、行政整理は、先づ官吏の精神から改めて行く方法を執らなければ、到底滿足の結果を得らるゝものではない。

英人と朝鮮人

「義塾學報」　慶應義塾長　鎌田榮吉氏

或時朝鮮で私が朝鮮人に向て和漢洋何れの國が一番エライかと問ふて見るに、彼等の答に西洋人は上人、日本人は中人、支那人は下人と書いたから、貴樣朝鮮人はどうだと云ふと朝鮮人は下々人であると斯う云ふ、實に驚入つた話で自國民を稱して下下人とは驚入つた、斯の如く自尊の念がなかつたならば到底國の獨立は保たれない、況んや其國の進步開明なぞは思もよらむ事であると思つた、自尊心の消滅すると共に其國は亡びたと見て宜しいのです。

然るに其後間もなく、私は西洋に往つた、すると全く反對である殊に英國人の自尊心が强い、日淸戰爭後の事とて支那日本の比較論は何處にても出るに付け此方も日本の長所美點を誇ると彼等は之に同情を表して其辭には必ず貴國は淸國に比すると餘程英國流である、即ちユー、アール、モーア、ライキ イングリッシュと云ふ、何でも自國を貴いものとして之を標準にする、即ち此精神が充滿して居ればこそ彼等は天下に優を占めて居るのである、英國と朝鮮と兩國民の品位の相違の源因は此一點にあると申すべしだ、支那人の如きは自尊心なくして只自負心の盛なるものである、此自負心が凝結すると頑迷不靈に陷るのである、何となれば自負心なるものは何ても敢ても無差別に只自國のものだから良いと云ふのて其間に判斷力が這入らない、自尊の方は全く其反對て自己の品位を大切にして事物の長短優劣を比較するの力を含有して居る此識別なく無暗に自分を善く思ふものは自負の弊に陷りて非常の害を釀す者である、無分別なる國粹保存論の如き其一例である、此論者は頑迷者流の代表にあ

らざれば、何か爲めにする所ありて只自國の事物を自尊して其間毫も分朋を交へず外國の者は一切輕蔑し、外國の學問、外國の風俗を悉く排斥しやうと云ふのであるから、頗る國運進歩の爲めに有害である、要する所國の自尊即ち合理的ナショナル、プライドを以て明確の判斷を失はぬ以上は此世界共通の方針で今後の日本を進めて往かればならぬと思ふ、今後廿世紀の日本人民たるものは熱心なる愛國者であると同時に世界に於ける文明的眞民であると云ふ兩樣の思想を兼備せればなるまいと私は信ずる。

愛蘭土人と日本人

「東洋哲學」　哲學館主　井上圓了氏

英國は世界の最大國民であると云ふが、其本國の英國は英國全體を指すのではなくて、其一小部英蘭人、特に其北部に在るものを指すのである。此の點大に注意を願ひたいと思ふ。先づ假りに日本全體と英國全體とを比ぶれば日本の方が云ふまでもなくやゝ大きいのである。況して英國の一小部英蘭に比して幾倍の國である事は明かである。して見ると我が日本人も亦よく世界の最大國民となり得ぬ道理はないと私は考へる、能はざるにあらず爲さざるなりとは此の邊の消息を漏らしたものではあるまい乎。

扨て彼の愛蘭人の氣風に付てゝ少し申したい。前に愛人と英人とは全くその氣風を異にして居ると云つたが、實に其の通りで、愛人には先づ英人の如き堅忍不撓の氣力がない。要するに惰弱不規律である。そして貧民の多き事が其の結果如何と云ふに固より他の原因もあるにもせよ。先づ以て目に付くのである。私は此の堅忍不屈の氣象を欠くと云ひ、殊に規律を守らざる風のあると云ふ所から悲哉我が邦人に思ひ及ぶを禁じ得ぬ。どう見ても日本人は英人よりも愛人に似て居る樣である。然るに今も申した樣に私は愛蘭の村落貧民の狀況を見ては多々益々我が日本の將來を思ひ浮べて慄然として嗟歎すべきものあるを覺へたのである。

生涯の頂上は四十才

「警世」　主筆　松村介石氏

四十を不惑とは、善く云ふた、王陽明も八九才にして聖人を志し、十七八才にして修養の生涯に入りながら、猶に四十才迄は醉夢の中に在つたと云ふた、如何にも人間は四十になつて、始めて前後左右と、緩急本末が知れる樣になると思はれる。前號にある王龍谿の說にも『悟に三種あり、一を解悟と云ふ、之れは言より得るもの、未だ己れのものとなつて居らん、次ぎを證悟と云ふ、之れは靜時に得るもの、澄みはすれども未だ泥滓が其底に沈て居る。三を徹悟と云ふ、之れは練磨より得たるもの、而して眞に自得の悟である』と說てある、如何にも其の通りで此練磨なるものは多年に於ける實地の修養より來ればならぬものなるゆえ、人生より云へば、どうしても四十位の年にならればならぬ。

アゝ人生四十、實に男子の盛りである、悲歌慷慨の腕を扼し、『立志出關、死不還』と吟じながら、猛然として若學界に奮鬪する時に當ては天地を呑吐する底の概がある、又た夫れより上りて三十以上に到り、既に奮鬪に成功してそろ〳〵と名聲の世に謡はるゝ樣になつて來ると、所謂る望み海の如してゐるから、悲歌慷慨の無くなると同時に、自尊自重の心大に增し、最早や先輩を先輩と思はず、世の有力者を有力者と思はず、已に其の上にも出たる如き心持になりて、覇氣滿天、議論縱横、悉く他人を罵倒す

る様になつて來る、而して其の勢や當る可からずぢや、然し四十の年になつて來ると、更に又た見識に一段を進め來り、二十前後の青年を見ると、如何に激烈の氣慨を有するも、どうしても小供の樣に思はれ、三十前後の天狗を見ると、如何に意張りて長者を惡罵するあるも、まだ〳〵本當物になつて居らぬから、之を眺めて可笑しくなる、之れを要するに人生四十は實に男子の盛りであるから、三十前後までの人を見ると小供に思はれ、六十前後の人を見ると老朽に思はれ、予れこそ眞に山の絶頂に在る如く思はれる、前よりは若きものが喘ぎ〳〵上り來る、後よりは老たる者が下り行く、而して天空地濶、皆我が眼界に入り、視て見へざるなく、聽て聞へざるなく、擊て響かざるもの無く、動かして動かざるものなく、爲して成らざるもの無き心地がする。

圓き人四角き人

「內外世論」　東京市水道部長　田川大吉郎氏

日本人今日の病は其圭角なきに在り、願はくば更に圭角あらしめん、曰く『さわらぬ神に祟りなし、』一言萬事を了す、何事も角芽立てず、かど立てず、長上先輩の言ひなり次第にして、御無理御尤も、只承順さへすれば、功名の途は、水落ちて渠自然に成る、圓くなれ〳〵〳〵〳〵、ナント坊主の頭の如く圓くなれ是れ立身出世の要諦なりと、先輩は之を以て其後輩に諭し、彼等は之を以て又其後輩に諭し、此くて巧妙の應對、滑脫の辭令、世を擧げて皆圓い人だらけと爲り、少しく氣骨ある者、稍圭角ある者は、鐵の鞋を穿いて搜索するも、殆んどたづね得べからず。有らゆる、政治家、文學家、宗教家、實業家、教育家の稍好き者は、一として獨善の君子にあらざるは莫し衆人を離れ、世間を離れて、獨り心耳を勝妙の境に馳せ、孤居し、分立し、獨專するの人、是れ今日の所謂政治家、宗教家、文學家、教育家の中の稍好き者なり、然り、彼等は圓きを己れに求む、個人としては當に圓かるべし、互に相扶け、相讓り、合して圓を成すの心がけに至つては我は之あらん、只其餘りに圓きを欲するの極、他と協合し得る素質を消損し若くは減殺するの極、譬へば圓き石と圓き石の之を寄せ合はせ、組み上ぐるに適せざるが如く、彼等は合して圓を成すに最も必要なる角質の素質を欠けり、是今日の我社會が杆格して相容れず、孤立し、分離するの君子のみ多く、而して君子多くして益々紛雜を重ぬる所以なり。

嘗てゼラルドフォークの日本を過ぐるの記を讀む（最初は中央公論にて見たり）中に言へることあり曰く日本人は圓き石を繼ぎ合せて石壁を作るに巧みなる人種なり、今も其大都の間に昔ながらの名殘を留むる古城壁や、乃至片田舍の田渠のしきりに至るまで、石壁といふ石壁は總て圓き石を以て作り、其石と石との繋きはセメントすら用ゐられて無しと、流石に西人は物珍らしく之を感じたらん、想ふに是れ日本人の性格を通じて、近世の文明國に絶異なる日本人の特色にあらずや。特色なるものは之を重んじて益々發達せしむべし、然れども圓き石は以て大建築を成すべからず、圓き氣象の人は以て大國家を成すべからず、或は成すべからざるに非ざらんも、今日の時勢に當り、七分三分のかね合にて、單に呼吸とか、氣合とか調子とかのみを圖り、圓り圓き石のみにて大建築を作らんとするは、極めて恐險にあらずや、時代の傾向と列强の進運を謀らざる者にあらずや。

其氣象を四角にせよ、角度ある者とせよ、責任の念始めて生じ、他との交渉始めて端然として法度あり、キチーンと定まり、ヒツタリ折れ合ふて、一代の事燦然面目を改め、西歐文明の利器、遺憾なく十分に利用さ

るべし、而して之を結ぶにセメントを以てせよセメントとは何ぞや、人生關係に於てのセメントは即ち愛なり。

勞働自給學校の必要

「新小説」 主筆 後藤宙外氏

若し公平に云はんか教育の尤も必要なるは富者の側にあらずして、寧ろ貧き者の上にあらん、富裕の家に生れたる子弟は縱令無智無能なりと雖も、獨立自給の道備り、生活の上に何等の障碍を受くることなし、然るに尤も獨立自活の道と品性陶冶の機會とに縁遠き貧者の子弟は、日に愈々教育に近寄り難き時勢となりゆくにあらずや、蓋し教育の價の漸々不廉に赴くの事實に徴して、貧者當來の運命を豫知する必ずしも識者を俟たざるべし。貧者も猶志だにあらば、高等教育を受け得るの道を開くは、人道の上より云ふも、人物經濟の上より云ふも、將又社會政策の上より見るも目下焦眉の急務なるを信ず。今日の如く貧書生が就學の方法として選むところの食客、學僕、玄關番、新聞及び牛乳配達、その他、車夫、點燈夫等の自給法決して悪きにあらずと雖も、此の種の方法は學生の爲には不規律なるあり、不健康なるあり、屈辱的なるあり、不適當なるあり、決して好方便とは云ひ難し。凡此等の中には活路の比較的狹隘の範圍に屬するものもあれば、需要の途の忽ち塞がるもあり。縱令然らざるも。就學と多く相容れざる困難の伴ふを免がれず。故に吾人は最も好都合なる方法に依りて、無資産者の子弟に高等教育を受けしむるの道を他に求むるの必要なるを感ぜずんばあらず、他に良策あるか知られど、今吾人の考へ得る限りに於ては、勞働自給學校を設立して就學と勞働即ち學資自給の財源とを結合せしむるに優るものなきを信ず。例へば東北叉は北海道邊の或未墾の沃野を選みて學校を建築し、その近傍に附屬の土地を買ひ、是れに馬耕機械を用ひ、學生をして一日に數時間勞働せしむるの組織と爲し、傍ら適當なる手藝及び簡易なる工業館、技藝館、養蠶館の如きものを設け、適宜の選擇に任せて就業せしむる也。要は物價の最も低廉にして風土氣候の健康に佳なる地を選み、學生の研學と體力とに障碍を來たさゞる種類の職務を與へ、規律正しく自ら勞働して、自ら一定の學資をつくるに便ならしむるにあり。

▲新聞記者を毒するもの

毒に中てられたる一人（投）

●●雨敬、雨宮敬二郎氏是れ近き過去三ヶ月に於て、都下の新聞記者を腐敗せしめたる毒虫也。多く語るを要せず、我輩は唯此一行を貴紙上に掲げらるゝを得ば足る。



健全なる文教の政

（久保田新文相に望む）

米峰

鉈を振り廻はすとか、鉞を打ち下すとか、様々噂せられた桂内閣の行政整理の條項中、比較的重要なりしだけ、それだけ賛否の聲の高かりし文部省廢止事件は八分八厘位までは、廢止せらるべきものと覺悟し、廢止賛成論者は、まづこれならばと一安心、從つて廢止反對論者は、血眼になッて騷ぎ廻はり、大隈伯をまで引き出して、神田の青年會館て、公開演說をやッて居るちようどその最中、諸新聞は號外を發して、久保田讓といふ人が、文部大臣に親任せられたることを傳へたり。あまりのだしぬけに、贊成論者は、河童に尻を拔かれたやうに、アッと言ッたぎり眼をキョロつかせ、反對論者は、折角汲み揚げた釣瓶の繩が、中途で切れた時のやうに、ヘタ／＼とばかり尻餠をつきぬ。ア、桂内閣も、なか／＼味をやり居るかな。但しこれが外交問題か何かであつて、露國の外交家を、アッと言はせたとでも言ふことなら、少しは妙ならずともせざれども、高がうち／＼の小股取り、ほんのフ、、を價するに過ぎざるのみ。我等も廢省贊成者のはしくれとして、前號の本誌上、少しは御託を並べた關係もあること故、今こゝに桂内閣が、自已の無主義無方針の定見を暴露し、新大臣を定めて、廢省の議を揉み潰し、言はゞ我等の顏に泥を塗りたるに對し、豈一言の辨なくして已むべけむや。とは言ふもの、我等とて、根本的に文部省を絕滅しやうといふのではなく、内務の一局としても、今の文部省位の仕事は出來る、伴食の大臣無能の高等官など、寧ろ無い方が經濟だと言ふに外ならざるが故に。其實敏腕の大臣來り、情弊を刷新して一省存置を價する程の功績を示さば、敢て猥りに廢省を語るを爲さざるなり。今となつては、最早餘計なこ

詞藻

西遊雜詩（三）

菅桐南

明大祖廟

魏然雄闕接蒼雯。山雨壑風五百春。我來駐馬空階下。平蕪莽々日欲曛。憶昔中原殺氣横慘澹。魚龍吹浪江淮瀆。天生異材危艱下。起自眇々一旅軍。掃盪群孽無遺算。廓清乾坤興斯文。跡似漢高仁過之。上下千歳獨見君。北邊近聞漲妖氛。惡浪蹋天雪花紛。想君曠世之偉畧。區々文禮何足云。

先自所見着筆、次叙明祖偉略、一轉入時事、咨嗟咏歎以爲結、鋪叙得法、

金陵鐘山太平興國寺（寶誌禪師葬地）

兒泣鶯巢事已奇。道成遂作帝王師。渡江欲問誌公迹。正是鱠殘登市時。

餘味津々、自言外領略、

西湖雜咏

潦霖湖上霽。積翠接風煙。山護偏安地。波涵半壁天。岳祠斜日升。禹穴落霞邊。杜宇啼深樹。遠人在畫船。

兩聯勁健遒緊可誦、

溺宋衰殘了。是非何足云。江山依舊麗。洲草得風芬。石勢高臨水。塔稍半入雲。乾隆行在處。緬邈想功勳。

後聯能寫形勝、

鳳山懷古

我行偶至鳳山陲。輦路無人草色悲。天地長留南渡恨。君臣空牛北征期。千年宮趾餘蕭寺。一徑榛蕪沒斷碑。儔禽飛下還飛上。老樹離披風雨枝。

懷古本色、嚴海珊後勁、

所見

西凹處士

西飛東散向家山。絃誦無聲晝白閑。二十年前吾亦爾。
葛衣麥帽省親還。

歸省途中

微涼吹上月初絃。遠樹蒼茫抹暮煙。漠々秧田青一面。
白頭人立里門前。

情景兼到

山中避暑

暫抱奇書逃碧山。人間冷熱與心閑。黃昏散步出門去。
滿壑松風帶月還。吟肩兀爾聳於山。送盡歸雲意自閑。
万岳千峯斜照外。夕嵐如水灑人顏。

一讀涼味溢齒牙、

女阪

凝山壑舟

羊腸峻阪老杉橫。攀到絕巔双脚輕。天半霧收開活畫。
精進湖上岳蓮淸。

富岳

意氣豪哉萬丈巔。屑雲脚下白綿々。芒鞋踏破鴻荒雪。
立杖高歌劍嶽前。

豪語驚人

茶の花

繞石選

茶の花や墓場つゞきの畑道　魯佛
茶の花や裏門あけぬ此日頃　柳家
茶の花に冬暖き雨が降る　兩溪
茶の花に來馴し寺の小鳩哉　鳳梧桐
茶の花に日和續や鳥の聲　同
茶の花や蘂をきせたる柚子蜜柑　同
茶の花に二日窶るゝ日なりけり　虛牛
飼鳩も放つ茶の花日和かな　同
茶の花や北戸閉して庵の樣　同
茶の花の疎々として畑の畝境　同

三座を置かず

選者吟

茶の花や綱の切れたるはねつるべ

茶の花や畑の中の新貸家

茶の花や山科街道人見ゆる

茶の花や抜道すれば寺の門

茶の花や京は北野の薄月夜

茶の花に藁屋根古き隣りかな

十一月分課題　小春（十月十八日限）

十二月分課題　足袋（十一月十八日限）

悼歌

悼堀越秀大人歌　久良岐入道

天照らす、日の大御神、岩屋戸に、籠らす時に、天が下、常夜となりて、五月蠅なす、萬の妖の、朝汐の、い湧ける儘に、八百よろづ、千万神の、神集ひ、詮術知らに、泣き憂ひ、悲しぶ中に、宮の女の、宇受賣の神は、手弱女の、女にしあれども、射向へる神に、面勝ち、利心の、雄々しくませば、神懸り、懸る樣して、笹葉もち、繦うちかけ、桶伏せて、踏とゞろこし、一二の、御歌うたひて、をかしくも、踊り狂へば、諸神も、笑ひ崩れて、天の原、ゆするヰに、聲擧げて、樂しむことを、日の神の、怪しとおもほし、岩屋戸を、細目にあけて、見そなはす、時うかがひて、手力の、神の命の、手力に、引き出でまつり、國内また、明るくなりて、常久に、榮ある國と、面白く、樂ぬしき國と、春べは、花咲をゝり、秋べは、紅葉染なす、日の本の、大和の國を、いやましに、樂しくあらなと、宮の女の、神の雅びの、幸ひを、乞ひのみまつり、俳優の雅びの藝の、いさ榮え、世に弘まりて、市川の、氏と名に負ふ、其末の、廣ろりいまして、成田屋の、御田の實れる、秋の穂の、秀の大人は、吾國の、雅の御神、俳優の、道の聖と、茜刺す、日の入る國に、其御名の、とゞろかさせば、畏こきや、吾大君の、大前に、仕へまつりて、其技の、道の譽れを、末長く、世にも留めて。此國の、藝術の光、吾大人を、置きてはあらじ、吾大人の、生けらん限り、國民の、面おこすと、大船の、思ひ頼みて、御空ゆく、月の如くも、仰ぎ見し、大人の命の、いかなれか、雲に乗らして、神あがり、あがりましぬと、聞くからに、吉野の櫻、皆がらに、枯れ果てし如、我も人も、惜め嘆けど、詮すべもなし

反歌

二荒山神の廟と二並び國の花ともたゝへられしを
日の本のみやびの藝の天才、君、國を見棄てゝ何所ゆくらむ

敗荷集

光風選

○　鹽田香園

夢かあらずうつゝかあらず世やつらき
　戀よ悶よ人やかなしき

○　溝口一

世の海に舟出せし子のかなしくも
　櫂や折られしまたかへりくる

○　正富汪洋

待ちわびて心悶ゆる木下かげ
　憎くや蜥蜴の足近う寄る

○　比武盧紫紅

そゝり立つ古城の濠の水青み
　朝風香る紅蓮白蓮

わが笛のさけよとばかり吹きし宵
　菩薩夢みて戀の賦なりぬ

○　磯野魯佛

白鳩の和羽に戀の歌かきて
　君が園生に放ちやらばや

翅もたる稚兒のさゝやく夢さめて
　怪し我胸物狂はしき

波に書きし題目今に光りあり
　あゝ日蓮は魔の子意氣の子

試みに中の御門の朝臣訪ひて
　苦しき戀を占はせ見き

○　渡邊光風

カーチギー、モルガンの富説くか世は
　我れに歌あり人を醒ますの

むらさきの星夕露にさゝやきて
　葡萄の秋は淋しくもあらず

もろ／＼の響をひめし此胸よ
　打たば天地ふるひやすらん

天そゝる雪しろたへの不二あけて
　尊と日の本日いづる國や

とをくづく言ふべきにあらず、たゞ久保田新文相の働き振りを眺めて、萬事はそれから後の事にせむのみ。久保田氏といへば、學制研究會の頭領、貴族院一方の旗頭、教育の事については、多少話せる人物なるが如し。我等は今、氏が非國定教科書論者なることを追究して、已に着手したる國定教科出を、如何に始末せむとするかを問はざるべし。又氏は果してその持論の如く、學制を改革し得るや否やを語らざるべし。たゞ我等は、非大學派を以て自ら任し、常に大學派に對して敵意を挾みつゝありし久保田氏が、如何なる態度を以て、大學派に對せむとするかを見むと欲するあり。凡そ各省中、文部省ほど、大學派の跋扈跳梁せるところはなかるべく、文部省ほど、大學派の行き渡れるところはなかるべし大臣を出すこと三回、次官、局長、屬官、雇に至るまで、實に至れり盡せり。由來大學出身者の迂愚無能なることは、我等の辨を要せざるところ、これ此の迂愚無能者流、入つて上下の椅子を占領す、文部省の失態の多かりしも、文部省の杓子定木を振廻はせるも、文部省の内閣に於て無勢力なるも、その他今日世人をして、廢省とまで極論せしむるに至りしも、洵に當にそのところなりとす。纒綿斷つこと難き文部の情弊といふもの、論じ來れば、たゞこれ省内に於ける大學派の跋扈に外ならざるなり。縱令非常竦腕の人物來りて、大臣の椅子に倚らむも、この大學派と戰つて、これを塵にするにあらざるよりは、健全なる文教の政を布くことを得むや。故に若し、文部省内大學出身者の隻影を止めず、代るに清新快活なる新人物を以てせむか、こゝに於て始めて文部は獨立の一省として、各省と比肩するを得るに至らむ。即ち久保田氏は、その素志たる非大學的精神に鞭ちて、省内の大學派を壓倒せむか、是れ文部積弊の根本的大掃除にして、伴食無能といふ遺傳病の根治する時なり。久保田氏、能く爲し得るや否や。

人は言ふ、久保田氏の骨、近來頗る軟くなれりと。或は言ふ、久保田氏は、菊地前文相のために懷柔せられたりと。我等窃に恐る、異日再び筆を驅つて、文部省廢止を論せざるべからざるに至らむことを。

官立學校

またしても大學攻撃かと、一概にケナシ去ることとなかれ、中學を卒業してからこの方、五七年の間、貴い時間と高い金とを引ッ使つて、……中には親爺の脛も嚙

り盡して、親類縁者の御厄介になッたり、六尺ゆたかな男一貫が、ドーレどなた樣でと名刺の運搬に從事したり、新聞を賣ッたり、牛乳を配ッたり、意氣地のある事、意氣地の無いこと、いろ〳〵樣々の苦楚辛酸、嘗め了り忍び盡して、やッと買ひ得た文學士法學士、それ程狹くもない社會に、これしきの看板さへ掲けきらず、それ程重くもないこの肩書、これすら少しも振り廻はし得ず、たゞ髯は徒に延びて、下女の煎餠を價ふれども、袴は頻りにビリついて、屑屋も二の足を踏みさうな躰たらく、無心の狀は發するに所なく、高利の金は借るに勇なく、下宿屋樓上、依然として吳下の舊阿蒙、お役所もいつぱい、會社もいつぱい、工場もいつぱい、學校もいつぱい、どこもかしこも皆いつぱいで、爪のたつ隙もないその中に、たゞお腹と財布はペッそりへこンで、見るかげだにも御座らぬとは、是れ豈帝國大學卒業者の現狀にあらずや。吾等この不生產的なる、この無能なる一種のでくの坊の濫出を見る毎に、なんだか自分の米櫃の底に、穴をあけられたが如き感なき能はざるなり。而して更に、帝國大學法文科大學(主として)先生達が揃いも揃ッたうッそりものたるに、驚歎せずんばあらざるなり。

帝國大學は、學者を養成するところなりといふが、年々掃き出す學士幾百人、學者といふのはどれどこにお居やるぞ、筆も立たず、口も利けず、偶々小才の利いたヘナチヨコが、糊と剪の敎科書製造、これで學者か、ヘン呆れが返ッてお臍が茶を沸かさんとす。お役人を製造するところなりといふか、長官に阿諛し、下役に威張り、紋切形の俗事に、一定の時間を費すことが、お役人の能事ならば、帝國大學敎育の効果は、實に偉大なりと言はゞ言ふべし。敎員を製造するところなりといふか、師範に在りては、敎授の拙なるが故を以て、高等師範出身の半死人にさへ輕侮せられ、中學に於ては、イヤに學者ぶッて妙に威張りこそすれ、常識は缺けて居る、世故には馴れて居ず、兎角敎職員には馬鹿にされ、生徒には嫌はれ、ストライキ數回の揚句が御榮轉、さても美しお芽出度からずや。或は更に聲を勵まして言はむ、あらず〳〵、帝國大學は、學者も作らず、お役人も作らず、敎員も作らず、たゞ實に人物を養成するところなりと。アハ……、さうかい、人物の養成こりや妙だ、學者としても一人前ならず、役人としても一人前ならず、敎員としても一人前ならず、さりとて自ら帳場に坐し、耳に筆を挾ンで算盤をパチッ

かせる程の技倆もなく、鍬鎌持つて田畠の耕耘に從事する程の腕力もなく、誠に帶にや短く襷にや長くの憾みある人物、それも品が博多かなンぞの上物ならば、又何かの役にたゝぬとも限らねど、フラシ天の古もので、毛のすり切れた奴と來た日になつては、まづ下駄の鼻緒の役にも相立ち申さず。ア、人物々々、善い人物、惡い人物、役に立つ人物、立たぬ人物、くづしの利く人物、利かぬ人物、帝國大學の御養成にかゝる人物とは、抑もどのやうな人物を申すにや。

數十年來、依て以て帝國大學の名を飾り、花の都の一名物とまで稱へ來りし、彼の赤門の近狀を見ずや、屋根み瓦は剝かされて菰を被り、土臺は腐ッて獨り自ら立つこと能はず、數本これを支へて纔に顚倒の厄を免れて居るにあらずや。人若し菰を被りて軒下に立ち、他の助力を得るにあらざれば、その日を送ること能はざる境遇に立至らば如何。こゝに至つて我等は赤門大學の末路を悲しまざる能はざるなり。

私立學校

帝國大學既に此くの如く、高等師範の如き、活きた人間を殺して仕舞ふところまた言ふを惜せず、官立とか公立とか言ふものゝ中で、少しは役に立ちさうなのは高等商業と高等工業とあるのみ。されば私立學校は如何。

私立學校や、その數多し。中學程度のものを引き去つて、さて後に殘つたものを吟味するに、法律を敎へるもの、政治を敎へるもの、經濟を敎へるもの、文學を敎へるもの、敎育を敎へるもの、商業を敎へるもの、數も多く種類も尠からず、さりながら、どれもこれも意氣地なしの寄合で、資格とか五角とか、特典とかお情とか、官の字臭い笠を被りて、生徒を引張らむとするに汲々たり。官尊民卑の弊風が、上下に行き渡つて居る今の日本の社會では、これまた已むを得ざる手段とは言ふものゝ、あンまり沒見識の沙汰ならずや。この資格とか特典とかいふものに目がけて這入ッた程の中なら、どうせ自由とか獨立とかの味を嚙みわける程の力はなく、或は官學出身のでくの坊や半死人に、之をかけむずらむやくざものたらざるなきを保すべからず。此くの如きはこれ、准官立學校、准官立學校出身者と稱すべくして、決して純私立學校純私立學校出身者とは許す能はざるなり。

我等が官學の弊に堪へざるもの、一日の故にあらず。

しかも私學の現狀此くの如きを見ては、開いた口が塞がらないどころの騷ぎにあらざるなり。然るに頃者聞くところによれば、博士井上圓了氏の所管哲學館は、文部官人の不明なりしがため、昨冬理由なくその既得の特權を取消され、世論今尙當局を攻擊して已まざれども、井上氏は却ッてこれを好機として、有らゆる資格特典をつき戾し、專ら學生の實力を養成し、獨立自活の精神を鼓舞し、カントやヘーゲルの向ふも張れる宗教家としても、敎育家としても、又敎員で飯が食べなければ、商も出來る工藝もやるといふ風に、融通無礙、極めてつぶしの利く人物を養成することに方針を改め、この精神を以て、漸次立派な私立大學にする筈なりといふ。流石は學者の事業家を兼ねた井上氏なり滔々たる准官立的私立學校の間に介在し、毅然として純私立學校の模範を示さむとす、壯ならずとせんや。今後の社會は、實力競爭の社會にして肩書尊重の社會にあらず、自由獨立を精神とし主義とせる純私立哲學館の出身者が、如何に純官及び准官學の出身者を斬り捲くるべきかは、蓋し興味ある觀物なるべし。

文藝時觀

手拭配布策

有美

今の世に人氣無くして成功せる文學者たらんとするは實に難し。是に於てか、今の文士多くは其技を磨かんとするに力めずして、却てその交際範圍の一寸にても廣からんことにのみ力め、勢力ある書肆の編輯員或は有力なる雜誌の主筆に懇親を結ばんとするに是れたゞ汲々たるもの丶如し。蓋し、是等の人々に取り入りて其好意に依り、或は我が著書の信用ある書肆の手に出版せられ、或は天下に紹介せられて、盛名を爲すに至らんことを欲するなり。猾と言はざるべけんや。されど、文學者の職たるや、役者藝者などと共に、又「者」仲間に屬するものなるが故に、世間の人氣と愛顧との之に伴ふものなくんば、到底渡世せらるゝものに非ずとせば、此く暗夜に臺所より入りて、勢力ある士人に媚を呈し、其眷顧吹聽を乞はんとするよりも、寧ろ正々堂々白日公然、愛嬌を天下に賣り、世間の注意を喚起して、人氣を吸收するの男らしきに如かじ。役者と藝者とは即ち常に此策を取る。否な近頃に至りては、義太夫長唄常盤津などの師匠は素より、琴の師匠

に至るまで、萬遍なく、又この策を振り廻す也。

我邦古るくより一種の奇習ありて、世に所謂藝人を以て目せられ、愛嬌商賣を以て渡世とするものは、藝名入の手拭を染めぬき置きて、特に其眷顧を乞はんことを欲する筋々の間に之を配り、一には以て些少ながら賄賂のこゝろを盡くし、一には以て廣告の用に供し、人をして絶えず我名を記憶して之に好意を表するを忘れざらしむ。蓋し、愛嬌を賣るに上々妙々の策といふべし。今の文學者たるもの、又よろしく此の賢しき妙策を取るべきなり。

文學者も、又幸にして藝者役者將た常盤津長唄清元などの師匠と同じく、藝名ならぬ雅號を有す。これ實に手拭に染め拔くべく屈強にして又風流なる名なり。之を假令へば、尾崎紅葉の配る手婦喜ならんか、そこ此處に面白く紅葉を散らし、小さき小板形のうちに『十千萬堂』と染め出すなど、頗る妙なるべし。而して、かく染めぬける手婦喜は、之を年頭或は中元、或は新に著述を公にし、或は新らしく雜誌社新聞社などに入れる時、都下の重なる文藝批評家、雜誌新聞との主筆及其文藝欄擔當家、並に文藝諸大家將た富豪などに贈るべきは素よりいふまでも無く、所謂その天下に聞く芳名を慕ひて、折々訪れ來る世の馬鹿者などにも、萬遍なくこの雅號入の手婦喜を名刺代りに呈し、よろしく其愛顧を乞はゞ、世間必ずや謙遜と愛嬌とに感じ、互に顧みて相吹聽し、天下に其名を爲さしむるに至り、時に其手婦喜の文藝大家が庭の手水鉢の傍にかゝり、多くの人々の眼に觸るゝことあるに至らんなり。かの竊に依賴狀を批評家に送り、或は巧に其筋々の人々に取り入りて、妙評を博ふし盛名をなさんことを謀る如きは、策の最も下品なるものなり。豈に手婦喜配布策の上品にして風佳と愛嬌とに富めるに如かんや。

文士の默殺法

近頃『成功』を説くものあり。もし、其名の世間に傳稱せられ人口に噲炙せるを以て、其人が文藝上の成功なりとせば、その成功に欠くべからざる一大要素あり。堪忍、詳しく言へば辛抱は即ち其れなり。乞ふ試に之を説かんか。

曾て以爲らく『今の文士最も默殺法に長す』と。然り而して、その默殺法に長ずるに至る所因は、嫉妬心の激烈なるもの、皆な彼等の胸中にあればなり。嫉妬心の激烈なるものあるが故に、新に頭をもたげて文藝界

に其盛名を稱せらるゝものあるに至れば、恰も己が領地の外敵の侵入によりて狹ばめられたるが如き思ひあり、苦悶堪え難きが如し。是を以て、懊惱を未發に防ぎ、豫めまづ新進者の出づるを妨げんとして、巧に其策を講す。その策は是れ即ちこの默殺法なり。

今玆に新に擧ちて出でたる著者或は作家の著作の、其思想に於て其結構に於て、或は其情感に於て、大に秀て大に賞すべきものありとせよ。文藝批評家或は文藝の大家、一見して自ら又其然るを知るも、嫉妬心強くして、他人の美を希はざるが故に、一言たりとも世間に向ッて其賞すべく取るべきものあるを說かず。蓋しこれによりて其人の名の昻らんことを恐るゝなり。さればとて、又一言の之を非難する聲をも發せず。蓋し非難の聲と雖ども、なほ能く世間の人々をして、其人の名を傳へて其著作に注意し、遂に其盛名を成さしむるに至る恐れあればなり。是を以て、善惡是非共に口をつぐみ、世間をして全く新進者を顧ることなからしめ、この間におて默々のうちに之を葬り殺さんとするものなり。其卑劣眞に憐むべし。

此間の消息に通ずる無き新進者苟(かりそめ)に以爲らく、一文を公にし一著作を刊行せば、忽ちにして盛名を天下に爲すを得んと。豈に計らんや、數度(すたび)數次之を重ぬるも何の反響無く是非の聲杳として全く聞こえず、宛然啞籠に腕押しするが如し。是に於てか、餘りに世間の無頓着なるに落膽して、意氣頓に沮喪し、世間の明(めい)なきを恨んで、自暴自棄するに至る。思はざるの甚しきものなり。この時こそ却てこれ實に大なる堪忍を要し、辛抱を要する時なり。かく。何の反響なく全く是非の聲を聞く能はざる時に當りても、更に刻苦し更に煉磨し更に工夫し、倦むことなく根(こん)を盡くして著作すべし。而(しか)して之を公にすべし。

語に曰く『權兵衞が種蒔けや烏がほじくる三度に一度は追はずはなるまい』と然り、如何に嫉妬心の故に、他の名を世間に談るを欲せざる輩と雖ども、三度ならず四度ならず約二三ヶ年の間も、常に我が心をして感歎賞揚を禁する能はざらしめし著作をのみ眼前に示されつゝあらば、その感歎の情遂に重(かさな)り〳〵て、如何に制せんとするも制する能はず、一度は之を口に發し筆に現はさゞるを忍ぶ能はざるに至るものなり。されば、この時に當りて、其新進者にして一著者の特に平生のものに勝りて人の心を動かすものを出さば、私慾なる批評家と文藝大家との積日積年の感歎心も思はずこれ

に刺戟せられて自ら緘默を破り、遂に其名を讃賞せざるべからざるに至る。かくして、盛名續ひて起り、即ち『成功』の人となるを得るなり。

今の英語教授法

今の英語教授法ほど天下に滑稽なるは無し。之を稱してプラクテイカル、エングリッシユと申すとかや。されど、遂に其プラクテイカルなる所因を知るべからず。即ちこの實用英語と稱するものを學びつゝある書生を觀るに、多くは前置詞或は冠詞の用法を吟味するなどの末に汲々齷齪し、OF と FROM との別を知れども、讀書力に至りては貧しく、譯解の力乏しきこと、誠に驚くに堪えたるものあり。

又中學用教科書の如きは、文部省よりして宗教趣味の事項あるものを一切嚴禁するが故に、中學四年生となり、玆に英語を學ぶこと實に四年なるも、英吉利文に最も普通なる GOD の文字を知らず、之を物語本(ものがたりぼん)などに發見して始めて字書に索むるが如き奇現象なしとせず。

要するに、外國語を學ぶに當り、最も重要なる目的は讀書力を涵養し、これによりて新智識の吸收と外國の偉大なる思想を得んとするにあり。然るを、今の英語教授法の如く、讀書力を蔑視し之が發達に力を注がざるは、國民發達の爲に祝すべきことに非るなり。

▲稿餘錄

●新派合同演劇の九月興行に、其脚本を爲すべき小説數種を撰み、中に就て投票を世間にもとめ、其最高點『濱子』をイタにのぼせたり。而して一たび投票のこと世間に公にせらるゝや、其始め先づ『黑潮』の高點なるを傳へられたり。當時怪んで以爲らく『濱子』は最高點ならざるべからずと。果せる哉、後遂に「濱子」は最高點となれり。これ著者草村北星が『青年界』より選りて『文藝界』の編輯主筆に移れる功德なり。而して、この投票の各一票は、近き將來に於て或は美麗なる册子となり、或は『文藝界』の小説となりて、金港堂より發行せらるべし。

●近頃二人の快男子を得たり。曰く雨宮敬次郎、曰く長谷川泰。

●見渡す限りドレも〳〵面白く無きのみなる雜誌の間に於て、近頃面白くして心持よきは『內外世論』なり。其第五號に載せられたる正岡藝陽の『高田實論』の如き、同情あり活氣あり趣味ある文字あり。

●『敬香』の名に於て知られたる漢詩人大江の孝之なる人、近頃は『實業界』主筆たる趣、或る雜誌の廣告に見えたり。これぞげに『詩を作るより田を作れ』との教を守れるものか。

●博文館員の著述は、總て皆なエラキもの也。水蔭の『花』も佳作なれば質軒の『熱海紀行』も名文にして、又小波の『洋行土產』も名作なり。但しこれは桂月先生の御説に依る。

●櫻痴先生が起草せしといふ左團次の團十郎を吊ひし市川家門下總代の

吊文に『品行を正ふし……云々』とあり。樗陰先生老せりと雖ども、なほ仲々の機轉家なり。

●近頃に至りて、急に男女交際の必要など説きたつる先見家あり。湯屋の張札に曰く『改良水道使用』と。瀧の廣告に曰く『决して水道の水を使用せず』と。

●近頃頻に障ってならぬは、華族共の切りに華族方の調度を眞似んとすることなり。

●半古と古洞との小説口繪は、仲々にアッサリしてイヤミなく、甚だ以て面白し。何卒流行らせてやりたきものなり。

●似たり似たり、能く似たり。似たとは誰れに？『實業之日本』が『成功』に！

●九月の『新小説』に宙外の曰く、今の寄席藝人ほど演藝に不親切なるはなしと。然り、彼等のうちに尻の落付いて居るもの一人もなし。

●『英文新誌』カーライル號を出せり。和田垣博士の筆に成れる『忠臣藏勘平腹切の段』のは、原文に勝る妙味ありと稱せらる。この雜誌編輯員の一人なるハーツホルン嬢甞て我が故團十郎の芝居を觀て曰く、團十郎の伎は遂にアーヴヰングを凌ぐ。願くは優をして希臘の悲劇を演ぜしめん。歐西の地名優ありと雖ども、今や遂に一人の之を演ずるに足るものなし。たゞ、團十郎に於て始めて之を能くすべく、最も其伎に適へりと。而してこの大名人今や無し。悲哉。（九月廿一日夜稿了）

▲編輯廣告▲

磯野秋佛君天南地北生君の住所御一報を乞ふ



新聞評壇

▲昨今の新聞雜觀

天南地北生（投）

●朝日の電報通信と、日々の外交報道と、時事の社説とポンチと、萬朝の小説と探訪と、これ丈けの長所を一新聞に纏めたらば、さぞ完全な新聞が出來るであろうと思ふ。

●外の新聞を讀まずとも只一ッの新聞を讀んで各方面の出來事が分るのは、東京朝日と萬朝と時事と此三新聞計りである。

●朝日は紙面引締らて萬遍無く各種の材料が供せられてあるに拘はらず、外國汽船の横濱發着表が無いのは大々欠點である、此一事の爲め止むを得ず外の新聞を取る者が多い。

●萬朝の三面記事近來大に面目を一新した。

●同紙の爲めに惜いことは人の氏名を呼び捨てにすることである、特に記者が招待されたる場合（那珂博士と同伴せし自轉車旅行の紀など）に先方を呼び捨てにして書くが如きは特に目障はりである、氏の一字位ひは他の方で節険すれば、紙面の餘白經濟を害すると云ふ程でもなからうと思はれる。

●蘇峯氏の日曜講談、沼南氏の社説、弦齊氏の小説、これらが無くなれば其新聞の讀者は其一半を減ずるであらう。

●新聞は新聞で雜誌は雜誌、新聞は雜誌に非ず雜誌は新聞に非ず、此一言を以て讀賣新聞に呈す。

●傍假名の無き新聞は新聞の樣な氣がせず、何を苦んで妙な主義を骨張し玉ふや、我れ頓と「日本」新聞の方針に合點が參らず「峰として嶺として雲烟ならざるなきはなし」的、小六ヶ敷漢文句調は、茲二十年前漢籍塾に養はれたる若者の跋扈した時代に流行したものである。

●同じ我邦の隣りであるに、西の方清韓に起つた事柄は大仰に書き立て、東の方布哇や桑港に起つたことは無頓着である、海底電線も直通した今日、少しは此方面も注意して貰ひたい。

●特に濠洲に於ける日本人排斥問題の如き、これが支那や朝鮮で起つたことならば定めて國民の血が沸騰したことであらうに、其報道さへ無かつた新聞が多いのに一驚せざるを得ない。

●給入りの社説、昨日の出來事を今日寫眞銅版で現はすこと、これらは面白きことに違ひない、いづれかの社でやつて見てはいかゞ。

▲新聞に對する三希望

牧　市（投）

記者足下、新聞評壇なる一欄は實に我々の歡迎に堪へざるところ、由來新聞なる一個專制の暴君には、其横虐に對し之を訴ふるに途無く、之を制裁するに由なかりしなり、之が爲めに從來受けたる社會及び個人の屈辱は奈何なりしとするぞ、紳士の躰面を壞はし、少女の一身を誤まり、會社を誤まり、團躰を誤まり、汚風頽俗の幇助者となり奬勵者たりしもの實に新聞記者其人なりき、新聞評壇は此暴横を制裁する唯一の機關なり、前號掲げられし杉村縦横君前田三遊君等の所論を見る、我々の古くより言はんと欲して言ひ能はざりしものを道破し、快喩ふるに物無し、茲に一言驥尾に附

して二三の希望を述べんとす。

第一は新聞社の連合なり　各種の營業各組合有りて共同の利便を計り、且つ其弊害を救ふ、新聞社豈獨り組合無かるべけんや、敢て其主義を一にせよと云ふに非ず、其材料を一にせよと云ふに非ず、自由競爭は當り前の事、腕によりかけて我れ其新と其確とを示さんと云ふ素より不可を見ずと雖、其紙面や其記者の弊害有る點のみに就て各社共同其れが匡正策を講ずるが爲め組合を設くることは大に必要なることとならざるが、例せば個人攻擊の程度、花柳姦通泥棒種の書き方、其他に就て一定の組合法に依りて制裁し、且時々會合して議することとあらば、其面目大に一新せん、然して此組合は先づ東京より設けて漸次地方新聞に及ぼすべし、近來帝都の新聞はやゝ品格を重んずるに至りしと雖、地方新聞の亂暴益聽くに堪へたるものあり、此種の制裁は是れ必要なり。

其二は惡德記者の取締りなり　甲社にて放逐されたる者が乙社に入り、更に惡事を働ひて丙社に入る、都下の新聞を流れ渡りて更に地方を荒らす、荒らすこと三四年、能い加減熱の冷めたる頃再び東京に舞ひ戻りて惡事をなす、第一に云へる組合の設けらるゝあらば先づかゝる惡德記者を雇ふの弊を防ぐべし、本來此種の記者は奸才に長じ、時にノロマなる記者の成し能はざる奇功を收むことあり、その爲めに危險とは知りつゝ雇入れ遂には飼犬に手を咬まれ、其社の名譽をも害することゝなるなり、紙上には廣告せざるまでもかゝる不都合にて退社せりとの報知は各社に通じて互ひに警戒し、惡德記者を取締ること必要なり。

其三は記者の教育程度を高むることなり　各商店にても店員は相當の教育あるものを撰ぶ今日なり、まして新聞社員に高等教育の必要なるは申すまでもなし、見渡たすところ都下の新聞、記者其教育の程度實に憐れむべきものあり、新聞事業の困難なるより各社の經濟意の如くならず、爲めに相當の人物を雇ひ入れ能はざる爲めならんも、さりとは其人物の撰擇に意を用ひざる又甚しと云ふべし、高等教育を受けたる新聞記者の多くなる程我新聞界は其面目を一新すべし、記者の教育を檢するはこれ又必要の事たり。

以上の三點我々の新聞に就て希望するところ、餘白に掲載を賜はらば榮甚し。

記者白す　新聞評壇は成るべく事實を捉らへて評論したるものを投ぜられたし、金玉の投書徒らに掲載し能はざること多し。



雜評

新罪言

藍川

折衝難

強隣益跋扈。樽俎折衝難。邊防今日急。風雲接三韓。
胡騎屯不散。渤海捲波瀾。恐懼朝廷小。唇亡齒亦寒。
嗟我諸宰相。摸稜事苟安。已蒙此屈辱。晏然甘素餐。
誰建百年策。壯士徒長歎。無謀亦可愼。何必啓釁端。
兵者是凶器。只要鋤驕頑。我願禦侮計。偏在樽俎間。
横議厭處士。怯懦嗤衣冠。

藤大勳

黠哉藤大勳。疇昔衆黨類。傲然稱總裁。權勢日墜地。
樞府忽遁逃。中途變夙志。雞鳴狗盜輩。一朝爲所棄。
金屋貯阿嬌。鴛鴦貪美睡。

秋濤生

横目而竪鼻。何人呼爲犬。嗚呼秋濤生。窮途雖困蹇。
元是日本民。忠孝當自勉。豈忘父母邦。皷舌一片臠。
曾子殺人矣。寃枉不足辯。訟之於法廷。其心狹而褊。
償金十萬圓。若向手中轉。潤筆不足貪。敝衣不足典。
青樓以爲家。酒中常沈湎。伐性且促壽。枯骨生苔蘚。

竹頭木屑

香峰

△有美君の小說と綿の比喩も一寸面白いが、若し綿花を水壓器械で壓搾すれば何になる、三百頁を半頁に壓搾すれば無論御望の通り收縮するであらう、然しその結果は眞理を得るも小說を得ないことになる。

△酒を飮むは醉ふ爲であるとすれば、ナゼこれをかん酒としてアルコール分を揮發せしむるであらう、又なぜに蒸溜器にかけて純粹のアルコールとして飮まぬことであらう。

△九月發行の三小說雜誌中で、表紙のサッパリとして居るは文藝倶樂部が第一で、最も俗らしいは文藝界である、世の中も段々倒しまになつて來た。

△雜誌の中で宗敎雜誌は一等その數が多い樣である、然しその原因は讀者の多いよりも、書く人の多い爲であるまいか。

△漢詩を作るといへば漢字の素養が幾等か有るといふことが分る、和歌を讀むといへば國文學の素養が幾等かあるといふことが分る、俳句を作るといへばその人が必ずヒマの多い人といふことが分かる。

△綠雨の「仕入殘り」美妙の「金忠輔」共に元氣なきこと夥しい、それでも綠雨は舞臺のよきだけ人に讀まれる、日出國新聞の美妙に至つては恐らく讀まるべき人に讀まれまいと思ふ。

△宙外の文勳論もよい、假りにこれ等の人々に勳章を授けることゝすれば、僕なら故市川團十郎に勳一等を授ける、宙外の推尊して居る紅葉には勳五等、川上オッペケペー右同斷。

△序なれば故大橋佐平氏に贈位、それから三遊亭圓遊、女優仲吉にも授勳あつて然るべしと思ふ。



讀者之文壇

現在の日本劇

なてしこ

日本劇界の中心點は、壯士劇にあらず、歌舞伎と壯士劇との中間にもあらず、依然として舊劇と稱せらるゝ日本大歌舞伎の上にあり。菊五郎團十郎死せるにもせよ、芝翫、梅幸、家橘等が尙未熟なるにもせよ、舊劇の價値は壯士俳優をしてその鼎の輕重を問はしむる程に、未た大暴落せざる也。近時川上一派の正劇派が、「己が罪」、「金色夜叉」等に成功せしは、その技藝の上の成功にあらずして、興行の上の成功なり。彼等は第一に男女學生間に受けのよかりし文士の近作を擇びて

舞臺に上せり。正劇派の名の下に洋式の改良劇を演ずべしと宣言せり。非常に重きを舞臺上の裝置の上に置けり。興行日數を短縮せり。舊劇の鎖國的なるに反して頗る文士間と疏通の方を講せり。これ等の凡ては盡く興行の上に成功すべき要約の一ならずや、言換ゆれば此等は俳優としての成功よりも、興行人として成功せる也、未だ以て雄を舊劇と爭ふに足らず。

正劇派の九月興行は、その採るべき脚本を公衆の指示に委せり、これ一の不思議なり。その又擧示せる種類は、櫻痴の「夜の鶴」を除きては盡く小說なり、これ亦一の不思議ならずや。評判よき小說を舞臺の上にのぼせ、よりてその讀者を羅致せんと試むるは巧なる政略なりといふべし、壯士芝居の人氣なるものは、概ねかゝる手段によりて得たるものに過ぎず。次には文士の比較的彼等に接近するも、亦その興行に成功する一線由なるべし。由來粗笨なる脚本は數〻今の文士の手より產せられたり。されども此等の作は、詩を解する力大に鈍くして、これを演する術の大に優れたる舊俳優の、演ずべき物としては餘りに劣惡粗笨なり。唯それ劣惡粗笨なるが故に壯士役者に適せり。こゝに於て彼等と作者と接近せり、隨てこれを稱揚するもの出てたり、壯士俳優亦儼然として彼取て代るべしと信ぜり、劇界の中心迄が我黨の上に歸せりと做せり。されども世間は未だ彼等のかゝる僭上を容す程、劇に就て全く盲目なるにはあらじ。

吾人觀劇者の、劇に向て要求する所は單に娛樂の上にあり、之に對して恍然として我を忘れる境にあり。然してその興味は劇の非事實的なる割合に增進し、事實に近くに隨て削損せらる。されとも普通の智識に矛盾する如き不可能的事實は、却て興味を減するものと知るべく、その廓大は或る制約の範圍內に止るべきと論なし。唯この制約は讀むべき詩、即ち小說等に比しては頗る寬嚴の差ありて、大抵の不自然なる事實は、劇の上にありては觀者に容赦せらるゝを例とする也。故に吾人は、舊劇を一概に夢幻劇なりと罵倒する學者の、尙劇を觀て笑ひ、若くは泣くの事實を看て怪まず、益〻舊劇の價値高きを尊敬するもの也。よりて又無意義にして且無趣味なる壯士劇を喜ばず、彼等の元祖靑木玉乘一座と相距る太遠からざるを思ふ。

菊五郎團十郎逝けりと雖も、團藏あり、八百藏、松助、片市、勘五郎等の老熟せるあり、芝翫、梅幸、家橘、高麗藏、訥升、米藏等の有望なるあり、劇界の今日以

て索漠なること草なき砂漠、花なき寒都の如しといふべからず。吾人亦喜んで明治式の錦繪を歌舞座の上に見ん也。

短文

我國の富豪に就て

▲富豪と云へば、社會主義かぶれの人々は、直に嫉妬、怨恨、猜忌の眼を以て、細民の膏血を絞るものだとか、寐て居て樂するものだとか、小作人や職工をいぢめるものだとか、慈善だとか同情だとかは少しも無い動物だと云ふ様な惡感情を以て向はるゝてあらうが、讀者よ請ふ徒らに罵るを止めよ、勿論彼等に以上の不德あるは我輩百も承知だが、彼等豈にかゝる不德のみに充ちて、此の取柄なきもの共ならんやだ、顧みて他の半面を見よ、加何にして彼等は成功せしか、如何にして彼等は鉅萬の富を成せしか、其徑路には勤勉、忍耐、正直、機敏、活眼、熱心等のあらゆる德に依つて包まれ、其結果初て今日の地位を成したものてある、澁澤や、安田や、若尾などの壯少時代の經歷は諸君の記憶に猶新たなるとてあらうと思ふから繰返へさないが、其事蹟を考一考せられなば思半に過ぐるに相違あるまい、下宿屋の二階に寐ころんて、新聞雜誌の不平論に讃喜し、富豪を罵倒して快と呼ぶものには、如何に寛大なる吾輩も一向感心が出來ぬ、まづ富豪などのあらを探がすよりも、足元用心專一て、熱心て勤勉で自ら富豪となり、諸君が蜃氣樓的理想の富豪を現實にするが一番の良策てある。（濟流隱士）

▲富豪！てもけしからぬ階級てはないか　僕は此富豪なる辭を聞く時直に顔蒼き夫人を想ひ、酒肥りの男を想ひ、白粉臭き妾を想ひ、庶子幾人あるを想ひ、二頭立ての馬車を想ひ、花見を想ひ、避暑を想ひ、別莊を想ひ、豪奢を想ひ、非倫を想ひ、醉生夢死を思ふ、かくして一生を終らんは人として餘りに愚なる事てはないか、寧ろ僕は此けしからぬ富豪なる階級に身を汚がさんよりは貧にして清く、額に汗して一日を働きかたぶき〳〵乍らも凉しき月光を浴びて、妻が酌に一盞を遣り、愛子の手に拍手をとつて俗曲ならぬ處世の歌でも歌ふと云ふ様なのが好い様に思ふのだ。故に此頃世間てヤカマシク云ひたてゝ居る成功と云ふとこれには決して僕の贊成の出來ぬ所てある、そは云ふ迄もなく成功と云へば三井大倉や小カーネギーにでもなるとだと計り誤解して居るからだ（句童）

▲商業學校を建てた大倉君、圖書館を建てた大橋君、マクスミユラー文庫を寄附した岩崎君、これらは富豪の社會に向てなすべき仕事の好標本てある併しコンナ事の一つや二つては足らぬ。

癩病院の爲に獨立其研究に施設を頁擔する富豪はなきか

風俗改良の爲めに己か資產全部を拋つ富豪はなきか

僕は此二事を以て深く富豪の有識者者に望むものである。（田．の）

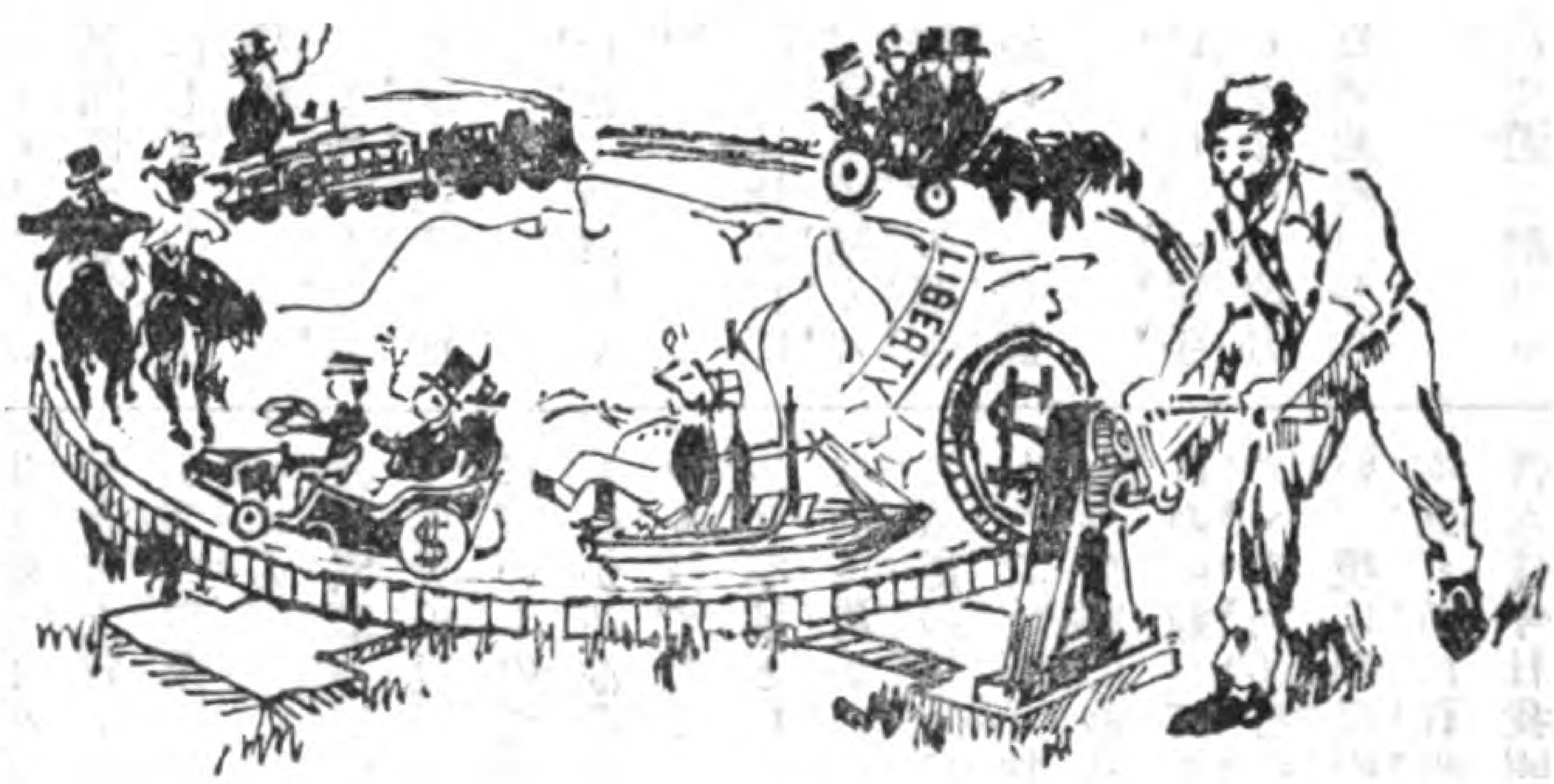
▲四谷の鮫か橋、芝の新網、下谷の萬年町などゝ連合して一つ貧民連合隊を作り、爺も婆も餓鬼も阿魔ッチョも、千人萬人、ゾロ〳〵列をなして新作貧民の歌でも歌ふて富豪の家を歷訪して見たい。（富山浪士）

△おべつかの爲めあて人に立派な船を造つて献上した人はある、妾の爲めに別莊を作つて呉れる人はある、位階が欲しさに海防費を献上した人はある、自分の名前を賣る爲めに小な商業學校やけちな小學校を立てた人はある、自家の金庫を膨張させる爲めに數万の同胞を塗炭に苦めてる人はある。されども、獨力一の大學を起し一の施療院を建てた富豪の此の日本に一匹も無いとは如何にも情ない次第てはないか。之

ゐ彼の本邦人が拜金宗の本國なぞと冷評する米國の富豪輩が學校や病院や慈善事業にドシ／＼大金を寄附して更に吝む所なきに比すれば實に天淵月鼈の差のみにあらざるなりだ、僕は此間萬朝報に左の記事があつたから切り拔いて置いた

米國の新聞記者學校　米國の富豪ブリッツアーはコルムビア大學内に新聞記者養成所を設くる目的にて去月十五日二百万弗を同大學に寄附したる由にて同大學は其敎場に充つるためモーニングサイドに建築費五十万弗を以て近々校舍の新築に着手すべしと云ふ

ドウです？、單に新聞記者の養成の爲めに獨力二百万弗を寄附する人もあるに、日本の金持が官私大學の爲め能く一人て一万圓以上の金を寄附した人が幾人あるか、年々私立大學の當事者等が暑中に各地を飛び廻り遊說の結果漸く一頭五十圓か百圓位の寄附者の十人か二十人位を募集するに過ぎぬとは何たる情ない事てあるか、之でも膨張的日本の世界の日本のと自慢するの價があるだらうか。從五位様の、番町様の、湯島御殿の、駿河臺の御前のと青公卿や古大名の眞似許りしたがらずにチト歐米富豪の美風にあやかる事を心掛けたらよからう、實に度し難いのは或邦の有財餓鬼どもてある。（晉佛）



▲久々て東西の比較を初めようと思ふ、記者足下、讀者諸君、願くは數行の餘白を割愛し玉へ、數秒の時間を割愛し玉へ。

歐米の富豪

一最も敎育ある品位ある階級
一慈善業の本家
一遺産を社會公衆の進步發達の爲に義捐す
一勤勉の民
一内に在ての娛樂は音樂なり讀書なり外に在ての遊戲はヨットなりクリッケットなり
一アルプスを踏み北極に行く
一交際場裡貴婦人との舞踏
一家庭團欒の模範

日本の富豪

一最も無敎育にして品格乏しき階級
一分らず家の隊長
一遺産を放蕩兒道樂娘養成の資金として遺こす
一遊惰の民
一内に在ての娛樂は弄花なり下がゝりの話しなり外に在ての遊戲は待合耽しなり溫泉廻はりなり
一熱海に引籠り箱根に寢轉ぶ
一待合靑樓醜業婦とのカッポレ
一一門風波の標本

（白金生）

▲田中正造君大倉喜八郎君内村鑑三君平沼專三君片山潜君澁澤榮一君これらの顏ぶれて一度立合大演說會が開きたいな（ちか）

▲我富豪と云へば岩崎、三井、鴻の池を思ひ出し、歐米の富豪と云いばモルガン、カーネギー、ロックフエラー等の富豪家が胸に湧出して來ると

云ふ顯極で地球上荷も一洲一國と稱せらるゝ土地で必ず其土地の金持なり長者と云ふものがある。世人は歐米の金満家を知る樣になつてから、我國の其れに批難の聲を發する樣になつた。曰く日本の富豪は無為無能である、歐米の富豪は教育、慈善、其他の事業に從事して善く富の使用法を研究して居ると。然し之れは未だ日本現時の眞相を知らぬ人の言論で其富を得て居らんものである。全體我國は或る一種の新聞國で貧富の懸隔がまだ甚だしくない例へば地方で小學校を設立するにしても其費用は地方に依て大同小異であるが大概共同一致善く立派な學校を立てゝ子弟を教育して行く事が出來る。ああ斯んな樣な點から考へて見ても生溜りの富豪攻撃主義は無功有害だ。此方面に費やすエナージーを他の方面に費やしたが餘程得策だと思ふ(R.S.生)

▲富豪！富は腐にして豪は傲なり腐敗と傲慢これ富豪の特色、或は曰く富は婦にして豪は彌漫色郎門の階級を云ふなりと(波　嶺)

▲我國に富豪など云ふものはない、岩崎三井なども之を歐米に比ぶれば丸で太陽の前の星の樣だ、イヤ勞働問題、イヤ社會主義、富の壓制もなければ勞働者の痛苦も無ひ此天下泰平の日本に、書生と不平學者の騷ぎの材料となる彼の罪惡を行はぬ日本の富豪　かの痛苦の無い日本の勞働者こそ善ひ面の皮なれ(ヤソ嫌生)

▲同じ富豪でも東京に住んで居るものはいつも槍玉にあげられ、一擧手一投足悉も監視執行中の囚人扱ひせらるゝこと氣の毒なものなり、地方の富豪と東京の富豪何の差異有んや、之れを東京に居る爲め岩崎三井大倉など計りを六ケ間敷云ふは不公平ならずや。(仝)

▲今日は大磯明日は鎌倉と、素性も知れぬ賤婦を引き連れて遊び廻はるが一生一代の仕事、帝國の前途が如何成らうが、社會の風俗が如何ならうが、そんな事には一向かまい無し、只モオー思ふ體に飲み思ふ儘に食ふて遊て居る、是れ即ち我國の富豪である。

堅くるしい哲學や眞面目くさい宗教談は迚ても耳には通らない、讀書と云へば醜業婦の膝を枕にしながら、文藝倶樂部や新小說位を讀むのが關の山、理想の低さ加減と云つたら御話しにならないが、其くせ利を見る事と婦女子を見る事には頗る達者のものだ、是即ち我國の富豪である。

待合の女將や料理店の小女には惜しげもなく黃白を與へるが慈善事業とか公共事業の爲めにはビタ一文も出しはしない、是れが即ち我國の富豪である。

我國富豪の好標本としては、お氣の毒乍ら本能主義の利已主義の我利々々亡者の親玉故古川某君を推さればならぬ、成程事業家としての彼は實に豪いものである、鑛山大王として追賞する價値は慥かにあらうが、然し彼が品性の下劣なる事は今更云ふ必要はない、幾多の良民を苦しめたのも彼である、可憐なる事を虫渥泣かせたのも彼である、已の孫の樣な少女を妾として幾人となく養ふて居つたも彼である、爲めに神樣のやうな翁は屑かいからして立つた、引き續いて正義の士は悉く立つた、そして人道の爲めに聲の續く限り叫んだ、しかも彼は馬耳東風、顧みもしなかつた。術も位記を停ふする身でありながら、鑛山大王とまで云はるゝ大事業家でありながら、巨万の財を有する富豪でありながら、彼の生涯はあの通りである。

ア丶古河某君はモオ死んでしまつた、然し第二の古河君は中々盡きない、現に銀座の某邊にも一人鼻の高い候補者が居るではないか、イヤ日本到る所に百の古河君が居るのである。

吾人は今日我國の富家に向て品性を高めよとは云はない、また歐米各國の富豪の如く慈善事業の爲め社會事業の爲めに財を喜捨せよとも云はない、唯だ吾人が切に望む所は、吾國の風俗を紊亂しない樣に各愼んでも

らいたいと云ふ事丈けであるのだ。（芝碌父翁）

課題

▲我國の女學生に就て（拾月拾八日）

▲我國の雜誌界に就て（拾一月十八日）

新刊紹介

▲佛領印度支那

南條高楠二博士述　澤井常四郎編

東京市本郷四丁目五　文明堂發行

此書一名を「佛蘭西日南の新領土」と云ふ、二氏がフロレンツ氏と共に去年河内東洋學會に參列したるその土産なり、東京、安南、交趾、東蒲塞、老撾の五州に關し、歷史地理風俗及び我國との關係を明かにす、左に其目次を紹介す

- 一佛國の南清經營
- 一佛領印度支那地誌
- 一南征記
- 一安南行
- 一安南史詩
- 一唐を中心とせる外國の交通
- 一昔時南海航行者小傳
- 一安南漂流海路畧記
- 一安南の數詞人代名詞文字
- 一佛領印度支那參考書目及地圖

編中挿むに佛蘭西鐵道經營圖、及印度支那全圖其他十七個の寫眞及び地圖を以てせり（九十錢）

▲沙翁物語　中島孤島編

東京神田裏神保町九　富山房發行

「ハムレット」及び「ベニスの商人」この二大名著を譯し、附するにセキスピーヤの小傳を以てす、譯文の流暢よく原書の妙味を失はず、「せめても名高き美人がおぼろ影法師なりても見せて情を偷び美を慕ふ向上の緣を作りたし」と序文に云へる望は、十二分に遂せられたり、通俗世界文學の第六編として出たるもの（定價二十錢）

▲啞の女王　嚴谷小波著

東京日本橋　博文館發行

丁抹の御伽話し、例の著者の筆にて原文以上に活動す、著者が世界中の御伽話を狩り蒐めて紹介する其功實に多とするに足れり、此編は其第四十九編として出てたるもの（金七錢）

▲水滸傳物語　上下二卷　高須梅溪編

東京神田　富山房發行

支那の六大奇書の隨一、水滸傳の馬琴に依て飜譯されたるものを玆にコンデスして百餘頁づゝの二卷に縮めて、通俗世界文學の四五編として出たものである、アノ大部なものをこれ丈けにした譯者の勞はさぞお骨折りなことで御座りましたらう、「紛々五代亂離世云々」の冒頭から幾千万言全篇一の「矣」字を使用せざりしと申す原文の變幻極まり無き妙處は見るを得ざれど、さりとて面白き節々は端折りてもあらず、水滸傳とはどんなものであらうと云ふ此頃の青年學生に採て餘程重寶なものである、北齋の繪をその儘銅版として挿めるも亦妙（一冊に就き二十錢）

▲犬の世界　本田增次郎著

東京神田南甲賀町八　動物虐待防止會發行

一册十錢、「犬と文明」「犬の種類」「犬の性質」「犬の逸話」等に分たれ、頁

犬、忠犬、義犬、勇犬、有ゆる犬に就ての説明て、面白き話しが網羅してある、總振假名付きてちら〳〵としたる趣味無き言文一致、庭訓の材料として何よりの重寶なもの、只一つ殘念なるは忠犬義犬等のお話しが西洋の例計りを擧げて、東洋の例が一つも無ひことてある、そこて日本犬より著者への口上に曰く

▲日本犬の口上

本田ちやま、増次郎さま私共ても西洋各國の犬共に劣らぬ忠勇の美談に富んて居りますに拘はらず、私共祖先の身の上には餘り御注意下さらず、隨つて日本の犬は世界の同類より劣等視せられ候樣の思を致し候事、深く殘念に存じ奉り候、何卒此次の御著述には、東洋の良犬忠犬義犬勇犬をも御加へ下され、せめては歐米の同類と肩を並べて御國威を輝す一端とも相成度と日夜祈念致居候、微衷御憐察願ひ奉り候、チンチン再拜

日本の赤白權八外一同

著者　樣

▲泰西奇文　原抱一菴譯

京橋區銀座三丁目　知新館發行

總て是れ異凡の文、悽慘の影あり兇咀の聲あり、黒き血汐走り、紅の馨香ふ盛く是れ譯者が自在の筆に載つて躍々として現はれ來る、事の奇にして怪なる文の綺にして艶なる共に驚く可し、現今の讀者社會に歡迎されんこと受合なり、全篇十三種、就中該撒慘殺事件、無政府黨と一夜、名曲愛食等その最も讀む可きものならん、卷頭に　學海、涙香、不知庵等の齊簡を載す、寧ろ陋か、（定價三拾五錢）

▲二年越　篠原溫亭著

京橋區日吉町四番地　民友社發行

どう見ても民友社の小說に遊びなし、すら〳〵と淀みなき維路は流石に老練なり、露枝、幹雄、其他の人物も思ふまゝに描かれてよく活きたり、篇中所ろ〳〵に奇拔の句を挾みたるもかく調ひては讀むに骨折れず、表裝の瀟洒たるは殆ど小說本とは受取[illegible]ぬ程品宜し。（定價二十錢）

▲成功の福音　栗原元吉　生田弘治　共著

神田南甲賀町八番地　內外出版協會發行

一名アンドリユーカーチーギと云ふ即ち英のカーネーギー氏が幼時の生立ち、十二才にして工場職工となり蒸氣機關の火夫となり、電信配達夫となり、刻苦勉勵、遂に今日の如き世界の大鋼鐵王と迄なりし間の經歷事蹟を述べ、尙氏が政治上の主義、勞働者との衝突等に關しても其詳を盡したれば、成功てふ聲高き今日此書の靑年を益する決して些細ならざるを信ずるものなり。（定價參拾錢）

▲社會主義提要　中山九天著

京都寺町通二條下る　文港堂發兌

社會主義の氣運漸く動かんとするもの丶如し、曩きには幸德、岡部氏等の著あり、今又此書に接す、相照して益する所夫れ多からん、此書はドベスタスの社會主義を論じて其の誤說を破りラツサルを執へてその科學的社會主義の創造を贊したる等の外、福音、自由合產、講座等の各社會主義を比說したる所頗る精密なり（定價三十五錢）

○○○○○○○○○○

●此外數種次號に紹介す●

明治三拾六年

公論日誌

其十

公論日誌　自八月二十二日　至九月二十日

▲政治　經濟

▲バルカン半島の紛亂　東歐ブルガリア對土耳其問題日々ルーター電報に依て報ぜらる、事件の重なる經過を記せば下の如し

△マセドニア叛亂鎭定のため召集せられたる土耳其兵は總て三百十個大隊なり(八月二十七日)　△露國皇帝はマセドニア事件に關して墺國皇帝フランシスと協議するため多分豫期より早く維納に赴くならん(九月三日)　△ブルガリアの首府ソフィアにては總て土耳其と開戰に傾かんとすマセドニアの諸團體は必死となりてブルガリアに開戰せしめんと務め居れり(九日)　△露西亞及び墺地利の二國はブルガリアをしてマセドニアの改革黨との總ての關係を絶たしめ且つブルガリアが土耳其と開戰する場合に列強より何等の保護を豫期する能はずと警告するため諸強國は聯合してブルガリア政府に通牒せんことを提議せり右の提議に對し獨逸は同意し英國及び伊國は之を喜び佛國は同意するや否や疑はし(同上)

△ブルガリア政府は列強國に通牒を發して土耳古は陸軍全部の動員を行へりこは單に叛徒を鎭壓する目的に非ざるを明なりと云ひ、歐羅巴諸國に向つて土耳古の虐殺を防止し土耳古の動員を制止せんことを請ひ諸強國が干渉の時機を誤ることあらばブリガリアは必要なりと信ずる段手を取るの止むを得ざることゝなるべしと告げたり(十六日)　△土耳其國境に駐屯するブルガリア軍團附きの後備兵六種其數二万人召集せられたり(十七日)

▲龍巖浦問題　龍巖浦問題に關して第一回警告を我林公使より與へたる後日英兩公使より鴨綠江の開放を韓廷に提議したり(八月二十二日)　△韓廷外務大臣始め政府の意嚮は龍巖浦の租借を非認するには充分の實力無きを以て暗に日露間の交渉を望む模様なるも日本公使は是非共韓國政府をして調印を拒ましめんとし十九日第二回の警告を與へ更に本日第三回の警告をなせり、其要旨は若し韓廷が租借約款に調印するに就いては帝國政府は其調印の當日より韓國政府は内地を開放したる者と認め營口諸港にも日本船舶の出入を勝手になし爾後の責任は一切貴政府の自ら招きたる禍とすと云ふにあり、尙又龍巖浦の租借は森林條約違犯にして單に專管居留地を與へたる者なれば帝國政府は之に匹敵する要求を他に持出すべしと豫告せり(二十五日)　△駐韓公使林の第三警告に對し韓廷は之を諒する旨回答し來れり(廿七日)　△露國公使は極力租借約款の調印を期し昨日又々外部に到り朝より晝飯を取寄せ夕方迄詰め掛居たるも外部大臣李道宰は病と稱して出勤せざりし中、宮内府より電話來りて調印すべからずとの勅詔を傳へしかば露公使憤然として引上げたり(二十八日)　△右に就て韓廷の外部大臣、同協辦、工商局長、森林交渉事務官の四人は辭表を呈出したり(廿九日)　△協辦李重夏外部大臣署理を命ぜらる(同上)　△日露兩公使は各々謁見を要請中(同上)　龍巖浦租借約款に對する韓廷の意志は益々強固となり去九日外部署理大臣を以て其旨露公使に照復したるに同公使は一昨日更に大要左の如き公文を送りて飽く迄森林監理と締結せる條約に依て經營を繼續するを明白にせり租借は皇室より派遣されたる森林官と露國吉林會社と既に誓約調印を經たるのみならず貴政府大臣も之を承認して正に調印が行はんとするに至り忽然變改して言を左右に託するは貴政府が友國に對する所爲に非ず本公使は茲に森林會社と監理との既誓の條約を施行するを再び聲明す要するに貴大臣は速かに調印を了して貴國の緊重なる利益を受け

られよ(十五日)

▲重要なる海外の出來事

万國鐵道會議は來る千九百五年を以て米國ワシントン府に開會の筈にて我國にも賛同を求め來れり(八月二十二日) △加那陀政府は日本政府と通商條約につきて交渉中なり(同上) △英國前首相ソールスベリー侯は遂に逝けり(八月廿三日) △我天皇陛下には前英國首相侯爵ソールスベリーの薨去を御哀悼あらせられ殊に外務大臣をして侯爵の遺族まで弔詞を電送せしめ玉へり、外臣の薨去に斯る御沙汰ありしは前の獨逸首相ビスマークのみなりしと(廿四日) △故ソールスベリー侯の遺骸は來卅一日同家墓地にて私に埋葬せらるべく、又ウェストミニスター寺院にて追悼式執行せらるべし(廿七日) △米領アラスカより白令海峽及び露領西伯利亞を經て歐洲大陸まで連絡する大鐵道布設の計畫は漸く歩武を進め米國メイン州の法律に據り一億弗の資本を以てアラスカ、サイベリア鐵道と稱する一會社を組織し、保證として二十五万弗を同州廳へ提供するまでに捗べる旨在シカゴ領事より報告あり(二十八日) △ベーラット(シリアにあり)駐在の米國副領事は狙撃されたり、幸にして彈は中らざりき、大統領ルーズヴェルト氏は目下地中海にある米國の歐洲艦隊に即時ベーラットへ向け出發すべしとの訓令を下せり(同上) △露國大藏大臣ウヰッテは大臣會議長に轉任し露西亞帝國銀行總裁プレスケー其後を襲へり(九月二日) △獨逸帝國千九百二年度の歲計は三千七百五十萬馬克の不足を生じたり(三日) △クヰンスランド州フヰリップ内閣は去る九日辭職したり、原因は印紙税法案に於て二票の差を以て勞働派の勝となりたるにあり勞働派首領ブラウンは新内閣組織を命ぜられしが十五日まで就任するや否やを確答する筈なり、右勞働派は白人以外の勞働者を排斥する者なれば濠洲聯邦中比較的移民に寬大なりしクヰンスランド州も今や亦異人種排斥に傾けり(九日) △濠洲クヰンスランド勞働派首領ブラウンは新内閣組織する能はずして衆議院議長モルガン本月十七日聯合内閣を組織せし趣在タウンスビル領事より電報あり(十八日) △英國殖民大臣チェムバレイン出納尚書リッチー印度事務大臣ハミルトンは辭職せり自家の保護貿易政策を行はんとする意見の衝突よりなり(同上) △英皇はチェンバレイン氏等の辭職を許可したり(十九日) △諸新聞は政府が外相の椅子を印度總督カーゾン卿又は南阿總督ミルナーに授けんとするが如きを報ず(二十日)

▲重要なる内地の出來事

來九月府縣會議員總選擧に付進歩黨は政務委員各領袖近日を以て悉く遊說の途に上るに決したり(八月二十七日) △皇太子殿下廿四回御誕辰は今日なり(三十一日) △警察監獄學校は廢止と決定したり(同上) △日本銀行の調査に係る本月中の東京物價左の如し(同上)

	八月	七月	去年七月
第一類内國商品	一〇五、九四	一〇六、三二	一〇〇、三九
第二類輸出商品	九五、二二	九六、二二	九三、二二
第三類輸入商品	一〇〇、七五	一〇〇、三八	九五、六九
平均	一〇二、七二	一〇三、〇〇	九七、八九

△八月下旬の貿易は左表の如く些少ながらも久々にて輸出超過を示せり(同上)

輸出品價		一二、九一八、〇四二圓
輸入品價		一二、一三一、二九九
輸出入超過出		七八六、七四三
輸出	金貨及金地金	八四一、六五一
	銀貨及銀地金	七五、七〇九

計	九一七、三六〇
金貨及金地金	三二七、四五〇
輸入銀貨及銀地金	四四二
計	三二七、八九二
金銀輸出入超過出	五八九、四六八

△東京電車鐵道會社の報告によれば品川線の動力變更後本月二十二日より三十一日に至る十日間の總收入は五千九百四十五圓にして一日平均五百九十四圓に當れり、而して動力變更前に於ける去年の昨今は平均四百六圓の收入に過ぎざりし故に動力變更により得たる增收は二割强に相當すと云ふ(同上)　△大阪市は市街鐵道市有の方針を定め先づ花園橋より築港棧橋に至る一哩二十鎖の電氣鐵道布設を計畫し本年四月起工して今回全く落成し昨日內務省より許可を受け本日より開業することとなりたり、此線路に對する工費は十三万圓にして賃率は全線を四區とし一區一錢と定めたり(九月一日)　△貿易表以外の正貨出入に就き大藏省が今度調査せる所によれば(細則は略す)(二日)

海外より入りし金額	六九、五一六、一四六圓
海外に出でし金額	五一、二七一、七四三圓
差引受取超過	一八、二四四、四〇三圓

△陸軍少將秋山好古、同步兵大佐大庭二郎は本日露領ニコリスク附近へ差遣を仰付られたり(三日)　△東京市の各區長の年俸は一級千四百圓、二級千二百圓以下六級八百圓と改正されたり(全上)　△靑森にては四五日來降雨の爲め諸川出水し浸水家屋百餘戶に及び西津輕郡深浦村に流失家屋卅戶ありたり(十日)　△公爵近衞篤麿病氣危篤の旨聖聞に達し本日侍醫長岡玄卿を近衞邸に差遣されたり(全上)・△帝國議會議事堂の大修繕は愈よ三十万圓の經費にて來年度より三個年の繼續事業として着手する事に豫算決定す(八日)　△今秋の各師團機動演習及特科隊の演習の時日及場所左の如し(十日)

近衞	十一月九日より十九日迄	宇都宮地方
第一	同月八日より十八日迄	相模平野
第二	十月廿六日より十一月五日迄	山形地方
第三	十月廿五日より十一月四日迄	三方原地方
第四	十月廿六日より十一月五日迄	法隆寺地方
第五	十一月一日より十日迄	岡山地方
第六	十月廿六日より十一月五日迄	小城地方
第七	十月一日より十一日迄	室蘭地方
第八	十月十八日より廿八日迄	能代地方
第九	同上	垂井地方
第十	十月卅一日より十一月九日迄	青野原地方
第十一	十月廿七日より十一月五日迄	高松地方
第十二	十月卅日より十一月九日迄	久原地方
騎兵第二旅團	十月三日より十八日迄	黑磯地方
要塞砲兵(下の關要塞砲兵聯隊)	十月廿八日より十一月五日迄	下の關地方
工兵(四大隊十大隊)	十月二日より十四日迄	牧方地方

△大阪市會は博覽會に關したる慰勞として鶴原市長及菅沼池原兩助役に九千二百圓を贈ることと可決したり(十一日)　△本月上旬の貿易概算左の如く引續き輸出超過を示したり(全上)

輸出品價	一〇、八九九、二〇三圓
輸入品價	六、七七四、九七八
輸出(入)超過出	四、一二四、二二五
金貨及金地金	四一一、四四五

輸出銀貨銀地金	二五、五九四
計	四三七、〇三九
金貨及金地金	七三四、六二四
輸入銀貨及銀地金	一二
計	七三四、六三六
金銀輸入超過	二九七、五九七

△對露同志會の首相に致せし警告書發表さる（十二日）　△露領黑龍江沿海州にては本日より數日間ニコライウスク地方に於て陸軍大演習を擧行するに付我陸軍にも同總督より案内あり秋山少將、大庭大佐兩人參觀の爲め派遣されたるが同演習は烏蘇里陸軍々監の下に擧行し兵員約三万餘を動かすべしと（十二日）　△本日は平壤戰勝の十週年に相當するを以て到る所に紀念祝賀會催されたり平壤會は靖國神社にて紀念祭を執行す（十五日）　△九州鐵道會社改革の結果愈よ本日を以て淘汰人員發表されたり改正の定員は三百人にて舊定員に比して千四百三十二人減少され現在職員七百九十八名の淘汰を見るに至れり（十七日）　△對露同志會は府下に三日間引續き大演說會を開き、且つ來月五日大會を開くに付是非上京する樣各同志者に移牒したり（十八日）　△八月以來各縣に暴風害の被害少からざる旨聞召され天皇皇后兩陛下より御救恤として本日金六千五百圓を下賜されたり（同上）　△東京府會議員選擧はいよ〳〵九月廿五日午前八時より午後二時までと決定し本日告示せられたり（廿日）

▲街鐵紛擾問題　大井憲太郎、熊谷操等街鐵獨立同盟發起會を開き宣言書規約等に付て協議せり（八月廿三日）　△東京市街鐵道は數寄屋橋神田橋間の賃率を二錢と決定し昨日警視廳總監及び府知事に向つて認可を申請したり（廿五日）　△街鐵の株主熊谷操等が東京區裁判所に向ひ同社の取締役會長雨宮敬次郎專務取締役藤山雷太以下に係る總會決議無効宣告の申請をなすと同時に合併手續禁止の假處分申請をなし區裁判所が假處分の申請を容れし後合同派の異議申立ありしも本日に至り主任判事の命にて假處分は愈々有効に維持せらるゝこととなりたり（二十七日）　△府下各區市民の代表者として熊谷姉丸山外二十餘名は昨日内務省に出頭山縣總務長官に面會し市民二万五千餘名の第一回連署請願書を呈出し合併認可申請を却下せられたき旨を陳述したり（同上）　△合併派は非合併派の勢力を殺ぐの手段として麴町區内の車夫を煽動したるより又紛亂を高めたり（九月十日）　△街鐵の株主松井氏次郎外二十三名は本日臨時總會召集の請求書を提出したり（十二日）　△非合併派雨宮、立川の兩氏は本日願書を警視廳へ提出し左の如き三錢均一を願ひ出でたり、一乘車一回金三錢　全線路距離の遠近に拘はらざるものとす但勞働者及學生等の便利を謀り朝夕一時間宛を限り右乘車賃を半減即ち金一錢五厘に爲す事（同上）　△警視廳は街鐵の賃率三錢均一案の出願に接し内務省の方針街鐵の願書に藤山專務の署名なきものを取上げざるに決したりとの理由を以て二度までも刎付けしが立川は之に屈せず昨日更に警視廳に出頭して請求せしに漸く受理したり（十五日）　△非合併派は昨日各大臣に請願書を提出し街鐵問題を閣議に付し合併派の提出したる合併願を却下せられんことを望めり（十七日）　△街鐵の監査役より區裁判所に提出したる雨宮敬次郎、立川勇次郎に係る重役權限拘束假處分の申請及び藤山專務より提出したる合併手續中止假處分異議の申請に本日何れも却下せられたり（同上）　△街鐵市有期成同盟會なるものを組織し此際市有論を主張せんとして昨今計畫し居る者あり（十八日）

▲米作豫想公報　去月廿六日に於ける各府縣の米作に就き本日正午迄に農商務省に到達したる公報左の如し

府縣名	本年豫想高	昨年實收	昨年に比し増減

	石	石増	石
長崎	四五三、四七二	四二三、九五〇	二九、五二二
茨城	一、二四一、三八七	八四一、六六七	三九九、七二〇
滋賀	一、五四八、二五七	一、〇九九、五八〇	四四八、六七七
長野	一、三〇九、二一八	一、〇四七、三七四	二六一、八四四
青森	七七〇、〇〇七	三四七、九八三	四二二、〇二四
山口	一、三八三、九九七	一、一七七、〇四六	二〇六、九五一
大分	八四〇、〇三四	七三九、七五〇	一〇〇、二八四
宮崎	七〇八、九九四	六五八、六三七	五〇、三五七
埼玉	一、〇六八、四一九	六一七、七五六	四五〇、六六三
山梨	三七九、一二六	三〇四、八三三	七四、二九三
岐阜	九一一、〇五五	八二八、二三一	八二、八二四
宮城	一、二二六、八八〇	五七八、二一九	六四八、六六一
鳥取	六〇三、二二八	四一七、三三〇	一八五、八九八
高知	五三六、八三五	五〇三、四九九	三三、三三六
佐賀	一、〇七一、九七七	九四一、四八五	一三〇、四八七
沖繩	三五、六二五	二八、三四一	七、二八四

右は僅かに十六縣の統計に過ぎざるも其増收額は三百五十三万石を越え其價格一石十二圓と見るも四千二百三十六万圓に上ぼる(九月一日)

△本日正午迄に達せし公報左の如し(二日)

府縣名	本年豫想高	昨年實收	昨年に比し増減
	石	石	増　石
京都	八〇七、〇一六	六九二、五二三	一一四、四九三
山形	一、四〇四、三九三	九九三、一〇七	四一一、二九二
和歌山	五三三、六二一	五〇二、三五九	三一、二六二

千葉	一、六六八、四三九	一、一六九、六九二	四九八、七四七
奈良	七三一、七九五	六一七、一五四	一一四、六四一
愛知	一、八四二、七八〇	一、六五八、四五四	一八四、三二六
岡山	一、五四四、五五九	一、一三八、一八一	四〇六、三七八
愛媛	七六六、五四六	六五〇、六七七	一一五、八六九
福井	八五〇、〇〇〇	五九八、〇二八	二五一、九七二
香川	七六二、六四二	六四三、一八八	一一九、四五四
廣島	九四八、四六八	七五六、六九三	一九一、七七五
栃木	八九三、四五五	五二三、〇六六	三七〇、三八九
徳島	四四四、二五二	三四三、三九七	一〇〇、八五五

△本日正午迄に達せし公報左の如し(三日)

府縣名	本年豫想高	昨年實收	昨年に比し
	石	石	増　石
東京	三二一、六八〇	二五五、三二一	六六、三五九
鹿兒島	八六四、〇七五	七八五、五二三	七八、五五二
三重	一、二七四、九八三	一、〇五三、九六五	二二一、〇一八
石川	一、〇三〇、五九七	八四七、〇五八	一八三、五三九
神奈川	四二一、五四六	三一〇、五一六	一一一、〇三〇
大阪	一、一二三、三五六	九九六、九八四	一二六、三七二
兵庫	一、九五八、〇五六	一、八一〇、七一七	一四七、三三九
福岡	一、九四四、一二四	一、八七〇、二〇四	七三、九二〇
富山	一、三六七、二〇四	一、〇六〇、〇〇〇	三〇七、二〇四
岩手	五一一、七五二	二一九、六三〇	二九二、一二二
對馬	五一二、六九六	三五二、四八六	一六〇、二一〇

△前報後本日正午迄に達せし公報左の如し

府縣名	本年豫想高	昨年實收	昨年に比し増減
	石	石	増
島根	八六九、九〇五	七四八、七〇八	一二〇、七九七
福島	一、三八七、六二八	七一八、六二二	六六九、〇〇六
熊本	一、三九二、七一七	一、二二三、七〇四	一六九、〇一三
秋田	一、三四九、四五三	九六六、三〇八	三八三、一四五
北海道	二三〇、〇〇〇	一二三、五五一	一〇六、四四九

各地の公報は是にて完結せり乃ち二日以來絨減せし分を合計するに

	石
三十六年度豫想額	四七、〇一七、二一一
三十五年度實收額	三六、九二八、一五三
平年作	四〇、二四九、五八六
三十五年實收に比し増收	一〇、〇八九、〇五八
平年に比し増收	六、七六七、六二五

右の如くにして本年の豫想收穫は實に四千七百万石を超え昨年に比し二割七分三厘、平年に比し一割六分八厘の増收に當る、今後不時の災害なきに於ては此豫想は大差なかるべく寧ろ豫想以上の増收を見んも知るべからず此の如きの豐收は我國統計あつて以來未だ曾て見ざる所なりとす(四日)

▲社會雜事

▲東京市内　△新橋品川間の電車鐵道は愈々本日より開始せり、一日の收入六百六十三圓三十六錢にして馬鐵よりは凡そ四百圓許りの増收あり(八月二十二日)

△今日は市内自殺者の多き日なり、芳原の無理情死に男女の絕命、高輪に下女の轢死、四谷と牛込に老婆の投身、他に汽車と電車にて轢死を企てたる者あり一は放蕩を悔いて一は精神に異常を來たしてなり。共に未遂(廿四日)

△都新聞は風俗壞亂と認められ警視總より告發さる(二十五日)

△布哇に居住する本邦人より毎年其郷里へ送付する金額は案外多大にして現に昨年の如きは五百十六万五千圓に上れり(二十四日)

△日米間海底電信　愈本日より公衆電信を取扱ふ事となり　シカゴ、「ポスタル」電信會社は其陸上線と太平洋電信會社の海底線とを聯絡し電信料をシカゴ日本間一語一弗五十仙と定めたり即ち從來に比し三十二仙低減せられたり(二十五日)

△畜犬總數　府下十五區八郡に於ける最近調査は一万五千六百八十九頭にして此飼養者は一万四千三百三十八人、內七百四頭は猟犬にして之を飼養する者は五百八十六人なり(三十一日)

△市内　到る所に赤痢病發生し流行の兆を現はせり(九月二日)

△猫殺し　に名高き花井お梅は淺草にて汁粉屋を開業せんとて屆出づ(三日)

△市街鐵道　は愈々今朝より開通したり正午までの乘客數は一万八千二百七十一人なりと(十五日)

△コール氏　田口卯吉、坂谷芳郎、林田龜太郎諸氏發企となりて、本日芝公園紅葉館へ濠洲の紳士コール氏(濠洲に在て亞細亞人排斥問題に反抗し人道の爲めに盡せる同氏)を招待して歡迎會を開けり(同上)

△動物虐待防止會例會　は本日神田一橋學士會に開會、左の件々を決議したり

一、十月下旬に大會及び演說會を開く件

一、動物虐待防止に關する懸賞文を市内小學校に募集する件

一、小き雑誌を發行する件

一、動物虐待事項調査の件　（同上）

△人民新聞　は記事風俗壞亂と認められ發賣頒布を停止さる（十八日）

▲内國一斑

△今朝　十時大津町に失火あり人家八十五戸、倉庫十二棟殆ど町の過半を燒き拂ひ負傷もありたり（八月二十六日）

△神奈川町　にペスト死亡患者あり（二十八日）

△讃岐　善通寺町なる第十一師團野戰砲兵第十一聯隊火藥裝塡所にて榴散彈に炸藥塡充中突然爆發し作業中の砲兵九名は無慘の最期を遂げたり、原因不明（二十九日）

△横濱　には又々疑性ペスト患者起り、保土ヶ谷にも類似患者出來たり（同上）

△現今全國寺院住職總數　は五万三千百二十九人にして其内譯天台宗二千八百二十八人、眞言宗七千四百五十九人、淨土宗五千九百七十一人、臨濟宗四千三百十三人、曹洞宗一万千七百三十六人、黄檗宗三百六十三人、眞宗一万五千六百七十六人、日蓮宗四千百六十三人、時宗三百八十七人、融通念佛宗二百三人、法相宗十一人、華嚴宗十二人なりと（二十九日）

△曾て　日鐵の機關車より吹出したる火の子の爲めに其町の大部分を燒拂はれたる北豐島郡岩淵町へ本日又もや機關車の火か落下し其町家五月は全燒したり（三十日）

△又もや　華嚴の瀧に投じたらしき者あり、府立染織學校の生徒なり（九月四日）

△犯罪　其筋の調査に據れば年々强竊盜及騙取拐帶等の犯罪は多少減少の傾向ある趣なるが田野、山林、牧場等の産物を盜まれしものをも計上しての概數左の如し

戸數十萬に付强竊盜に遭し戸數

三十年	二千九百九十六戸
三十一年	三千二百三十六戸
三十二年	二千五百四十九戸
三十三年	二千五百四十一戸
三十四年	二千五百二十七戸

人口十萬に付强竊盜及騙取拐帶等に遭し人

三十年	百二十四人
三十一年	百二十三人
三十二年	百十三人
三十三年	百十四人
三十四年	百十七人

（五日）

△自殺者　其筋の調査に依れば全國各地方を通じ近年自殺者の數年々增加の傾向あり去る三十年には男女合計七千六百五十八人なりしが三十四年には八千五百八十二人の自殺者ありたり其因由及男女別左の如し

因由	年度	男	女
精神錯亂して	三十年	二千三百人	千五百七十人
	三十四年	二千五百七十五人	千七百二十八人
病苦により	三十年	六百九人	四百十九人
	三十四年	七百六十八人	五百十二人
活計の困難又は薄命を歎き	三十年	七百二十九人	二百五十三人
	三十四年	七百三人	二百四十九人
痴情又は嫉妬により	三十年	百六十九人	二百五十九人
	三十四年	二百五人	二百九十四人
前非を悔ひ又は慚愧に因り	三十年	二百一人	八十五人
	三十四年	二百三十一人	六十六人
親族不和に因り	三十年	九十人	百四十八人
	三十四年	八十七人	百六十四人

罪の發覺を恐れ又は刑の免れ難きため	三十年	五十七人	二十人
	三十四年	六十五人	十六人
將來の事を苦慮して	三十年	三十六人	二十九人
	三十四年	四十人	三十二人
商業のため損失し又は負債償却に困みて	三十年	八十人	十三人
	三十四年	九十四人	七人
親又は夫等の徴戒又は譴責に因り	三十年	九人	十二人
	三十四年	七人	十五人
離縁を悲みて	三十年	二人	十六人
	三十四年	二人	十二人
夫又は子等の不行狀を歎き	三十年	三人	八人
	三十四年	七人	十人
私通妊娠を憂て	三十年	○	二十一人
	三十四年	○	二十三人
結婚を忌みて	三十年	一人	十一人
	三十四年	一人	六人
身體不具なるを歎て	三十年	三人	九人
	三十四年	四人	五人
鬱憂に因り	三十年	十五人	十二人
	三十四年	二十二人	二十四人
親又は妻子等の死去を歎て	三十年	二人	九人
	三十四年	四人	四人
其他	三十年	七十七人	二十七人
	三十四年	百十二人	四十一人
不詳	三十年	二百四十五人	百十一人
	三十四年	二百九十七人	百四十七人

（八日）

△自用自轉車　の無賃輸送は山陽鐵道を卒先者とし爾來各鐵道に及ぼしたるが官線鐵道も之に倣ひて廿一日より無賃輸送を開始する事となり本日の官報を以て其旨を告示したり（十九日）

△昨年中　全國に於て傳染病豫防救治に從事し感染して其職に殉したる者廿八人あり之を職務に依り、類別すれば左の如し

郡長　三　巡査　九　村長　一　醫士　四　看護婦　三　看護夫　一　諸種事務員　七　（二十日）

▲過去帳

△四代目竹本播磨太夫逝く（八月廿四日）

△相撲檢査役若藤永吉斃る（廿九日）

△法學博士男爵津田眞道沒す（九月三日）

△伯爵舊松代藩主眞田幸民卒す（六日）

△三代目杵屋勝三郎死す（十一日）

△梨園の巨星市川團十郎瞑つ（十三日）

▲教學　文藝（教育界雜事文藝界雜事紙面の都合にて次號に掲載）

▲文部省廢止問題　△帝國教育會　は臨時役員會を開き文部廢省反對に關して會の意見を公表するに決す（廿四日）　△文部廢省反對同志會　は本日教育俱樂部に幹事會を開き同志糾合の手續に着手することせり（廿六日）　△帝國教育會　本日臨時評議員會を開き文部廢省反對に就て會の意見書を内閣諸大臣に提出するの件を議す（廿七日）　△帝國教育會　文部省廢止反對に關し辻會長の起草せる意見書を全國教育家に配布し糾合するに決したり（三十日）　△學制研究會　は廢止反對運動を決議す（全上）　△東京府教育會　は本日臨時議員會を開き文部廢省の反對意見發表の件を議せり（九月五日）

▲教育界雜事　△文部省の最近調査に據れば全國一道三府四十三縣下に於ける府縣立中學校生徒概數は十萬四千八百六十四人此學級數二千七百廿此内譯第一學年生徒數二萬七千七百八十三人第二學年生二萬五千五百十九人、第三學年生二萬千五百二十九人第四學年生一萬七千三百三十三人、第五學年生一萬二千七百人等にして又補習科學級數百四十此生徒數三千四百九十人、又本年三月の學年末に於ける本科卒業生概數は一萬四十六人等なりと云ふ（八月廿三日）

最近著書

換葉篇

十千萬堂門下一列

生等相背りて師紅葉先生の病鬱を解かんが爲、各謹みて草すする所を輯めて、換葉篇と題する一篇を得たり、則ち枕上に奉贈して、鄙忱の十が一を表す、滿卷の蕪辭叱正を愧づる者の例の如く、今に及びて反りて靜養の累たらざらむを冀ふのみ、

紅葉山人發病一年後肖像入

新形雅装三百頁正價六十錢郵税八錢

- ●御草取　鏡花　泉鏡太郎
- ●宇宙の目的　風葉　小栗磯夫
- ●出獄　秋聲　徳田末雄
- ●花見車　白峰　中山重孝
- ●異形　雨泉　新井幸太郎
- ●幻燈　同　同人
- ●馬　苔花　鈴木陽
- ●靈藥　吟葉　篠山克己
- ●青切符　嶺葉　篠原璽瓏
- ●入營祝　四男　田村榮造
- ●年の湊　水葉　山里弦二郎
- ●公用　夏葉　瀬沼郁子
- ●四季五十二句　參人　星野仙吉
- ●四季十三　春石　北島英一
- ●藥信心　宙外　後藤寅之助

各宗本山名所圖會

天臺座主大僧正三津玄深師題字

石倉翠葉君著

青木香葩君畫

寶物古文書殿堂風景數十種挿入

善光寺名所圖會

全一冊

洋装頗美本二百六十頁

正價四十五錢

郵税八錢

善光寺は百濟より貢献せる一光三尊の阿彌陀如來を安置せる我國最古名刹にして殿堂雲表に聳え宗門差異老幼の別なく歸依渇仰する事最も深く其法要儀式の莊嚴なる他宗本山に於て到底見る可からず著者周到緻密なる史的觀察と精密なる實地調査とにより流暢の文を以て詳述す加之實物古文書等の寫眞版は錦上添花の妙あり宜しく座右の珍とせられよ

- ●本派本願寺名所圖會　正價六十錢　郵税十錢
- ●大谷派本願寺名所圖會　正價四十錢　郵税六錢
- ●日蓮宗本山名所圖會　正價五十錢　郵税十錢
- ●佛光寺名所圖會　正價二十五錢　郵税六錢
- ●日光名所圖會　正價六十五錢　郵税十二錢
- ●成田山名所圖會　正價三十五錢　郵税六錢

發兌元　東京本町　博文館